唐古・鍵遺跡
考古資料目録Ⅳ

―土製品・青銅器鋳造関連遺物・金属製品・玉製品・
骨角牙製品・繊維製品他・補遺編―

田原本町教育委員会

2019.3

国指定重要文化財　指定品の一部

例　言

1．本書は、唐古・鍵遺跡の出土品のうち、特に重要と思われる遺物について報告する『唐古・鍵遺跡考古資料目録』の第４冊目「土製品・青銅器鋳造関連遺物・金属製品・玉製品・骨角牙製品・繊維製品他・補遺編」である。
2．本書に収録した遺物は、唐古・鍵遺跡第３次～第102次までの調査で出土した遺物の中から選定したものである。発掘調査は、第３～ 12次までは奈良県立橿原考古学研究所、第13次以降は田原本町教育委員会が実施したもので、全て田原本町教育委員会所蔵の遺物である。
3．唐古・鍵遺跡第３～ 15次調査の出土遺物の遺構名の番号については、概報・報告書では全ての遺構を２桁で表記（ＳＤ-02等）としていたが、本目録では弥生時代中期・後期の遺構を100番台、前期の遺構を200番台とし、３桁（ＳＤ-102等）に改めている。
4．遺物写真の撮影は、亀村俊二・佐藤石文・田原本町教育委員会事務局文化財保存課職員による。
5．遺跡の調査概要と出土資料の全容については、『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ』(2015)を参照されたい。
6．骨角牙製品の動物種・部位は、丸山真史（東海大学）、宮崎泰史（大阪府教育委員会）の諸氏の同定によるものである。
7．繊維製品他005 ～ 007の材質は、小林和貴・鈴木三男（東北大学植物園）、佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）、能城修一（森林総合研究所）の諸氏の同定によるものである。
8．赤色顔料の同定については、奥山誠義 氏（奈良県立橿原考古学研究所）の同定によるものである。
9．本書の第Ⅰ～Ⅲ部は、藤田三郎が執筆し、清水琢哉・柴田将幹・江浦至希子・小松博子・榊原初美・中谷利枝・服部文子の協力を得た。附の遺物一覧表の作成は西岡成晃、指定管理台帳番号対照表の作成は柴田・西岡がおこなった。編集は、藤田・西岡がおこなった。

目　次

第Ⅰ部　個別資料の概要

1．土製品の概要…… 1

2．青銅器鋳造関連遺物・金属製品の概要…… 1

3．玉製品・骨角牙製品・繊維製品他の概要…… 4

4．補遺の概要…… 5

第Ⅱ部　唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ～Ⅳの総括…… 7

第Ⅲ部　考古資料目録

凡例

1．土製品…… 14

2．青銅器鋳造関連遺物…… 52

3．金属製品…… 120

4．玉製品…… 124

5．骨角牙製品…… 130

6．繊維製品他…… 144

7．補遺(絵画・記号・文様・弥生・搬入・特殊土器)…… 148

附

1．遺物図版…… 170

2．遺物一覧表…… 173

3．文献(発掘調査関係)…… 181

4．指定管理台帳番号対照表…… 184

第Ⅰ部　個別資料の概要

1．土製品の概要

唐古・鍵遺跡出土の土製品としては、人や動物、銅鐸、勾玉、甕を象った土製品、投弾や土錘、紡錘車などの生業に関わる道具類、このほか用途不明の土製品、焼成粘土塊等がある。本書に掲載した土製品の内訳は、人形土製品４点、分銅形土製品２点、鳥形土製品４点、動物形土製品４点、銅鐸形土製品19点、勾玉形土製品５点、甕形土製品６点、投弾14点、土錘６点、紡錘車（土器片利用や未成品を含む）41点、土器片円板20点、土器片加工品12点、有孔・無孔土玉各10点、不明土製品15点、焼成粘土塊・壁土９点である。これらのうち、人形や分銅形、鳥形、動物形、銅鐸形、勾玉形、土錘は、唐古・鍵遺跡出土資料の全てであり、いずれも唐古・鍵遺跡の多量の遺物の中にあって、極少数の遺物といえる。これらは生業に関わる土錘を除けば、祭祀に関係する特別な遺物である。紡錘車は、土製のものは10点程度で少なく、大半は土器片を利用したものである。土器片利用のものは、周縁を打ち欠き円板状に加工した段階のものやさらに縁辺を研磨する段階のものがあり、これらを「土器片円板」として土器片紡錘車の第１段階の加工品としているが、これらは数百の数量にのぼり、紡錘以外の用途も検討する必要がある。土器片紡錘車には、円板の中央を少しだけ穿った、孔が未貫通のものがあり、これらを「土器片紡錘車未成品」としている。

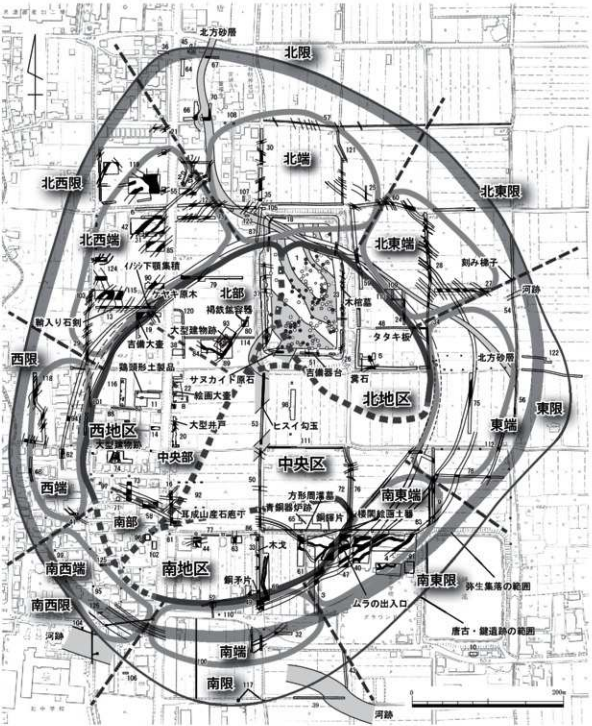
土製品の出土遺構は、環濠や区画溝・土坑・遺物包含層等であり、土器や木器・木製品、石器・石製品等に混在する形での廃棄で、特別な状況を呈するものはない。ただし、土製品045 ～ 052の投弾は、木器貯蔵穴の坑底ちかくで一括投棄されたもの、また、土器片加工品の土製品128 ～ 130・132・135や無孔土玉の土製品151・152はやや層位的なばらつきがみられるが、卜骨や吉備産大形器台、盾等祭祀遺物が一括廃棄された井戸内から出土したもの、勾玉形土製品の土製品034 ～ 037と用途不明土製品の土製品162・163は環濠の一角から多量のミニチュア土器（『目録Ⅱ』17頁）とともに出土したものであり、これらについては特別な性格が与えられる可能性がある。

また、出土地区で検討すると、銅鐸形土製品19点のうち、９点が南地区、５点が西地区北半であり、多い傾向がみられる。逆に北地区は１点で少ない。特に南地区は後期の所産のものが多く、後期段階に特化していく傾向がみられ、青銅器工房区との関連も考えられる。

これら土製品は、弥生時代前期から後期までのなかでみられるものが大半であるが、多くは中期以降のものである。投弾については弥生時代前期のものが多いが、中期以降にも残る可能性がある。銅鐸形土製品については大和第Ⅲ様式以降、分銅形土製品の一つは大和第Ⅳ様式の所産である。写実的な鶏頭形土製品は、大和第Ⅵ-3様式の所産である。

2．青銅器鋳造関連遺物・金属製品の概要

青銅器鋳造関連遺物　青銅器鋳造関連遺物としては、石製鋳型・土製鋳型外枠・土製品（高坏形土製品）・送風管・鉱滓・真土・銅塊・銅滴・銅鐸片・砥石がある。これらについては、既に『唐古・鍵遺跡Ⅰ―特殊遺物・考察編―』において詳細な説明をしており、本書においてはそれらの中の主



第１図　唐古・鍵遺跡の調査成果と地区区分図（Ｓ＝1/5,000）

要な石製鋳型・土製鋳型外枠・高坏形土製品・送風管を再録したものである。これら遺物は、唐古・鍵遺跡南地区、特に南東端にあたる第３・61・65次調査地を中心に出土し、その周辺にあたる第40・47・69・77調査地においては散在的になる。特に第65次調査地では、青銅器の工房跡と推測される炉跡状遺構を検出しており、ここを中心に半径20mほどの範囲に青銅器鋳造関連遺物が集中している。この範囲の遺物には接合するものが多く、この場所が青銅器工房区とみなして良かろ

う。第３次調査で青銅器鋳造関連遺物が多量に出土した溝（ＳＤ-104・ＳＤ-105）は、西側に隣接する第61次調査で検出した区画溝（ＳＤ-101Ｂ・ＳＤ-102Ｂ）の延長にあり、この両溝が工房の南側を区画する溝であった可能性が高い。

青銅器鋳造関連遺物は、型式的に大きく３期に分けることができる。銅鐸の鋳造において、第１期：石製鋳型、第２期：小型・中型の土製鋳型外枠、第３期：大型の土製鋳型外枠へと移行していくもので、石製から土製鋳型へと技術転換される段階の資料となる。これらの資料は地区的にほぼ同一のところから出土しており、型式学的な変遷を踏まえると、この場所が工房として一定期間占有されていたと考えられる。これら青銅器鋳造関連遺物は、共伴土器から所属時期をおさえられるものは少ない。弥生時代後期以降の遺構の掘削に伴い混在するものや、遺物包含層中に含まれることになるものが大半であり、所属時期を明確に決定できるものは少ない。それらの中で、最も古いものは送風管（鋳造関連131）１点で大和第Ⅲ-4様式である。次期は土製銅鐸鋳型外枠（鋳造関連012・016）で大和第Ⅳ-1・２様式所属のもの、それ以外は大和第Ⅴ-1・２様式のものが大半を占める。また、大和第Ⅵ-3・４様式の遺構に所属するものがあるが、これら遺構は前述したとおり大和第Ⅳ・Ⅴ様式の土器を多く含んでおり、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構掘削に伴い混在したものと考えられ、全体の状況から判断すると大和第Ⅳ～Ⅴ様式の所産としてとらえられるものであろう。

本書の青銅器鋳造関連遺物の項には含めなかったが、これら遺物とともに出土した第61・65次調査出土の砥石の一部『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅲ』石製品044・045・047・061・065・069）については、青銅器生産に関わる遺物の可能性が高いと考えられる。

金属製品　唐古・鍵遺跡から出土した金属製品には、青銅製品32点と鉄製品４点（板状鉄斧１・鉄鏃２・鉈１）がある。最も多いのは青銅製の銅鏃で、大半を占めている。銅鏃は小形の柳葉形が多いが、大形で逆刺のあるもの（金属009・010）もわずかにみられる。大形銅鏃（金属009）は、鏃身に孔をあけており、東海地域との関連も想定する必要があるかも知れない。また、金属008の銅鏃は、他の銅鏃とは銅質が異なり、暗緑色を呈するもので剣などの武器形青銅器の転用と思われる。

他の青銅製品としては、銅釧３点（第69次調査２点〔金属015・016〕・第90次調査１点〔金属014〕）・銅鐸片１点（第77次調査〔金属017〕）・小形仿製鏡１点（第14次調査〔金属012〕）や巴形銅器１点（第23次調査〔金属013〕）、鑿に転用された細形銅矛片１点（第33次調査〔金属011〕）がある。青銅器鋳造関連遺物が多量に出土した第３次調査では、用途不明の有孔円板（金属018）や銅鏃（金属003）が出土している。有孔円板は、中央に0.8㎝の孔を有する直径４㎝、厚さ0.5㎝の円板で、片面には幅0.4㎝の凹状の溝をもつものである。中央の軸受孔部分は、仕上げ時のケズリ痕跡がみられるが、他の部分は鋳上がり時のままと思われ、表面はざらついている。なんらかの部品の一部として作られたものであろう。出土地点的にも鋳型類が多く出土した地点と重なっていることから、その時点で鋳造・保有されていたと考えてよいものであろう。この第３次調査地を含む南地区で青銅器の出土点数が多いのは、青銅器鋳造との関連で考えることができるであろう。また、この地区出土の銅鐸片は、通常の銅鐸より厚みがあり、湯切れ部分が残るもので鋳造に失敗した銅鐸をスク

ラップにしたと推測されるものである。

鑿に転用された細形銅矛片は、製品として、あるいは鑿として本遺跡に持ち込まれたのかが大きな問題であるが、大和第Ⅱ-2様式の土坑出土で時期が特定できる資料として重要で、近畿地方における初期段階の青銅器のあり方を考える上で重要な資料となる。

3．玉製品・骨角牙製品・繊維製品他の概要

玉製品　　玉製品は微細な遺物のため、偶発的に出土発見されたもので特別な出土状況を呈するものは少ない。多くは、井戸等において堆積物を持ち帰り、0.1㎝の篩で水洗した結果、見いだしているものである。また、古墳時代～中世の遺物包含層から出土しているものもあり、弥生集落以降の古墳時代の遺物も含まれている可能性がある。また、副葬品として出土したものには、第19次調査の壺棺（ＳＸ-101）出土の管玉（玉製品022）とガラス極小玉（玉製品056～058）がある。このほか、第62次調査では壺棺の可能性のある土器内（ＳＤ-101）から水晶玉１点（玉製品041）が出土している。

玉製品には、石製とガラス製がある。石製は碧玉製・翡翠製・水晶製などであり、勾玉・管玉・丸玉・小玉の製品が作られている。これらの中で注目されるのは、翡翠製品である。総数10点で、内訳は勾玉７点・丸玉１点・小玉２点である。特に勾玉７点のうち、重要なのは大形の勾玉（玉製品006・008～ 010）である。玉製品006は尾部のみの欠損品であるが、復元すれば４㎝ほどの大形品になる。これら大形の翡翠勾玉は、中期後半から後期初頭にみられ、後述する水晶玉と同様な傾向を示している。水晶玉（玉製品040～ 047）は８点で、これらはすべて算盤玉の形態である。時期的には、大和第Ⅴ様式を前後する時期の所産である。この時期は、ガラス玉の再加工品（玉製品071～ 076）も多く見られ、水晶玉とともに丹後地域からの流入品の可能性も考えられる。

ガラス製品は総数64点で、勾玉・丸玉・極小玉・玉再加工品・管玉と、類例のない第80次調査の大玉あるいはガラス素材と推定されるもの（玉製品081）がある。ガラス勾玉（玉製品080）は１点のみで、青銅器鋳造関連遺物が多く出土した第３次調査の小溝から出土しており、青銅製品とともにガラス製品の製作もおこなっていた可能性がある。

骨角牙製品　　唐古・鍵遺跡では、木製品とともに獣骨や骨角牙製品も良好な状態で出土するものが多い。大半は食料とされたイノシシやシカの大形動物骨であり、このほか集落周辺に生息していたタヌキやキツネ等の中形動物、ハタネズミやドブネズミ等の小動物などの骨やそれらを利用した製品が出土している。これらの骨の中ではシカの骨が多く利用されたようである。加工のしやすい鹿角、湾曲が少なく長い部材が採れる中手骨や中足骨等が主である。ただし、製品化されているものについては、元の形状を留めているものは少なく、動物種・部位を特定できるものは少ない。時期的には、中期から後期初頭のものが多い。

鏃や弭、工具柄、ヘラ等は、鹿角が多く利用されている。なかでも斧柄間接具（骨角牙027）と呼んでいる鹿角製品は、斧柄の斧台先端に差し込みその先端に石斧を設置できるようにしたもので類例がない。また、特殊なものとして鹿角に線刻17条を入れたもの（骨角牙057）がある。

長さ10㎝を超えるような針(骨角牙019～021)や用途不明品(骨角牙058･059)は、シカの中手骨・中足骨と推定される骨が利用されている可能性が高い。また、それらの部材（骨角牙062 ～ 064）も出土している。

牙製品では、イノシシの牙を利用した釣針(骨角牙010)、ヘラ(骨角牙039)、垂飾品(骨角牙045)、用途不明品（骨角牙054）がある。この他、貂の牙を利用した垂飾品（骨角牙044）もある。また、垂飾品としては、エイ・サメ類の椎骨を利用したもの（骨角牙046・047）が出土している。海産のものとして鯨類の骨を利用した紡錘車（骨角牙026）がある。

イノシシの尺骨を利用した刺突具（骨角牙014）は、唐古・鍵遺跡では１点のみであるが、鳥取県青谷上寺地遺跡に類例があり共通する部材と形状は重要である。

素材は不明であるが、[1]長さ 1.2 ～ 2.2㎝の極小製品として縫針（骨角牙022 ～ 024）がある。これらの針は、基部に小孔をあけ、先端を尖らせた精巧な製品である。

祭祀具として、イノシシやシカの肩甲骨を利用した卜骨（骨角牙066～078）がある。これらは、いずれも中期前葉から後期初頭に属するものである。ただし、時期的に焼灼の位置が異なり、肋骨面からみて肩甲頸よりの肩甲下窩で骨の厚みのある部分の焼灼は大和第Ⅲ-1様式までで、棘下窩の骨の薄い部分の焼灼はそれ以降のものが大半を占める。また、整地しているものは、骨角牙070 ～ 072・078があり、骨角牙071を除き他は大和第Ⅴ-1様式のものである。

このほか、イノシシの下顎を穿孔したもの（骨角牙079 ～ 083）も出土している。時期的には、弥生時代前期から後期初頭のものである。骨角牙079は抜かれた牙孔に木製牙を差し歯していた希少なものである。

繊維製品・編組製品　唐古・鍵遺跡から出土した繊維製品は非常に少ない。炭化していたため、残ったものである。麻布片（繊維製品他001）は中期初頭の土坑から出土したもので、これを分析した布目順郎(富山大学)は「大麻製で縑（かとり）と同じ糸構造と絹に近い細密さを具えた第一級品の布」とみている。この布は類例がなく、その織り方から大陸製品の可能性も指摘している。この土坑からは、麻縄（繊維製品他002）も出土している。

編組製品は木製品とともに保存状態は良いが、断片のものが大半で製品が特定できない。それらのなかで、ほぼ全形がわかる弥生時代前期と中期の箕２点（繊維製品他006・007）がある。編み方は同じで、幅広のツヅラフジ材にヤナギ属の当年枝丸材を２本１単位で編んでいる。このほか、穂摘みを示す希有な資料として炭化した稲穂束（繊維製品他008）がある。また、食物としては炭化籾や炭化米も多く出土している。その中には、壷あるいは甕内部で炭化した炭化米が内面の形状を呈するもの（繊維製品他012）がある。

4．補遺の概要

本書において補遺として扱った遺物は、既に刊行した『唐古・鍵遺跡考古資料目録』のⅠ・Ⅱ・Ⅲにおいて収録できなかった奈良県立橿原考古学研究所保管の第３～ 11次調査の弥生土器（絵画・記号・文様・弥生・搬入・特殊土器）と、目録刊行と平行して進めてきた唐古・鍵遺跡出土品の再

整理によって新たに見つかった絵画土器や収録遺漏した土器である。

絵画土器では、同一個体と思われる新たな絵画土器片がある。特に注目されるのは、第47次調査出土の楼閣を描いた絵画土器と同一個体の破片（補遺絵画125）である。この破片は、別物の楼閣の屋根を描いたと推測されるもので、２棟の楼閣と１棟の大型建物が描かれていた可能性が高い。第３次調査の細頸壺に描かれた蛙あるいは水棲昆虫（補遺絵画128）は、脚から波紋を描くもので情景的なものを表現している点で重要である。このほか、退化し稚拙な描き方をしている鹿（補遺絵画127）と龍（補遺絵画129）の絵画がある。

記号土器では、弥生時代前期と後期のものを収録した。弥生時代前期には記号土器は少ないが、ほぼ完形の記号土器（補遺記号094・095）がある。補遺記号094は「↓」、補遺記号095は「U」字形で、記号の基本形を描いている。後期の記号土器では、第３次調査Pit-105から一括出土した資料として、絵画土器（補遺絵画130）と記号土器（補遺記号096～098・102・104）がある。後期の土坑（井戸）からは完形の長頸壺が多く出土し、その中に記号が描かれるものが多い。これらの資料もそれと同様である。

このほか、第３～11次調査で出土した彩文土器や渦巻文などの土器文様・縄文土器・弥生土器・搬入土器・ミニチュア土器・異形土器・赤彩土器等がある。これらの中で注目される土器としては、大和第Ⅳ-2様式のPit-106（井戸）から出土した水差形土器２点（補遺弥生142・143）、対馬海峡沿岸産と推定される甕片（補遺搬入054）や山陰地方の鉢（補遺搬入057）・鼓形器台（補遺搬入058）、方形高坏（補遺特殊137）、赤彩土器（補遺特殊140・141）がある。

註　１）鳥取県埋蔵文化財センター「青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告５　骨角器（１）」『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告32』 2010

第Ⅱ部　唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ～Ⅳの総括

唐古・鍵遺跡の発掘調査は、1977～ 1981（昭和52～ 56）年の奈良県立橿原考古学研究所による第３～ 12次調査、1982（昭和57）年以降の田原本町教育委員会による発掘調査が継続的に実施され、2018（平成30）年12月には第126次を数えるに至っている。調査成果については、報告・概報・年報という形で逐次、進めてきたが、長期間にわたって経営されてきた大規模集落の実態は、調査面積が１割も満たない状態であり、その全体像を把握することはかなり困難である。特に拠点的な大規模集落特有の多種多様かつ膨大な遺物群を把握することは難しい。今回の唐古・鍵遺跡の考古資料目録の刊行は、総覧的に唐古・鍵遺跡出土遺物を把握できるように努めたもので、平成26～ 29年度の４ヶ年をかけて実施した。その間には、奈良県立橿原考古学研究所が実施した第３～12次調査の1,241箱分の返還を平成28年度に実施したため、『目録Ⅳ』に収録となったものがある。現在、第３次調査以降の遺物は田原本町教育委員会で一括保管しているが、詳細整理まで終了しているものはない。また、調査研究の進展により過去の整理の見直しも必要になっている。このような状況であるが、概ねこの『目録Ⅰ～Ⅳ』の収録遺物が唐古・鍵遺跡の表層的部分は体現しているとみてよい。

唐古・鍵遺跡出土遺物の中で、弥生土器は全体の９割程になると推定されるが、そのうち、収録したのは完形土器を中心とするごく僅かな遺物である。収録した完形・半完形の土器は、土器編年上に位置づけられる弥生土器や搬入土器、記号土器を多数ある中から選択したものであるから、実態としては今後、欠損品も含め検討する必要がある。その他、絵画土器や異形土器は、唐古・鍵遺跡においても極めて少ないものであり、ほぼ全点の収録に努めた。

木器・木製品、石器・石製品においては、完形にちかいものを優先的に選択したが、収録した製品は器種的にほぼ網羅しているので、近畿地方の拠点集落の実態を表しているとみてよい。上記以外の土製品・青銅器鋳造関連遺物・金属製品・玉製品・骨角牙製品等は、唐古・鍵遺跡においても少数の遺物であるが、他の遺跡では保有していないものも多く、唐古・鍵遺跡の特殊性といえる。

さて、各目録において種別ごとに個別説明をおこなったが、遺構ごとのまとまり（一括性）については触れていないので、この点をまとめておく。唐古・鍵遺跡の場合、土坑や環濠等から出土した遺物は良好な出土状態を示しており、一括性の高いものである。種別を超えて一括性を示す遺物について、第２表にまとめた。一括性の高い遺構としては土坑や井戸があり、そのうち、弥生時代中期から古墳時代前期の井戸では供献土器を主体となし、それらに付随する形でその他遺物が伴う。特に後期以降の井戸においては、多量の土器が供献された。目録では、時期が重複するものや器種が同じものについては、その一部、または代表的なもののみを収録している。南地区の第３次調査Pit-105・第33次調査ＳＫ-125・第63次調査ＳＫ-106、西地区中央部の第14次調査ＳＫ-106・第74次調査ＳＫ-119、西地区北部の第37次調査ＳＫ-2103・ＳＫ-2122・ＳＫ-2130等の井戸はその代表的なもので、豊富な遺物を含む良好な資料である。特に第37次調査のＳＫ-2130（大和第Ⅲ-3様式）は、供献土器の中に搬入土器を含み、卜骨や縫針、磨製石剣を伴っている。また、第37次

第１表　唐古・鍵遺跡考古資料目録　掲載遺物総点数表

	目録Ⅰ	目録Ⅱ	目録Ⅲ	目録Ⅳ	計
絵画土器	124			7	131
記号土器	93			12	105
土器文様	47			9	56
弥生土器		136		10	146
搬入土器		53		7	60
特殊土器		129		12	141
木製品			218		218
打製石器			353		353
磨製石器			226		226
石製品			90		90
礫石器			69		69
土製品				181	181
鋳造関連遺物				144	144
金属製品				20	20
玉製品				81	81
骨角牙製品				83	83
繊維製品他				12	12
計	264	318	956	578	2,116

調査のＳＫ-2122（大和第Ⅴ-1様式）では、供献土器、記号土器、一木鋤未成品、動物形土製品、縫針、水晶玉、ガラス玉（再加工品含）など多彩なものがある。

弥生時代前期から中期初頭においては、西地区の第20次調査ＳＫ-215や南地区第33次調査ＳＫ-208等の木器貯蔵穴がある。これらは、木器未成品が残置されたところに土器等が投棄されたもので良好な出土状態を呈するものである。

環濠や区画溝の遺物においては、再掘削等がおこなわれているため層位的にみていく必要があるが、弥生時代後期には土器等が一括廃棄されたもの（南地区第33次調査ＳＤ-109・第40次調査ＳＤ-101・第47次調査ＳＤ-2101、北地区第24次調査ＳＤ-107等）や環濠再掘削時に木器を貯蔵したもの（南地区第３次調査ＳＤ-102・第69次調査ＳＤ-1109）がある。

このように唐古・鍵遺跡の調査においては、多量の遺物が出土する地区で良好な遺構が多い。特に西地区中央部（第14・20・74次調査）や西地区北部（第37次調査）、南地区（第３・33・61・65・69次調査）にはその傾向がみられる。今後は、これら遺構の遺物内容について報告できるように努めていきたい。

第２表　各種遺物共伴関係一覧表

調査次数	遺構名	時期（大和様式等）	土器	木器・木製品	石器・石製品	その他
第3次	Pit-106	Ⅳ-2	補遺（弥生）143・143			鋳造関連098
	Pit-105	Ⅵ-2	補遺（特殊）131・132、補遺（絵画）130、補遺（記号）096～098・102・104	木製品045・078		鋳造関連053-1、玉製品068
	SD-102	Ⅴ	補遺（特殊）130・134・136、絵画011・026・054、補遺（記号）101、補遺（文様）053・055	木製品010・033・037・038・041・052～054・057・076・126・188・190・206・208	礫石器001	鋳造関連020・099
	SD-103 N	Ⅵ 庄内式	補遺（搬入）059、補遺（特殊）133・139、補遺（文様）052			土製品159
	SD-104	Ⅴ	補遺（特殊）138			鋳造関連047・105・107、玉製品080
	SD-105	Ⅴ	補遺（特殊）138			土製品029、鋳造関連011・020・072-1・080・104
	SD-104・105	Ⅴ	補遺（特殊）138、絵画084			鋳造関連004-1・021・028・034・075-1・087-1・090-1・094-1・095・101・109・111・113・116・124-1・130-1・133
	SD-106	Ⅲ・Ⅴ	補遺（弥生）140、絵画053・086	木製品002・107・154～156・174	石製品049	土製品039、鋳造関連023-1・031・100-1
	SD-107	中期	補遺（弥生）138・141、絵画055	木製品086	礫石器002	土製品141、鋳造関連019-1・037・054・069・087-1・100-1・125
第5次	SK-102	布留0式	補遺（弥生）146、補遺（特殊）140・141	木製品169		
第13次	SK-107	Ⅳ-1	弥生075・076、記号009	木製品074		
	SD-102	Ⅳ-2・Ⅴ-1	弥生078～082、特殊063	木製品013・109・123・134・183	打製211	繊維007
	SD-104	Ⅵ-3	弥生123・124、絵画099、記号024			
	SD-106	Ⅴ	文様036			土製品065・137
	SD-106B	Ⅳ・Ⅴ-1	絵画102、記号050	木製品089		骨角牙042・050
	SD-106C	Ⅲ-3・4・Ⅳ	特殊011・068、絵画050-1・105、文様028	木製品047・090・110・158・182	打製096・098・113、磨製036・040・041・222、石製品040	土製品144・175、骨角牙002・040
	SD-106D	Ⅲ-1	特殊064、弥生045		打製093・260、磨製154	土製品015、骨角牙004
第14次	SK-101	Ⅵ-2	弥生122、記号045・060		打製257	
	SK-106	Ⅵ-3	弥生117～120、搬入042～044、特殊054・055、記号014・038・053・089、文様041			鋳造関連134
第16次	SD-101	Ⅱ-3・Ⅲ-3・4		木製品009	打製097・243・290・297・299、磨製115・166	
	SD-105	Ⅰ-1・2	特殊001		磨製062～064・119	土製品060・174
	SK-102	Ⅰ-1・2	弥生014・024・025	木製品030・141・201	磨製071、石製品076	
第19次	SK-102	Ⅴ-1	特殊029	木製品049・050	礫石器009	土製品107
	SK-105	Ⅲ-3	搬入011・028、特殊097			土製品087
	SD-202	Ⅲ-2・3	特殊009			骨角牙058・059・080
	SD-203	Ⅱ-2	特殊067	木製品008・072・073・106・217	石製品037、礫石器019	骨角牙020
	SD-204	Ⅳ・Ⅴ	搬入007・031、特殊017・030・066・069・098-1・102、絵画035・101-1・102、文様022・034		打製101・102・106・114・180、磨製049・185・191、石製品007・026・062・083、礫石器011・029・051	土製品013・022・054・083・104・123・124・146・148・176・177、玉製品007、骨角牙063・071、繊維003
	SK-101	庄内式				玉製品022・056～058
第20次	SK-215	Ⅰ-2	弥生016～019、搬入001、特殊124・125、記号001、文様016	木製品003・004	打製349	土製品045～052、骨角牙060、繊維009・010
	SK-101	Ⅲ-1	弥生043、特殊005・105	木製品085	打製294・295・296、礫石器022	骨角牙043・062
第22次	SK-105	Ⅲ-4	弥生064～067		磨製180、石製品071	繊維004
	SK-101	Ⅳ-1	特殊020～022		打製044	土製品006
	SK-1101	Ⅱ-3	弥生036～038	木製品027		

調査次数	遺構名	時期（大和様式等）	土器	木器・木製品	石器・石製品	その他
第23次	SK-123	Ⅱ-2	搬入021、文様018		打製095	骨角牙016、繊維001・002
	SK-153	Ⅰ-2	弥生026、特殊082	木製品170	石製品008	
第24次	SK-103	布留式		木製品165	磨製196、石製品067	土製品178、玉製品014、骨角牙057
	SD-107	Ⅵ-3	弥生121、搬入045、特殊057、記号010・093、文様038-1	木製品167		
第33次	SK-125	Ⅵ-2	弥生109～115、記号012・013・020・025・042・074			
	SK-208	Ⅱ-1	弥生029～031	木製品022・058・059・218		
	SD-109	Ⅴ	特殊039・043・044・046、絵画069・096、記号021・030・073・076		打製108、石製品085	土製品091、金属010、玉製品035
第34次	SD-102	Ⅵ-4	搬入033～039、特殊086、記号040			玉製品070
	SD-102C	Ⅲ-3・4	搬入006、特殊010・094		磨製197	
	SD-103	Ⅵ-2・4	搬入041、記号041・049・087			
第37次	SK-2103	Ⅴ-1	弥生083、記号065	木製品057		土製品012、玉製品044・045・065・071・073、骨角牙022・024・049
	SK-2114	Ⅲ-2	搬入017、記号005	木製品079	打製192	骨角牙082
	SK-2116	Ⅱ-3	弥生041、搬入023、記号003・004	木製品105	打製163・237・239、磨製202、礫石器056	骨角牙013・067・068
	SK-2122	Ⅵ-1	弥生099～105、特殊047～050、記号059・071	木製品177	打製219・241・242	土製品032、玉製品063、骨角牙031・046・047
	SK-2130	Ⅲ-3	弥生052～058、搬入014・015、特殊012・013、文様021		打製183、磨製214	土製品067、玉製品069、骨角牙010・023・051・076・077
	SK-2139	Ⅱ-3		木製品039	打製185、石製品082、礫石器032	骨角牙055
	SD-2201	Ⅱ-1			打製028、礫石器007	土製品126、骨角牙044
	SD-2202	Ⅰ-2	弥生020・021		打製309、石製品079	土製品131、骨角牙037・079
	SK-4101	中期			打製312～317	
	SK-4201	Ⅰ-1・2	文様004	木製品205		土製品106・181、骨角牙081
第38次	SK-101	布留式	土師器127・131、搬入050			玉製品018・067・079
第40次	SK-101	庄内式	土師器125・126、搬入052	木製品091～102		
	SD-101	Ⅴ・Ⅵ-3・4	弥生096、搬入040、特殊079、記号082、文様044-1・補遺（文様）056		磨製016・210	土製品034～037・062～064、鋳造関連041・085・100-1、金属019
	SD-102B	Ⅱ-2・Ⅳ-1	搬入010	木製品148	打製201	
第44次	SD-103	Ⅲ-4	搬入018		打製103・179・202、石製品075	土製品019
第47次	SD-2101	Ⅴ・布留式	弥生084～092、補遺（弥生）144、土師器132・133、補遺（搬入）054、特殊107、絵画082・補遺（絵画）129、記号016、文様044-1・補遺（文様）056	木製品127・203	磨製171	鋳造関連011・073・112・117-1・121
	SD-2102	Ⅵ-4	特殊084			土製品059、鋳造関連046
	SD-2105	Ⅲ-2・Ⅳ-2	弥生050、絵画017-1	木製品083	打製020・216	
第48次	SX-1102	Ⅳ-1	弥生070・071、絵画089、記号008、文様029			
第50次	SD-106	Ⅲ-3	絵画045、文様023	木製品006	磨製216	
第51次	SK-104	Ⅴ-1	搬入008・030、特殊031、絵画022-1	木製品019・118・135	打製085・171、磨製211	土製品128～130・132・135・153・152、玉製品042・072、骨角牙061・072
	SD-103	Ⅲ-1・3・Ⅳ-1	弥生073、文様025・027		打製092・236・244・270・288・293、磨製181	土製品002・081、骨角牙003・006・008・034
第53次	SR-101A		搬入004・005、特殊002、絵画031・049・070、記号002		打製002・015・021・027・069・090・110・176・298・310、磨製017・023・026～028・045・054・126・138・159、石製品022・025、礫石器034	土製品086・111・114・122・125・164・180、玉製品042・072、骨角牙061・072
	SR-101B			木製品005・125・129	打製003・014・088・091・284、磨製032・146・223・159、石製品022・025、礫石器035	玉製品038、骨角牙018

調査次数	遺構名	時期（大和様式等）	土器	木器・木製品	石器・石製品	その他
第58次	SK-101	Ⅳ-1			打製273、磨製029、礫石器030	土製品075・141、骨角牙025
第59次	SD-1102	Ⅲ-3・4	絵画003-1		打製190、磨製136・215	玉製品054・055
	SK-3130	Ⅲ			磨製011・019・024・031・033・046	
	SK-3135	Ⅱ-3		木製品132・181・213		骨角牙074
第61次	SD-1018	Ⅴ-1	特殊080、絵画039・065・083		打製050・146・151・182	鋳造関連008-1・010-1・015・019-1・057・073・084-1・088-1
	SD-1028	Ⅴ-1	特殊033・035、絵画019・023・077・087・111-1		磨製218	土製品073・085・103・105・145、鋳造関連008-1・010-1・020・029-1・054・065・066・084-1・087-1・096-1・098・106・113・127・057・084-1・088-1、玉製品020
第62次	SD-101	Ⅳ-2	絵画006-1・028、記号015・046・080・090		打製173	玉製品041
第63次	SK-106	Ⅵ-3	記号026・039・061・068・077・078			
	SD-103A	Ⅴ・Ⅵ-3	特殊058・072	木製品034～036		
	SD-103B	Ⅴ	絵画004-1・007-1・079	木製品080	磨製043	土製品077
第65次	SK-105	Ⅳ	特殊099	木製品112	打製001・175	鋳造関連030-1・036・084-1・088-1・110・123
	SK-115	Ⅴ-1		木製品211	石製品045	骨角牙078、鋳造関連017・091
	SK-134	Ⅴ-1	記号083	木製品087		鋳造関連045・050・084-1・092、玉製品074～076、骨角牙011・012・070
第66次	SR-201	Ⅰ-1	縄文001、弥生002			土製品040・057、繊維005
第69次	SK-1130	Ⅲ-3	特殊114・115	木製品082	打製066	
	SK-1137	Ⅲ-3	弥生061・062、特殊089・090		打製031	玉製品021
	SD-1101B	Ⅴ			打製164・181、磨製001	鋳造関連039
	SD-1102	Ⅵ-3	記号051		打製081、磨製056、石製品050	
	SD-1104	Ⅳ～Ⅵ	特殊040、絵画010・118-1・123-1		打製076・122	土製品033、玉製品023
	SD-1109	Ⅳ～Ⅵ	弥生098・108、搬入049、特殊028・042・045・051・052、絵画097・119、記号011・022・028・029・033・034・044・048・075・086、文様035	木製品032・051・191	打製124・131・156、磨製034、礫石器005・033・035・049	土製品023・150、玉製品050
第72次	SD-107	Ⅳ-Ⅴ	特殊008、絵画008-1・009-1・081-1・113-1		打製280、礫石器025	
第74次	SK-113	Ⅲ-2	弥生049	木製品007・173	打製019	玉製品040、骨角牙027
	SK-119	Ⅵ-3	特殊056、記号017・019・055・057・058、文様046	木製品176		
第76次	SD-1106	Ⅵ-1-3	弥生106・107、記号018			玉製品030
第79次	SK-120	Ⅵ-1	記号023・035・062・063			
	SD-1018	Ⅲ-Ⅳ		木製品046・139・142・159	打製215、石製品012、礫石器040・050	骨角牙014・041・075
	SD-103	Ⅲ	特殊104		打製099、磨製025、石製品004	土製品108
第80次	SD-101	Ⅳ	特殊024、絵画002-1		打製147・274、石製品046	土製品018・115・149・154、玉製品003・009・010・012・081-1
第89次	SD-1114B	Ⅳ	特殊025、絵画014-1・110-1		打製195・308、石製品039	
第90次	SD-101C	Ⅴ-1		木製品020・064・065・204・210		
第91次	SD-1018	Ⅳ～Ⅵ	搬入047、絵画016-1、018-1・085・117、記号054・067・079・081・085・092、文様042		石製品005、礫石器024・028-1・2・048	土製品078
	SD-103	Ⅴ～庄内	特殊026・092、文様043		磨製162	土製品004
第93次	SK-2120	Ⅲ-1・2		木製品124	打製068	土製品098・099、骨角牙029
第115次	SD-1018	Ⅳ-1		木製品111・138・160	打製214	

第Ⅲ部　考古資料目録

第Ⅲ部　凡例

1．遺物は、土製品、青銅器鋳造関連遺物（掲載番号においては、「鋳造関連」という）、金属製品、玉製品、骨角牙製品、繊維製品他、補遺の順に掲載した。

2．所収遺物の時期については大和土器編年に従い、「大和第○-□様式」と記載した。土器以外の遺物の所属時期は共伴した土器を指標としたが、複数片が接合するものには、調査次数や遺構が異なるものや、攪乱によって層位が異なる、あるいは包含層遺物となり、当初の所属時期を表していないものも多い。しかし、ここでは発掘時情報のまま記載した。また、土器包含層や中世遺構等からの出土である等の理由で、詳細な時期を判別できないものは「弥生時代」「弥生時代前・中・後期」等と記載した。

3．遺物の掲載に際し、土製品・青銅器鋳造関連遺物は「MD」(一部土製品は「ME」)、青銅器鋳造関連遺物の一部・金属製品は「MM」、玉製品は「MS」(石製）および「MG」(ガラス製)、骨角牙製品は「MK」、繊維製品・編組製品は「MC」、穀物類は「MT」、補遺の土器は「MP」から始まる管理番号を付した。遺物が複数の破片等にわたるものは、それぞれの写真に管理番号の枝番を付した。

　また、調査次数ごとに管理する製品コードを付した。頭３桁が調査次数、続く５桁を基本的には器種ごとに順に付した。末尾のアルファベットおよびカタカナは遺物種ごとの略号である。これら所収遺物は国の重要文化財指定を受けたため、遺物名欄の右隅に指定番号を付した。

4．遺物の大きさの単位はcm、重さの単位はgとし、小数点第２位以下を四捨五入し、第１位までを記載した（極小の遺物は小数点第２位まで)。なお、複数点の遺物を単一の観察表にまとめているものは、法量が残存値である場合（　）を、復元値である場合 ※ を用いて表記した。

5．補遺は『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ』および『Ⅱ』から遺漏した第３～11次調査分の絵画土器・記号土器・土器文様・弥生土器・搬入土器・特殊土器と、目録刊行後の再整理によって新たに見つけた同一個体の絵画土器片等とした。新規ピックアップ遺物の各掲載番号は、『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ』および『Ⅱ』の続きとした。

6．掲載した写真の縮尺は任意である。

7．掲載遺物の未接合破片・小片は、巻末に附．遺物図版として掲載した。

8．説明文横の出土情報は、複数片接合するものや同一個体片が多くあるため、所収品の代表となるものとした。また、目録Ⅰ～Ⅲを含めて、取上（土-301等）情報のあるものについては、一部土色を省略したものがある。青銅器鋳造関連遺物の詳細については巻末の附．遺物一覧表を参照されたい。

9.『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ』～『Ⅲ』の刊行後、これら掲載遺物の大半が重要文化財に指定された。これらを含め『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅳ』では前掲遺物以外と補遺を収録し、指定された1,921点について別途指定番号を付し、附．指定管理台帳番号対照表にまとめた。

附　凡例

1．写真中の数字は、遺物管理番号（Mコード）の枝番である。

2．枝番を付していない残片は、主体遺物の未接合破片（細片等）である。

3．青銅器鋳造関連遺物は、『唐古・鍵遺跡Ⅰ』で報告しているものについては、遺物一覧表の備考欄に掲載番号を〔　〕で記載した。

001　土製品（人形）　指定 0623

001

本土製品は、南地区の第69次調査の土坑から出土した。樽形の胴部に細長い円筒状の頭部が作り出されたもので、いわゆる「ウイスキーボンボン」のような形を呈している。手捏ねであるが、形は整っており丁寧に仕上げている。手足と首の表現はなく、胴部から一体的に頭部に至る。頭頂部は平坦である。鼻は小さな粘土粒を縦長に貼り付け高くし、鼻孔２つを刺突で表現している。また、目は右目が無く左目のみで、口と同様、ヘラの刺突で表現している。共伴土器は大和第Ⅱ-3様式である。

第 69 次調査
遺構：SK-1118
層位：第 4 層
土色：黒色粘質土（青灰色シルト混）
取上：　—
№：1249
共伴：大和第Ⅱ-3 様式
長さ：5.3
幅　：2.1

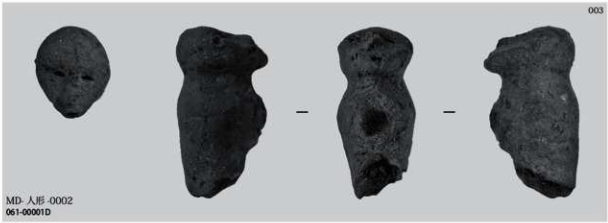
002　土製品（人形）　指定 0624

002

本土製品は、北地区の第51次調査の区画溝から出土した。頭部を欠くが、トルソー形にちかい形態で、上胴部は扁平でやや前屈みに作っている。腰部分は括れ、底面は広く面をもち安定させる。腕部分はやや突出させる。全体はミガキ調整をおこない、丁寧に仕上げている。共伴土器は大和第Ⅲ-3様式である。

第 51 次調査
遺構：SD-103
層位：第 3 層
土色：黒粘
取上：土 -301
№：58
共伴：大和第Ⅲ-3 様式
残存高：5.9
幅　：4.7

003　土製品（人形）　指定 0625



本土製品は、南地区の第 61 次調査の黒褐色土層Ⅱから出土した。頭部～胴部からなり、胴部下端は欠損している。脚の表現があったかは判断できない。また、両腕は当初より表現されていないが、胸にあたる部分は丸く大きく突出し、その部分に剥落痕があることから前面に何かを持っていたか、別物に取り付けられていた可能性がある。胴部から短く括れ、首と頭部を表現する。頭部は、逆三角形の顔部分が斜め上方を向き顎を突き出した状態に表現され、後頭部は丸くなる。顔は、丸みのある後頭部に対し、一段低く平らに表現し、目・口は刺突で、鼻は粘土を盛り上げて鼻孔まで作っている。耳は側面に丸い粘土粒を盛り上げ、その中央を刺突することで表現する。顔は一部欠損し、保存状態が悪いが、胴部後側では赤色顔料の付着がみられる。共伴土器は大和第Ⅵ-3・4 様式である。

第 61 次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土Ⅱ
取上：　－
№：194
共伴：大和第Ⅵ-3・4 様式
残存高：5.0
幅　：2.7

004　土製品（人形）　指定 0626

本土製品は、南東端の第 91 次調査の環濠から出土した。縦長の板状の一面を平坦にして正面に、反対面はやや丸みをもたせ背中とし、前屈みになる土製品である。手足の表現は無く、頭部と胴部を一体とする。下端は指頭により摘み出し、安定して立つようにさせる。また、正面上端もやや摘み出して眉とし、その下に指先・爪を押しつけ、両目と口を表現する。また、両側面は竹串状工具の刺突で耳を表現する。全体はナデ調整で仕上げている。共伴土器は大和第Ⅵ-3・4 様式である。

第 91 次調査
遺構：SD-103
層位：第 2 層
土色：　－
取上：土 -247
№：160
共伴：大和第Ⅵ-3・4 様式
高さ：5.4
幅　：2.8

005　土製品（分銅形）　指定 0627

005

MD- 分銅 -0001
048-00001D

本土製品は、北地区の第 48 次調査の井戸から出土した。1/3 程度が残存する残欠で、両側に括れ部が残存する。円弧を呈するのではなく、やや長方形ぎみの形態であることから西部瀬戸内地域の形態にちかいものと思われる。両面はナデ後ミガキ調整を施している。文様等は描かれていないが、側辺近くには 6 つの小円孔があけられている。出土遺構は古墳時代前期の井戸であるが、井戸掘削時に弥生時代中・後期の遺物包含層を切っており、弥生時代中期の所産の可能性が高い。

第 48 次調査
遺構：SK-1111
層位：第 4(下) 層
土色：黒粘 (ソフト)
取上：その 9
№：333
共伴：弥生時代中期？
残存高：6.9
残存幅：6.8

006　土製品（分銅形）　指定 0628

006

MD- 分銅 -0002
022-00001D

本土製品は、西地区中央部の第 22 次調査の井戸から出土した。全体の 1/6 程度の残欠である。小判状の粘土板を製作した後、括れ部をケズリによって作り出している。やや丸みのある面と平坦な面があり、前者が表面であろう。いずれの面もナデ調整によって仕上げているが、裏面には指頭圧痕と思われる凹みが僅かに残る。括れ部近くに、竹串状工具の刺突によって長径 2 ㎜程度の小孔をあける。色調は暗褐色を呈する。胎土は雲母を含む粘土であるが、砂粒を混和させないものである。共伴土器は大和第Ⅳ-1 様式である。

第 22 次調査
遺構：SK-101
層位：第 1(下) 層
土色：黒色粘質土
取上：　—
№：186
共伴：大和第Ⅳ-1 様式
残存高：4.1
残存幅：3.7

007　土製品（鶏頭形）　指定 0629

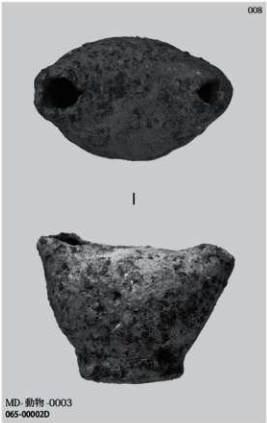
本土製品は、西地区中央部の第11次調査の井戸から出土した。中実の土製品で頭部のみ残存する。頸部は丸棒状を呈しているが、剥離面であることから別製作の胴部等に挿入し焼成したものと考えられる。土製品上端の縁辺部を指頭により摘み出し、頭頂部の鶏冠と嘴を表現する。嘴は鋭く尖っている。目は円形竹管状工具による刺突、耳朶は円形粘土粒の貼付によって表す非常に写実的な土製品である。共伴土器は大和第Ⅵ-3様式である。

	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No.	共伴時期／時代	高さ	幅
007	第11次	SK-103	上層	－	－	－	大和第Ⅵ-3様式	(11.0)	(6.8)

008　土製品（鳥形）　指定 0630

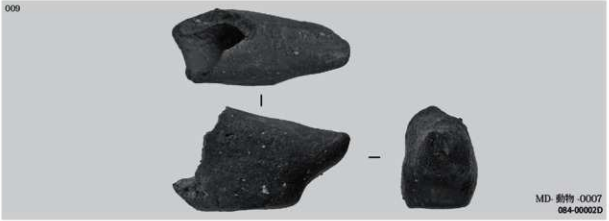
本土製品は、南地区の第65次調査の黒褐色土層Ⅱから出土した。頭部を表現しない中空の土製品である。口縁部と胴部を僅かに欠損する。底部は不整円形の平底で、その上に埦状の胴部を作り、その口縁を閉じ合わせることで鳥の胴部としている。両端は塞がれず、頸部と尾部の孔としている。外面は摩滅し、調整は不明である。共伴土器は弥生時代中期後半である。

第65次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土Ⅱ
取上：　－
No.：1062
共伴：弥生時代中期後半
高さ：4.0
幅：5.2



009　土製品（鳥形）　指定 0631

009



本土製品は、西地区北部の第84次調査の灰褐色粘質土層から出土した。粘土板を丸めて中空の土製品として作られたもので、鳥の胴部から尾部にかけての残欠である。底部は平底で、楕円形を呈している。尾部は細く尖らせぎみで、少し上向きに作る。外面は軽くミガキ調整をおこなう。共伴土器は弥生時代中・後期である。

第84次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：灰褐色粘質土
取上：　—
№　：73
共伴：弥生時代中・後期
残存高：3.5
残存幅：6.1

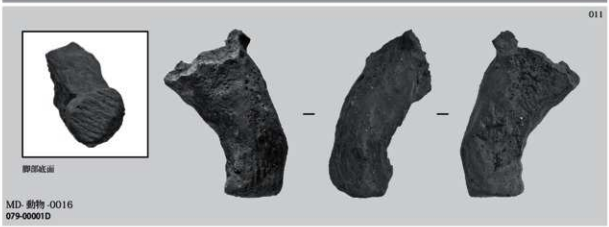
010　土製品（鳥形）　指定 0632

010

本土製品は、南地区の第69次調査の黒褐色土層から出土した。細長く歪みのある胴部を有する鳥形土製品である。板状の粘土を胴部上端で合わせて閉じることで胴部を作っている。このため、胴部上端は鱗状に突出する。底部も細長く丸みがあり、自立しない。頸部は大きな孔としてあけられるのに対し、尾部は尖らせぎみで閉じている。胴部は、横位の細条のハケ調整をおこなう。共伴土器は大和第Ⅵ-2～4様式である。

第69次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土
取上：その1
№　：139
共伴：大和第Ⅵ-2～4様式
高さ：5.0
幅　：11.1

011　土製品（動物形）　指定 0633



本土製品は、西地区北部の第79次調査の落ち込みから出土した。獣の脚部と推定される土製品で、脚の大きさから復元すると相当大きい獣になると考えられる。本土製品は、湾曲気味の円柱状を呈するもので、上部にある屈曲部分からは胴部になると思われる。脚部の外湾部分と脚部裏面は粗い縦方向のハケ、内湾部分は指頭圧痕と無調整であることから、右前脚あるいは右の後脚の可能性が高い。共伴土器は弥生時代中期である。

第 79 次調査
遺構：落ち込み 1
層位：第 1 層
土色：暗褐色粘質土
取上：　—
№：375
共伴：弥生時代中期
残存高：6.5
残存幅：3.8

012　土製品（動物形）　指定 0634

本土製品は、西地区北部の第37次調査の井戸から出土した。頭部を欠損するが、胴部のみを手捏ねで製作した土製品である。鹿を模したものであろうか。胴下部の前後脚 4 本と尾部は竹串状工具の刺突により小孔をあける。脚の小孔には棒を突き刺して脚としたと考えられる。全体はナデ調整で仕上げる。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

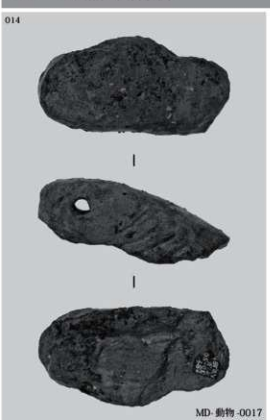
第 37 次調査
遺構：SK-2103
層位：第 4 層
土色：灰黒粘
取上：その 23
№：257
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存高：2.8
残存幅：5.8

013　土製品（動物形）　指定 0635

本土製品は、北西端の第 19 次調査の環濠から出土した。頭部から胴部の残欠で、左前脚の一部が残存する。猪を模したものであろうか。胴部は縦長の楕円形で、上端は指頭により摘み出し、鬣状を呈する。全体はナデ調整で仕上げる。共伴土器は大和第Ⅳ-1 様式である。

第 19 次調査
遺構：SD-204
層位：第 7 層
土色：暗褐色粘砂
取上：　—
№　：706
共伴：大和第Ⅳ-1 様式
残存高：2.9
残存幅：2.8

014　土製品（動物形）　指定 0636



本土製品は、西地区北部の第 84 次調査の中世小溝から出土した。動物の頭部残欠と考えられる小破片である。頭頂部の上面は平らで、下側は中空になっていた可能性がある。先端は横方向の線刻で口を、側面は小孔を貫通させ目を表現する。また、頸部近くの側面にはヘラによる斜線 4 本を線刻する。全体はナデ調整で仕上げる。中世遺構からの出土であるため、詳細時期は不明である。

第 84 次調査
遺構：SD-50
層位：第 1 層
土色：褐灰色粘質土
取上：　—
№　：384
共伴：時期不明
高　さ：2.1
残存幅：4.1

015　土製品（銅鐸形）　指定 0637

本土製品は、北西端の第13次調査の環濠から出土した。身部の縦半分の残欠で、鰭は僅かに摘み出している。身部の文様は、横帯文銅鐸を意識したもので、上・下２帯の横帯をヘラによる細描きで表現する。a面では上段の横帯は３帯で斜格文・綾杉文、下段の横帯は２帯で綾杉文を充填する。左辺には綾杉文を充填した縦帯を付加するが、中央はヘラにより線刻が消され、横帯文風にする。b面もa面同様の横帯文であるが、文様は綾杉文とする。上段の横帯文の鰭近くには、綾杉文と重なるように逆「V」字形の線刻をいれる。身部上端には舞孔２、身部中央には型持孔をあける。内面はケズリ調整で仕上げる。共伴土器は大和第Ⅲ-1様式である。

第 13 次調査
遺構：SD-106D
層位：第 10-b 層
土色：黒粘Ⅲ
取上：　—
№：432
共伴：大和第Ⅲ-1 様式
残存高：5.3
復元幅：2.5

016　土製品（銅鐸形）　指定 0638

本土製品は、第69次調査の南地区の黒褐色土層から出土した。身部の縦半分の残欠である。シャープさに欠ける形態で、復元すれば身部は横長になる。身部は粘土板を２枚貼り合わせ、その合わせた部分を摘み出すことによって鰭を作り出す。身部の文様は、横帯文銅鐸を意識したもので、上・中・下の３帯の櫛描直線文を描いた後、a面では綾杉文、b面では崩れた波状文を巡らせる。身部上端には舞孔をあける。内面はケズリ調整で仕上げる。共伴土器は弥生時代中期から後期である。

第 69 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土
取上：　—
№：554
共伴：弥生時代中～後期
残存高：6.8
残存幅：3.3

017　土製品（銅鐸形）　指定 0639

017

017-1

第 93 次調査
遺構：SK-2111
層位：第 5 層
土色：黒灰粘
取上：　—
№　：269
共伴：大和第Ⅳ様式？
残存高：4.6
残存幅：3.3

本土製品は、西地区北部の第93次調査の井戸から出土した。2つの残欠が残存するもので、この2片は外面の色調が褐色と淡灰色で大きく異なるが、調整や胎土、線刻、出土遺構から同一個体と判断するものである。1は鈕・舞・身部・鰭の一部、2は身部下辺横帯の残欠で、全体から4区袈裟襷文銅鐸を模したと推定される丁寧な作りの土製品である。

1は楕円の柱状部の上を粘土で塞ぎ、平坦な舞部分を作り、鈕は断面が菱形を呈す写実的な形態となっている。鈕部には鋸歯文、身部には斜格文を充填した横帯と縦帯のシャープな線刻がみられ、b面では中央横帯に相当する位置に鹿頭部の線刻が残る。鹿は左向きに描かれ、角は内側に角枝を有する。また、両面には型持孔があけられている。

2は、1のa面・b面のいずれに該当するか判断できないが、斜格文を充填した下辺横帯文とその下に鋸歯文を線刻する。ただし、この鋸歯文は、右向きの魚を連続的に表現している可能性が高い。この残欠の外面は軽くミガキ調整を施している。いずれの残欠も内面はケズリをおこない、厚みも均一的である。本土製品は、後期の土坑からの出土であるが、大和第Ⅳ様式の土坑を切って造られていることから、本来は後者の土坑に伴っていた可能性が高い。

018　土製品（銅鐸形）　指定 0640

018

第 80 次調査
遺構：SD-101
層位：第 5 層
土色：暗灰褐粘
取上：　—
№　：179
共伴：大和第 Ⅳ 様式
残存高：4.3
残存幅：3.8

本土製品は、西地区北部の第80次調査の区画溝から出土した。円筒状の身部上半の残欠で、緻密な胎土の銅鐸形土製品である。舞部分は平らで、中央に楕円形の大きな舞孔を穿つ。外面は縦位のミガキ調整後、上辺の斜格文を充填した横帯文と中央の横帯文の区画線、斜格文を充填した縦帯文を線刻する。また、型持孔をあけている。内面はケズリ調整をおこなう。共伴土器は大和第Ⅳ様式である。

019　土製品（銅鐸形）　指定 0641

本土製品は、南地区の第44次調査の区画溝から出土した。鈕と身部の一部の残欠である。全体を復元すると10㎝を超える大形品で、外面は指頭による凹凸が残るやや粗雑な作りの土製品である。鰭は僅かに摘み出している。身部の文様は、ヘラ描きによる斜格文を充填した横帯文である。b 面の横帯文の区画線は太描きで、下段の太描き線も僅かに残ることから、2段の横帯文であったことがわかる。a 面では、身部左上部の横帯文との空白部分に、両手を挙げ両足を広げた人物を左斜め方向に不明瞭な線刻で描く。鈕の断面は三角形で紐孔・舞孔を大きくあける。身部中央の型持の円孔は小さい。内面はナデ調整で仕上げる。共伴土器は大和第Ⅳ-1 様式である。

第 44 次調査
遺構：SD-103
層位：第 2 層
土色：黒褐色粘質土
取上：　—
№：112
共伴：大和第Ⅳ-1 様式
残存高：6.6
残存幅：4.7

020　土製品（銅鐸形）　指定 0642

本土製品は、西地区中央部の第73次調査の井戸から出土した。身部の縦半分の残欠である。円筒状の身部に僅かに粘土を貼り付けて鰭を作り出す。a 面では身部の中央に縦型の櫛描流水文を描く。また、型持の円孔をあける。b 面の残存部分では文様は不明である。内面はケズリ調整で仕上げる。出土遺構は大和第Ⅵ-3 様式であるが、中期後半（大和第Ⅳ様式）の土器を含んでいる。

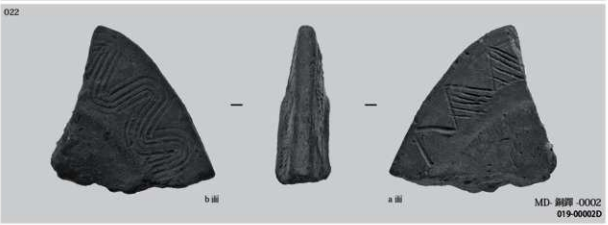
第 73 次調査
遺構：SK-101
層位：第 2 層
土色：黒灰色粘質土
取上：　—
№：30
共伴：大和第Ⅵ-3 様式
残存高：5.4
残存幅：2.6

021　土製品（銅鐸形）　指定 0643

本土製品は、西地区北部の第84次調査の中世小溝から出土した。身部左側の残欠である。左端で僅かに屈曲することから鰭にかかる部分と推定できる。文様は、斜格文が全面にみられるが、上辺・中央の横帯文と左側縦帯を描いた後、区画内を斜格文で充填したと考えられる。型持孔を区画内にあける。内面はケズリ調整をおこない、厚みは均一であることから形として整った銅鐸形土製品になるであろう。中世遺構からの出土であるため詳細時期は不明であるが、文様等から弥生時代中期の所産であろう。

第84次調査
遺構：SD-15
層位：　－
土色：茶灰色粘質土
取上：　－
№　：10
共伴：弥生時代中期？
残存高：5.1
残存幅：2.4

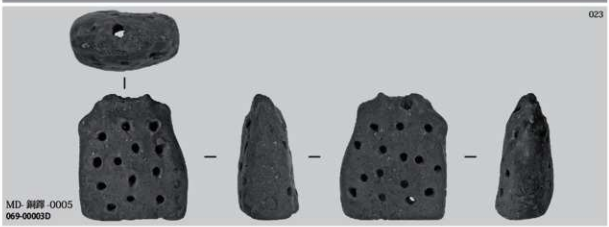
022　土製品（銅鐸形）　指定 0644



本土製品は、北西端の第19次調査の環濠から出土した。鈕部分の残欠で、下端は舞に接する部分である。鈕の断面は外縁付鈕を示す写実的なもので、a面はヘラ描きの鋸歯文、b面は櫛描流水文を描く。共伴土器は大和第Ⅳ-1様式である。

第19次調査
遺構：SD-204
層位：第5層
土色：灰黒色粗砂
取上：　－
№　：730
共伴：大和第Ⅳ-1様式
残存高：3.5
残存幅：3.4

023　土製品（銅鐸形）　指定 0645



本土製品は、南端の第69次調査の環濠から出土した。鈕部を欠損する。扁平な筒状の上部に小さな鈕を作り出したもので、身部のふくらみは少ない。身部両面の全面に径0.3㎝前後の貫通した小孔を多数あける。身部両側面には、ヘラによる意匠不明の線刻がある。身部上端の両肩は指によって摘み出し、突出させる。また、上端には舞孔にあたる孔を１つだけ上から刺突によってあけている。身部との界に刺突によって鈕孔を、両側縁上端に摘み出しによって耳を作る。身部内面はケズリ調整をおこなう。共伴土器は大和第Ⅵ-3・4様式である。

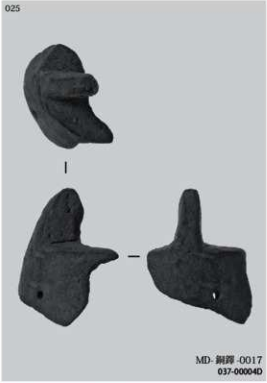
第69次調査
遺構：SD-1109
層位：第２層
土色：　－
取上：土製品-201
№：100
共伴：大和第Ⅵ-3・4様式
残存高：4.2
幅　：3.6

024　土製品（銅鐸形）　指定 0646

本土製品は、北地区の第23次調査の井戸から出土した。鈕から身部の縦半分の残欠である。身部はほぼ円筒状を呈し、鰭の表現はない。無紋で、外面はナデ調整、内面はケズリ調整で仕上げる。鈕は小さく、指頭により摘み出している。鈕部分は紐孔を、舞部分には舞孔２つをあける。共伴土器は大和第Ⅲ-4様式である。

第23次調査
遺構：SK-113
層位：第6(下)層
土色：灰黒色砂質土
取上：　－
№：424
共伴：大和第Ⅲ-4様式
残存高：4.0
残存幅：1.7

025　土製品（銅鐸形）　指定 0647



本土製品は、西地区北部の第37次調査の河跡（流路）から出土した。鈕から身部の残欠である。薄手で、鈕や舞部分はヘラ等により輪郭を明瞭にしている。鰭の表現はない。無紋で、身部には小円孔の型持孔がある。主な共伴土器は大和第Ⅴ-1様式と大和第Ⅵ-3様式である。

第37次調査
遺構：SX-2101
層位：第7層
土色：黒褐粘
取上：　—
No.：300
共伴：大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3様式
残存高：3.1
残存幅：2.1

026　土製品（銅鐸形）　指定 0648

本土製品は、中央区の第72次調査の古墳周濠から出土した。鈕部分の残欠である。鈕の断面は扁平で、丁寧な作りである。a 面には一部ハケが残るが、全体はナデ調整で仕上げ、無紋である。古墳周濠への混在品であり、弥生時代の詳細時期は不明である。

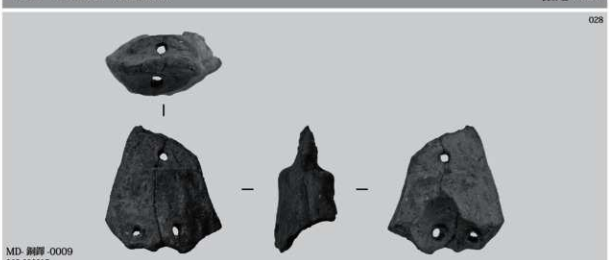
第72次調査
遺構：SD-105
層位：第1層
土色：黒褐色土
取上：　—
No.：85
共伴：弥生時代
残存高：3.1
残存幅：4.4

027　土製品（銅鐸形）　指定 0649

本土製品は、南地区の第69次調査の区画溝から出土した。鈕の部分の残欠である。鈕は半円形で、断面は二等辺三角形を呈す。文様はもたないが、縁辺にはヘラによる刻目がつけられている。共伴土器は大和第Ⅴ様式である。

第 69 次調査
遺構：SD-1103
層位：第 3 層
土色：灰黒粘
取上：　—
№　：515
共伴：大和第Ⅴ様式
残存高：2.1
残存幅：3.8

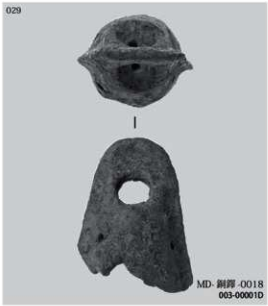
028　土製品（銅鐸形）　指定 0650



本土製品は、南地区の第65次調査の暗茶褐色土層から出土した。鈕から身部まで一体となった二等辺三角形を呈する銅鐸形土製品である。手捏ねで外面は凹凸があり、文様もなく、粗雑な作りである。鰭は僅かに突出させる。鈕は扁平な半円形を呈し、その中央に小孔をあけ、鈕孔とする。舞孔は２つ、身部の型持孔は両面２つずつあけていたと考えられる。共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ様式頃である。

第 65 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：暗茶褐色土
取上：　—
№　：806
共伴：大和第Ⅳ・Ⅴ様式
残存高：4.7
残存幅：4.4

029



MD- 銅鐸 -0018
003-00001D

029　土製品（銅鐸形）　指定 0651

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層から出土した。身部の下半が欠損する。身部はほぼ円筒状であるが、上方ですぼまり、鈕と一体的に作る。鰭は指頭により摘み出す。無紋で、内外面はナデ調整で仕上げる。鈕部分は大きめの紐孔を、舞部分には舞孔の小孔２を、身部の型持孔は両面に小孔各２をあける。共伴土器は大和第Ⅴ様式である。

第３次調査
遺構：　－
層位：包含層下部
土色：　－
取上：　－
No.：　－
共伴：大和第Ⅴ様式
残存高：6.6
残存幅：5.0

030

MD- 銅鐸 -0019
003-00006D

030　土製品（銅鐸形）　指定 0652

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した。身部右側の縦 1/4 の残欠で上端が欠損する。身部の横断面は楕円形を呈し、鰭の表現はないようである。無紋で、外面は縦位のケズリ、内面はナデ調整で仕上げる。身部の型持孔は中位に小孔１が残る。共伴土器は大和第Ⅴ様式である。

第３次調査
遺構：SD-105S
層位：　－
土色：　－
取上：　－
No.：　－
共伴：大和第Ⅴ様式
残存高：5.0
残存幅：3.0

031

MD- 銅鐸 -0013
019-00001D

031　土製品（銅鐸形）　指定 0653

本土製品は、北西端の第19次調査の溝から出土した。鈕から身部の縦半分が残存するもので、鈕・鰭を指頭により摘み出している。無紋で粗雑な作りである。身部中央には型持孔をあける。また、鈕部分にも紐孔・舞孔らしき孔がある。共伴土器は大和第Ⅲ様式である。

第19次調査
遺構：SD-104
層位：第１層
土色：暗黄褐色土
取上：　－
No.：259
共伴：大和第Ⅲ様式
残存高：4.2
残存幅：2.2

032　土製品（銅鐸形）　指定 0654

本土製品は、西地区北部の第37次調査の井戸から出土した。極小で無紋の銅鐸形土製品で、身部上部の半分の残欠である。中実にちかい円筒状で、僅かに内面を刳り込む。鰭は指頭により僅かに摘み出す。身上部の片側には竹串状のものを突き刺し、舞孔とする。共伴土器は大和第Ⅵ-1 様式である。

第 37 次調査
遺構：SK-2122
層位：第 5 層
土色：黒粘
取上：その 1
№：486
共伴：大和第 Ⅵ-1 様式
残存高：2.7
残存幅：1.9

033　土製品（銅鐸形）　指定 0655

本土製品は、南地区の第69次調査の区画溝から出土した。円筒にちかい身部を有する極小で無紋の銅鐸形土製品である。手捏ねで、身部上部は摘み出しで鈕部を作るが、一部欠損している。身部上端には、竹串状のもので上からの刺突があり舞孔を、横方向の刺突は鈕孔を表現しているものと考えられる。共伴土器は大和第Ⅴ様式と大和第Ⅵ-3・4 様式である。

第 69 次調査
遺構：SD-1104
層位：第 2 層
土色：　―
取上：土製品 -201
№：394
共伴：大和第Ⅴ・Ⅵ-3・4 様式
残存高：2.3
幅　：2.3

034 ～ 037　土製品（勾玉形）　指定 0656 ～ 0659

034 ～ 037

MD- 装身 -0001
040-00001D
指定 0656

MD- 装身 -0004
040-00002D
指定 0657

MD- 装身 -0003
040-00004D
指定 0658

MD- 装身 -0002
040-00003D
指定 0659

本土製品４点は、南東端の第40次調査の環濠から一括で出土した。全長3.0 ～ 4.4㎝の勾玉形状を模した土製品である。034はやや大きめで、頭部が大きく歪で、尾部は細く尖りぎみである。035 ～ 037の頭部は丸い。035は強く屈曲するが、036・037の屈曲は弱く尾部端は欠損する。共伴土器はいずれも大和第Ⅴ様式である。なお、本土製品が出土した環濠の地点からは、ミニチュア土器約120点（『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅱ』16・17頁　写真１）が集中して出土した。

	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	№	共伴時期／時代	長さ	幅
034	第 40 次	SD-101	第 6 層	植物層	土-654	466	大和第Ⅴ様式	4.4	2.4
035	第 40 次	SD-101	第 5 層	黒粘	－	343	大和第Ⅴ様式	3.5	2.5
036	第 40 次	SD-101	西壁 Sec. 第 3 層	－	－	288	大和第Ⅴ様式	(3.3)	1.6
037	第 40 次	SD-101	第 3 b 層	灰黒色粘砂	－	342	大和第Ⅴ様式	(3.0)	(1.7)

038

MD- 装身 -0005
061-00004D

038　土製品（勾玉形）　指定 0660

本土製品は、南地区の第61次調査の溝から出土した。全長1.1㎝の極小の勾玉形土製品である。手捏ねであるが、形は整っており、尾部を短く屈曲させる。頭部には小孔をあける。灰黒色を呈す。共伴土器は大和第Ⅲ-1 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-153
層位：第 1 層
土色：褐灰粘（モミ混）
取上：　－
№　：1571
様式：大和第Ⅲ-1 様式
長さ：1.1
幅　：0.4

039　土製品（瓢形）　指定 0661

本土製品は、南東端の第3次調査の環濠から出土した。残存長8.7㎝の大型品である。球形の杓部に棒状の柄部が取り付くが、柄端部を欠損している。杓部口縁部の一部も欠く。杓部内面の中央に接合痕がみられることから、杓部下半と柄部を成形した後、杓部上半を製作したと考えられる。外面には丁寧なミガキ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅳ様式である

第3次調査
遺構：SD-106
層位：　—
土色：黒粘Ⅱ
取上：　—
№：20
共伴：大和第Ⅳ様式
高　さ：5.1
残存幅：9.6

MD- 杓子 -0008
003-00002D

040　土製品（瓢形）　指定 0662

本土製品は、北端の第66次調査の河跡から出土した。球形の杓部に棒状の柄部が取り付くが先端を欠損している。杓部内面の柄部側が僅かに凹むことから、球形の杓部を成形した後、棒状の柄部を接着させたと考えられる。杓口縁部を僅かに欠損する。共伴土器は大和第Ⅰ様式である。

第66次調査
遺構：SR-201
層位：第4層
土色：黒灰粘
取上：　—
№：46
共伴：大和第Ⅰ様式
高　さ：4.3
残存幅：6.7

MD- 杓子 -0004
066-00001D

041　土製品（瓢形）　指定 0663

本土製品は、西地区北部の第37次調査の黒褐色土層Ⅱから出土した。残存幅7.9㎝で、球状の杓部と丸棒状の柄部からなる。柄部の先端を欠損する。杓部上面は指頭により僅かに凹む。全体は、ミガキ調整で仕上げる。共伴土器は大和第Ⅱ様式である。

第37次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土Ⅱ
取上：　—
№：682
共伴：大和第Ⅱ様式
高　さ：4.5
残存幅：7.9

MD- 杓子 -0003
037-00003D

042

MD-杓子-0005
093-00002D

042　土製品（瓢形）　指定 0664

第93次調査
遺構：SK-2115
層位：第8層
土色：灰褐（赤色シルトブロック）
取上：土-802
№：542
共伴：大和第Ⅴ様式
高　さ：4.7
残存幅：7.8

本土製品は、西地区北部の第93次調査の土坑から出土した。残存幅7.8㎝の大形品である。球形の杓部に棒状の柄部が取り付くが、先端を欠損している。杓部内面の柄部側に凹みがあることから、球形の杓部を成形した後、棒状の柄部を接着させ、杓口縁部から柄部をケズリによって全体を整えた可能性がある。杓口縁部は僅かに欠損するが、赤色顔料が付着する。報告書（唐古・鍵遺跡Ⅰ）では「杓子形」とする器種である。共伴土器は大和第Ⅴ様式である。

043

MD-杓子-0002
023-00002D

043　土製品（瓢形）　指定 0665

第23次調査
遺構：SK-116
層位：第2層
土色：黒粘
取上：　－
№：258
共伴：大和第Ⅲ-1様式
高　さ：3.0
残存幅：6.0

本土製品は、北地区の第23次調査の土坑から出土した。残存幅6.0㎝の小形品で、球状の杓部と丸棒状の柄部からなる。柄部の先端を欠損する。全体は、ミガキ調整で仕上げる。報告書（調査概要6）では「杓子形」とする器種である。共伴土器は大和第Ⅲ-1様式である。

044

MD-杓子-0001
016-00001D

044　土製品（瓢形）　指定 0666

第16次調査
遺構：SD-101S
層位：　－
土色：黒色土
取上：土-01
№：73
共伴：大和第Ⅳ様式
残存高：3.8
残存幅：4.7

本土製品は、西地区中央部の第16次調査の区画溝から出土した。残存幅4.7㎝の小形品で、球形の杓部に棒状の柄部が取り付くが、先端を欠損している。柄は、杓部に対して斜め上方に取り付く。手捏ね成形で、やや粗雑な作りである。報告書（調査概要2）では「杓子形」とする器種である。共伴土器は大和第Ⅳ様式である。

045 ～ 052　土製品（投弾）　指定 0667 ～ 0674

045 ～ 052

045

MD- 狩猟 -0002
020-00008D
指定 0667

046

MD- 狩猟 -0013
020-00004D
指定 0668

047

MD- 狩猟 -0005
020-00003D
指定 0669

048

MD- 狩猟 -0007
020-00006D
指定 0670

049

MD- 狩猟 -0003
020-00001D
指定 0671

050

MD- 狩猟 -0004
020-00007D
指定 0672

051

MD- 狩猟 -0014
020-00005D
指定 0673

052

MD- 狩猟 -0006
020-00002D
指定 0674

	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No.	共伴時期／時代	長さ	幅	重さ
045	第20次	SK-215	第4層	灰黒	投-408	710	大和第Ⅰ-2様式	5.5	2.5	26.0
046	第20次	SK-215	第4層	灰黒	土-404	710	大和第Ⅰ-2様式	5.5	2.5	26.7
047	第20次	SK-215	第4層	灰黒	投-403	710	大和第Ⅰ-2様式	5.4	2.5	25.9
048	第20次	SK-215	第4層	灰黒	投-406	710	大和第Ⅰ-2様式	5.4	2.5	27.5
049	第20次	SK-215	第4層	灰黒	投-401	710	大和第Ⅰ-2様式	5.3	2.5	24.5
050	第20次	SK-215	第4層	灰黒	投-407	710	大和第Ⅰ-2様式	5.3	2.6	28.2
051	第20次	SK-215	第4層	灰黒	投-405	710	大和第Ⅰ-2様式	5.3	2.5	26.0
052	第20次	SK-215	第4層	灰黒	投-402	710	大和第Ⅰ-2様式	5.2	2.5	25.0

土製品045 ～ 052は、西地区中央部の第20次調査の木器貯蔵穴の坑底から一括出土した投弾9点中の8点である。均整のとれた紡錘形を呈する土製品で、形態的には整っており丁寧な作りである。上下端はやや尖りぎみである。大きさは長軸5.3㎝前後、短軸2.5㎝ほどで、重さは26ｇ前後である。いずれもナデ調整で仕上げ、砂粒は少なく緻密な胎土である。色調は淡灰褐色を呈す。表面にひび割れがあり、被熱の可能性がある。共伴土器はいずれも大和第Ⅰ-2様式である。

053 ～ 058　土製品（投弾）　指定 0675 ～ 0680

053 ～ 058

MD- 狩猟 -0010
017-00001D
指定 0675

MD- 狩猟 -0011
019-00004D
指定 0676

MD- 狩猟 -0012
045-00001D
指定 0677

MD- 狩猟 -0016
031-00001D
指定 0678

MD- 狩猟 -0018
066-00002D
指定 0679

MD- 狩猟 -0021
084-00004D
指定 0680

	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No	共伴時期／時代	長さ	幅	重さ
053	第 17 次	SX-201	—	黒粘	—	35	大和第Ⅰ-1 様式	4.3	2.9	22.7
054	第 19 次	SD-204	第 10 層	黒粘	土 -1001	1094	大和第Ⅲ-1 様式	4.3	2.9	22.6
055	第 45 次	SR-201	第 5 層	淡灰色微砂	—	23	大和第Ⅰ-1 様式	4.1	2.5	21.4
056	第 31 次	SD-2103	第 2 層	黒粘	—	16	大和第Ⅲ様式	4.1	2.7	24.2
057	第 66 次	SR-201	第 6 層	灰黒色シルト	—	49	大和第Ⅱ-2 様式	4.4	2.7	23.5
058	第 84 次	SK-101	第 3 層	黒色結質土	—	335	大和第Ⅴ-1 様式	3.9	3.0	28.3

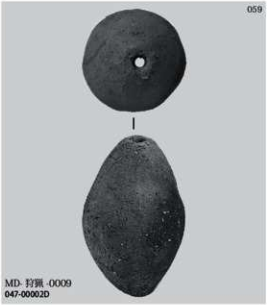
土製品053 ～ 058は、北西端、西地区北部の各調査の環濠、河跡、土坑から出土した投弾である。紡錘形を呈する土製品であるが、前出045 ～ 052よりやや膨らみのある形態である。大きさは長軸3.9 ～ 4.4㎝、短軸2.5 ～ 3.0㎝である。重さは24ｇ前後で、前出のものよりやや軽い。いずれもナデ調整で仕上げ、砂粒は少なく緻密な胎土である。

共伴土器は053・055が大和第Ⅰ-1様式、057が大和第Ⅱ-2様式、056が大和第Ⅲ様式、054が大和第Ⅲ-1様式、058が大和第Ⅴ-1様式である。弥生時代中期以降のものは弥生時代前期からの混入品の可能性がある。

059　土製品（土錘）　指定 0681

本土製品は、南東端の第47次調査の環濠から出土した。全長7.2㎝、重量123.5ｇの大形土錘である。紡錘形を呈し、中心に径0.5㎝ほどの孔が貫通する。全体はナデ調整で仕上げる。共伴土器は大和第Ⅵ-3様式である。

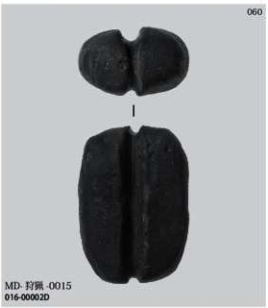
第47次調査
遺構：SD-2102
層位：第4層
土色：暗灰粘
取上：　－
№　：120
共伴：大和第Ⅵ-3様式
長さ：7.2
幅　：4.6



060　土製品（土錘）　指定 0682

本土製品は、西地区中央部の第16次調査の区画溝から出土した。長方形を呈する土錘で、全体に丸みがあり、横断面は楕円形を呈す。縦方向に幅0.3～0.7㎝、深さ0.2～0.5㎝の溝をつくる。全長5.4㎝、重量51.2ｇの中形品である。全体はナデ調整で仕上げる。共伴土器は大和第Ⅰ様式である。

第16次調査
遺構：SD-105
層位：　－
土色：黒色砂質土
取上：土-01
№　：172
共伴：大和第Ⅰ様式
長さ：5.4
幅　：3.8



061　土製品（土錘）　指定 0683

本土製品は、西地区中央部の第19次調査の古墳周濠から出土した。ただし、この遺構からの出土品には弥生土器が多く含まれているため、弥生時代のものと考えられる。横長の球形を呈する土錘で、横幅2.2㎝、重量10.7ｇの小形品である。縦方向に幅0.2～0.3㎝、深さ0.1～0.2㎝の溝をつくる。全体はナデ調整で仕上げる。

第19次調査
遺構：SD-101
層位：第1層
土色：暗褐色土
取上：　－
№　：185
共伴：弥生時代？
長さ：2.6
幅　：2.2

062　土製品（土錘）　指定 0684

第 84 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒灰色粘質土
取上：　—
№：236
共伴：時期不明
長さ：5.9
幅：3.9

本土製品は、西地区北部の第84次調査の黒灰色粘質土層から出土した。縦長の扁平な板状の土製品である。端部を一部欠く。上下端の中央に幅0.6㎝前後の溝を入れるともに、土製品の中央に0.7㎝ほどの孔をあけている。表裏面ともやや凹凸があり、やや粗雑な仕上げである。砂粒が多く、暗褐色を呈す。弥生時代前期の土器胎土・色調に似るが、共伴土器は弥生～古墳時代の遺物である。

063　土製品（土錘）　指定 0685

第 65 次調査
遺構：SB-101
層位：第 1-b 層
土色：　—
取上：下 -101
№：757
共伴：大和第Ⅲ様式？
長さ：5.0
幅：3.6

本土製品は、南地区の第65次調査の住居跡から出土した。全長5.0㎝、重量61.3ｇの土錘である。縦長の球形を呈するものである。土製品の中軸線は中央でなくやや偏り、また、長軸方向にあけられた小孔も中軸線からは偏っている。全体にナデ調整で仕上げている。砂粒は少なく、緻密な胎土である。表面にひび割れがみられ、被熱している可能性がある。共伴土器は大和第Ⅲ様式と思われる。

064　土製品（土錘）　指定 0686

第 40 次調査
遺構：SD-101
層位：第 3(下) 層
土色：　—
取上：土 -349
№：170
共伴：大和第Ⅵ-3・4 様式
長さ：7.8
幅：3.3

本土製品は、南東端の第40次調査の環濠から出土した。全長7.8㎝、重量69.0ｇの土錘である。両端がすぼまる棒状で、手のひらで粘土塊を数回握って成形したものである。３条ほどの凹みが指の痕跡とみられ、粗雑な作りである。土製品の長軸中心には、竹串状工具の刺突によって孔があけられている。共伴土器は大和第Ⅵ-3・4様式である。

065 ～ 072　土製品（紡錘車）　指定 0687 ～ 0694

	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	№	共伴時期／時代	径	重さ
065	第 13 次	SD-106	第 0 層	黒褐色土	－	272	大和第Ⅵ-4 様式	5.5	36.5
066	第 94 次	SD-101D	第 13 層	淡灰色粗砂	－	58	大和第Ⅲ-3 様式	5.1	41.8
067	第 37 次	SK-2130	第 7-c 層	黒灰色砂質土	－	842	大和第Ⅲ-3 様式	5.1	21.5
068	第 98 次	SD-58	第 1 層	灰色粘質土	－	6	弥生時代	5.0	30.8
069	第 89 次	－	－	明灰粘	－	40	弥生時代前・中期	4.9	49.0
070	第 33 次	－	第 1 層	黒色土	－	55	弥生時代後期	4.4	13.0
071	第 19 次	－	－	黄褐色土	－	546	大和第Ⅱ-2・Ⅴ-1 様式	3.7	14.2
072	第 24 次	SD-201	第 6 層	灰黒粘	－	201	大和第Ⅲ様式	3.5	7.0

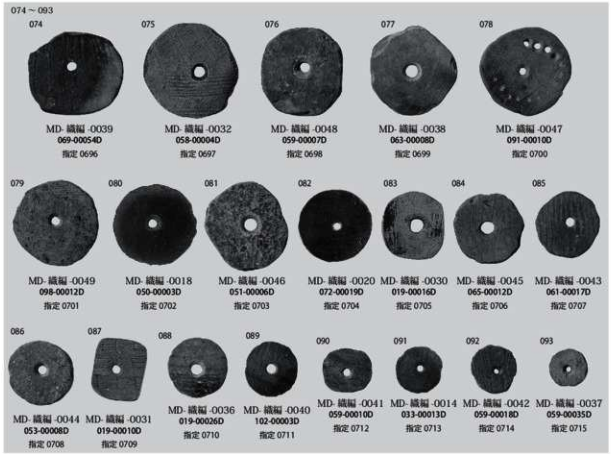
土製品065 ～ 072は、北東端、北西端、西端、西地区北部、南地区の各調査の環濠や井戸、遺物包含層等から出土した。円板形で中央に孔をもち、径3.5 ～ 5.5㎝、重量7.0 ～ 49.0ｇの土製紡錘車である。065は大形でやや粗雑な作りで、平らでなく厚さが不均一である。また、中心孔もやや偏っている。068は全体にやや丸みのあるもので、端部には１条の沈線を入れる。071・072は小形でほぼ正円を呈す丁寧な作りである。大形品(065 ～ 070)は土器のように砂粒を含むが、小形品(071・072)はほとんど含まない。共伴土器は、弥生時代前期～後期の各時期である。

073　土製品（紡錘車未成品）　指定 0695

本土製品は、南地区の第61次調査の区画溝から出土した。円板形を呈すが、平板でなく、厚さも不均一である。片面の中央に１孔、反対面には２孔の未完通孔がある。この孔は、焼成後に穿孔を試みたものであろう。砂粒はほとんど含まない。共伴土器は大和第Ⅴ様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第 4 層
土色：黒色粘砂
取上：　－
№ ：488
共伴：大和第Ⅴ様式
径 ：4.5
重さ：16.9

074 ～ 093　土製品（土器片紡錘車）　指定 0696 ～ 0715



	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	№	共伴時期／時代	径	重さ
074	第 69 次	SD-1111	第 2 層	黒灰粘（炭灰）	－	1333	大和第Ⅴ-1 様式	5.6	24.5
075	第 58 次	SK-101	第 6（下）層	灰黒色粘質土	－	433	大和第Ⅱ-3・Ⅲ-3・4 様式	5.6	36.9
076	第 59 次	SD-1101	第 3 層	灰黒色粘質土	－	164	大和第Ⅵ-3 様式	5.4	31.4
077	第 63 次	SD-103B	第 3（下）層	暗灰粘	－	282	大和第Ⅳ-1 様式	5.3	25.6
078	第 91 次	SD-101B	第 6（下）層	黒灰色粘砂	その 2	343	大和第Ⅴ-1 様式	5.3	18.0
079	第 98 次	－	－	黒色砂質土	－	488	弥生時代中期	5.1	19.9
080	第 50 次	SK-101	第 1 層	黒灰粘	－	295	大和第Ⅲ-1 様式	5.1	20.5
081	第 51 次	SD-103	第 4 層	植物層	その 2	89	大和第Ⅱ-3 様式	5.1	26.1
082	第 72 次	SD-109	第 3 層	灰黒粘	－	340	大和第Ⅲ-2 様式	4.5	15.1
083	第 19 次	SD-204	第 9 層	黒粘（植物混）	－	844	大和第Ⅲ-1 様式	4.4	7.8
084	第 65 次	SK-109	アゼ Sec. 第 4 層	炭灰層	－	449	大和第Ⅳ-2 様式	4.3	9.9
085	第 61 次	SD-102B	第 5 層	灰黒粘	その 2	433	大和第Ⅴ-1 様式	4.0	8.2
086	第 53 次	SR-101A	第 4（上）層	灰黒色粘砂	－	216	大和第Ⅱ-2・Ⅲ-2 様式	3.9	13.53
087	第 19 次	SK-105	第 3 層	黒粘	－	426	大和第Ⅲ-3 様式	3.9	7.4
088	第 19 次	中世大溝	第 5 層	暗灰青粘	－	30	弥生時代	3.6	6.6
089	第 102 次	SD-01	第 5 層	暗灰色粘質土（シルトブロック）	－	13	弥生時代	3.3	6.7
090	第 59 次	SD-1101	第 2-b 層	黒色粘質土	－	271	大和第Ⅵ-3 様式	3.0	4.6
091	第 33 次	SD-109	第 5（下）層	黒粘	F-501	341	大和第Ⅴ様式	2.9	3.4
092	第 59 次	－	－	黒褐色粘質土	－	148	弥生・古墳時代	2.9	6.5
093	第 59 次	－	－	黒色土	－	449	弥生・古墳時代	2.3	2.8

土製品074 ～ 093は、北東端、北西端、西端、西地区北部、南地区の各調査の環濠や井戸、遺物包含層等から出土した**土器片紡錘車**である。亜(079・089等)や甕(088・090等)、台付鉢(087)等の土器片を円板形に打欠・研磨し、その中央に孔をあけたものである。打欠後の研磨の度合いは様々で、その仕上げ方は異なる。径2.3 ～ 5.6㎝、重量2.8 ～ 36.9ｇのものがある。ほぼ円形に加工するが、楕円形・不整円形(074・076・081・090)、隅丸方形(087)を呈するものがある。また、中央の孔が中心からずれているもの(074・075・

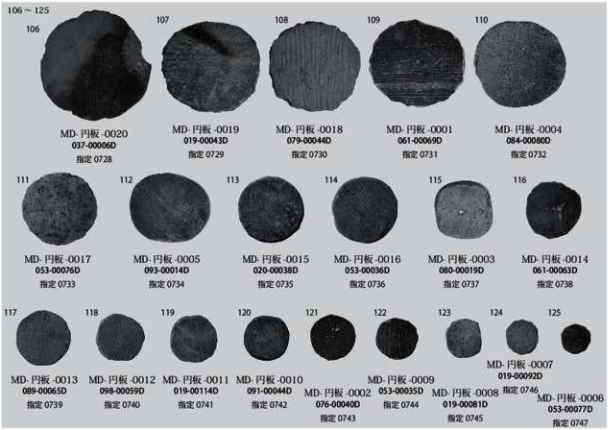
094 ～ 105　土製品（土器片紡錘車未成品）　指定 0716 ～ 0727

	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No.	共伴時期／時代	径	重さ
094	第 50 次	SD-109	第 1 層	黒褐色砂質土	－	273	大和第Ⅴ-2・第-2 様式	6.7	31.9
095	第 83 次	SD-1110	第 3 層	灰白色粗砂	－	123	大和第Ⅳ-1 様式	5.7	23.3
096	第 65 次	SK-128	第 2 層	黒色粘質土	－	537	大和第Ⅳ-1 様式	5.7	27.4
097	第 16 次	SD-103	－	灰黒色粗砂	土-01	142	大和第Ⅱ-3 様式	5.2	37.0
098	第 93 次	SK-2120	第 3 層	黒灰粘	－	55	大和第Ⅳ-1 様式	4.5	18.0
099	第 93 次	SK-2120	第 3 層	黒灰粘	－	55	大和第Ⅳ-1 様式	4.2	11.2
100	第 69 次	－	－	黒褐色粘質土	－	2043	大和第Ⅵ-4 様式	4.0	10.5
101	第 59 次	－	－	黒褐色粘質土	－	156	大和第Ⅱ-3 様式・布留 1 式	3.9	11.2
102	第 72 次	SD-106	第 3 層	黒粘	その 2	269	大和第Ⅵ-2 様式	3.3	9.9
103	第 61 次	SD-102B	第 5（下）層	灰黒粘	その 3	672	大和第Ⅴ-1 様式	3.1	5.1
104	第 19 次	SD-204	第 5 層	灰黒色粗砂	－	693	大和第Ⅳ-1 様式	3.1	5.3
105	第 61 次	SD-102B	第 5 層	灰黒粘	－	429	大和第Ⅴ-1 様式	2.9	7.1

076・081）や円板の側縁の厚みが薄いところで0.4㎝、厚いところで0.8㎝と大きく異なるもの（074）がある。中心孔の穿孔は、074を除き、両面からの回転穿孔である。078は、中心孔のほかに側辺に３つの孔と未完通孔１、内面側にはさらに連続するように未完通孔11が残存している。共伴土器は大和第Ⅱ-2様式～弥生・古墳時代である。

土製品094 ～ 105は、北東端、北西端、西端、西地区北部、南地区の各調査の環濠や遺物包含層等から出土した**土器片紡錘車未成品**である。壷（097）や甕（096等）等の土器片を円板形に打欠・研磨し、その中央に穿孔途中の未完通孔が残存しているものである。径2.9 ～ 6.7㎝、重量5.1 ～ 31.9ｇのものがある。打欠のみのもの（094・096）、打欠後周縁を僅かに研磨するもの（095・100）、丁寧な研磨を施したもの（097・102・103）がある。前２者は楕円形・不整円形を呈するものが多く、研磨が丁寧なものほど円形を呈している。中央の未完通孔が片面のみのもの（097・099・102・104・105）とそれら以外の両面のものがある。両面の穿孔がかなりずれているもの（098・100）もある。孔は回転により深く穿孔しているもの（095・096・101）と僅かな凹みのもの（099・102）がある。共伴土器は大和第Ⅱ-3様式～布留１式である。

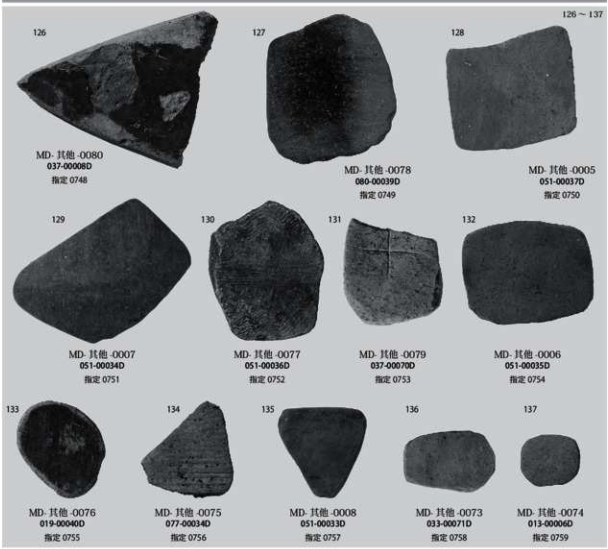
106 ～ 125　土製品（土器片円板）　指定 0656 ～ 0659



	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No.	共伴時期／時代	径	厚さ
106	第 37 次	SX-4201	第 2 層	灰黒色砂質土	－	846	大和第Ⅰ-2 様式	7.9	(54.3)
107	第 19 次	SK-102	第 8(上) 層	黒色粘質土	土 -808	777	大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1 様式	7.0	54.8
108	第 79 次	SD-103	第 2 層	黒色粘質土	－	102	大和第Ⅱ-3・Ⅳ-1 様式	6.7	27.5
109	第 61 次	SD-151CN	第 8 層	灰黒粘	－	1483	大和第Ⅱ-1 様式	6.6	27.1
110	第 84 次	－	－	暗灰色粘質土	－	373	弥生時代	6.3	50.1
111	第 53 次	SR-101A	第 4(上) 層	灰黒色粘砂	－	294	大和第Ⅱ・Ⅲ-1・2 様式	5.4	17.3
112	第 93 次	SK-112D	第 7(下) 層	黒灰粘	－	302	大和第Ⅴ-2 様式	5.1	19.5
113	第 20 次	SD-201	第 1 層	黄褐色土	－	448	弥生時代前期	4.8	28.9
114	第 53 次	SR-101A	第 4 層	灰黒粘	－	274	大和第Ⅰ-2 ～Ⅱ-2 様式	4.7	35.2
115	第 80 次	SD-101	第 4 層	暗灰色砂	－	181	弥生時代中・後期	4.4	22.8
116	第 61 次	SD-151A	第 7(下) 層	暗灰褐粘 (ややシルト混)	その 2	1444	大和第Ⅱ様式？	4.2	15.2
117	第 89 次	SD-1114C	第 9 層	黒灰粘	－	437	大和第Ⅳ-2 様式	4.0	10.2
118	第 98 次	－	－	黄灰色砂質土	－	540	弥生時代中期	3.6	(11.1)
119	第 19 次	－	－	黄褐色土	－	546	大和第Ⅱ-2・Ⅴ-1 様式	3.6	10.8
120	第 91 次	SD-101C	第 7 層	灰色粗砂	－	332	大和第Ⅴ-1 様式	3.3	8.0
121	第 76 次	SD-1107	第 1(上) 層	暗灰褐色土	－	68	大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式	3.1	5.0
122	第 53 次	SR-101A	第 4 層	灰黒粘	－	289	大和第Ⅰ-2・Ⅱ-2・Ⅲ-1 様式	3.0	5.3
123	第 19 次	SD-204	第 4(下) 層	黒粘	－	633	大和第Ⅳ-1 様式	2.8	5.7
124	第 19 次	SD-204	第 2 層	暗灰褐色砂質土	－	665	大和第Ⅳ・Ⅴ様式	2.5	2.6
125	第 53 次	SR-101A	第 4(上) 層	灰黒色粘砂	－	296	大和第Ⅲ-1・2 様式	2.1	0.8

土製品 106 ～ 125 は、北東端、北西端、西端、西地区北部、南地区の各調査の環濠、遺物包含層等から出土した土器片円板である。甕あるいは鉢（107・109 等）、甕（108・111 等）と思われる土器片を円板形に打欠・研磨したものである。径 2.1 ～ 7.9 ㎝、重量 0.8 ～ 54.8 g のものがある。周縁を打欠するのみのもの（107・108）、打欠後僅かに研磨するもの（111・118）、丁寧な研磨を施したもの（110・112・113・114・117）がある。研磨が丁寧なものほど円形を呈している。また、楕円形（112）、隅丸方形（115）を呈するものが僅かにある。116 の内面には、細描きの後刻による十字が複数重ねて刻まれている。共伴土器は大和第Ⅰ-2 ～Ⅵ-3 様式である。

126 ～ 137　土製品（土器片加工品）　指定 0656 ～ 0659

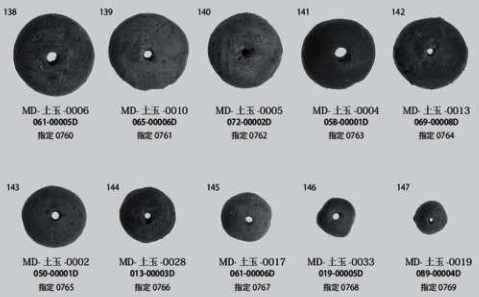


	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No	共伴時期・時代	長軸	短軸
126	第 37 次	SD-2201	第 4 層	灰黒粘	－	766	大和第Ⅰ-2 様式	(7.8)	(6.7)
127	第 80 次	SD-106	第 6(下)層	黒色粘質土(砂多)	－	339	大和第Ⅲ-2 様式	6.7	5.8
128	第 51 次	SK-104	第 2 層	－	土 -233	61	大和第Ⅴ-1 様式	5.7	5.1
129	第 51 次	SK-104	第 6 層	黒褐色粘質土(植物層)	－	122	大和第Ⅴ-1 様式	7.3	6.0
130	第 51 次	SK-104	第 5 層	黒粘	その 1	72	大和第Ⅴ-1 様式	6.3	5.1
131	第 37 次	SD-2202	第 1 層	暗灰青粘	－	691	大和第Ⅱ様式	(4.6)	4.3
132	第 51 次	SK-104	第 5 層	黒粘	その 1	72	大和第Ⅴ-1 様式	5.7	4.4
133	第 19 次	SK-101	第 6 層	黒粘	－	227	大和第Ⅴ-1 様式	4.5	3.5
134	第 77 次	－	－	黒色粘質土	－	27	弥生時代中・後期	4.3	(4.1)
135	第 51 次	SK-104	第 7 層	灰黒色粘質土	－	131	大和第Ⅴ-1 様式	3.7	3.6
136	第 33 次	落ち込みⅢ	第 2(下)層	灰褐色粘質土	－	155	大和第Ⅳ-1 様式	4.0	2.7
137	第 13 次	SD-106	第 3 層	黒粘	－	364	弥生時代中期	2.6	2.3

土製品 126 ～ 137 は、北地区、北西端、西地区北部、南地区の各調査の環濠、井戸、遺物包含層等から出土した土器片加工品。壺（126・128 ～ 131）や甕（132 ～ 134・137）、鉢（127）の胴部と思われる破片（136）、高坏の口縁部（135）片を円板形以外の隅丸長方形（131・132・137）、歪な方形（127 ～ 129・136）、三角形（126・134・135）、不整円形（130・133）の形に加工したものである。長軸 2.6 ㎝～ 7.8 ㎝以上のもので、周縁部は丁寧な研磨によって仕上げている。126 は縁辺部の内外面まで研磨をおこない、角は尖っている。131 の内外面には、後刻による十字が刻まれている。128 ～ 130・132・135 はいずれも同一の井戸から出土している。共伴土器は大和第Ⅰ-2 ～Ⅴ-1 様式である

138 ～ 147　土製品（有孔土玉）　指定 0760 ～ 0769

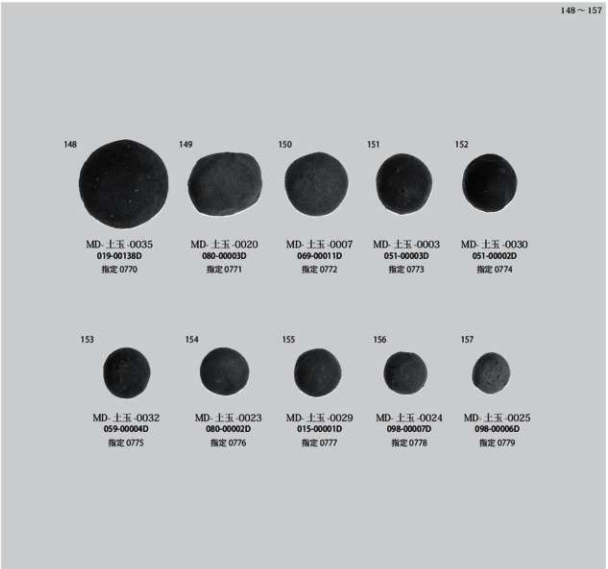
138 ～ 147



	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No.	共伴時期／時代	長軸	孔径
138	第 61 次	SD-101B	第 4 層	黒色粘砂	土玉 -401	306	弥生時代後期	2.9	0.4
139	第 65 次	―	―	黒褐色土	―	168	大和第Ⅳ-1・3 様式	2.9	0.3
140	第 72 次	SD-106	第 1 層	―	土製品 -101	88	大和第Ⅵ-3 様式	2.6	0.2
141	第 58 次	SK-101	第 6（下）層	灰黒色砂質土	―	437	大和第Ⅳ-1 様式	2.6	0.4
142	第 69 次	―	―	黒褐色土	―	284	弥生時代中期	2.6	0.2
143	第 50 次	SK-103	上面	黒色土	―	90	大和第Ⅵ-3 様式？	2.3	0.3
144	第 13 次	SD-106C	第 7 層	砂質土Ⅱ	―	387	大和第Ⅲ様式	2.0	0.2
145	第 61 次	SD-102B	第 5 層	灰黒粘	その 3	433	大和第Ⅴ-1 様式	1.8	0.2
146	第 19 次	SD-204	第 8 層	黒灰色砂質土	―	720	大和第Ⅳ-1 様式	1.5	0.2
147	第 89 次	―	―	黒褐色粘質土	―	81	弥生時代中・後期	1.2	0.1

土製品 138 ～ 147 は、中央区や北西端、西地区北部、南地区の各調査の環濠や区画溝、土坑、井戸、遺物包含層から出土した有孔土玉である。球形を呈するものが多いが、やや横長の球形（138・141）、丸みのある算盤玉形（139・142）、やや歪な球形（146・147）がある。いずれも中心軸に竹串状工具で、貫通する小孔をあけている。大きさは、直径 1.2㎝～ 2.9㎝のもので、孔径は 0.1㎝～ 0.4㎝で外径に相応する大きさとなっている。いずれも表面はナデ調整で、砂粒をあまり混入しない緻密な胎土である。143 は黒褐色を呈し、奈良盆地東南部産の胎土である可能性が高い。共伴土器は大和第Ⅲ～Ⅵ-3 様式である。

148 ～ 157　土製品（無孔土玉）　指定 0770 ～ 0779



	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No	共伴時期／時代	長軸	重さ
148	第 19 次	SD-204	第 5 層	灰黒色粗砂	－	731	大和第Ⅳ-1 様式	3.2	22.7
149	第 80 次	SD-101	第 1（下）層	黒褐色粘質土	－	62	大和第Ⅵ-3 様式	2.6	13.8
150	第 69 次	SD-1109	第 4（下）層	灰黒粘（砂混）	－	102	大和第Ⅵ-4 様式・庄内式	2.2	10.7
151	第 51 次	SK-104	第 1 層	黒褐色土	－	12	大和第Ⅴ-1 様式	2.1	7.9
152	第 51 次	SK-104	第 5 層	－	土 -572	120	大和第Ⅴ-1 様式	2.0	(7.0)
153	第 59 次	－	－	黒褐色土	－	200	弥生・古墳時代	1.8	5.2
154	第 80 次	SD-101	第 5 層	暗灰褐粘	－	129	大和第Ⅳ様式？	1.7	5.0
155	第 15 次	SD-01	－	植物層	－	8	弥生時代中・後期	1.7	3.8
156	第 98 次	－	－	暗褐色砂質土	－	44	弥生時代後期・古墳時代	1.5	3.7
157	第 98 次	－	－	黒色砂質土	－	20	大和第Ⅳ-1 様式	1.5	2.4

土製品148 ～ 157は、中央区や北西端、西地区北部、南地区の各調査の環濠や区画溝、井戸、遺物包含層から出土した無孔土玉である。無孔土玉は、有孔土玉に対し、孔をもたない土玉を指す。径２㎝までのものは、ほぼ球形を呈すが、それより大形のもの（148 ～ 151）はやや歪な球形を呈す。いずれもナデ調整で、砂粒をあまり混入しない緻密な胎土である。共伴土器は大和第Ⅳ-1様式～弥生・古墳時代である。

158

MD- 其他 -0081
003-00003D

158　土製品（不明）　指定 0789

本上製品は、南東端の第3次調査の環濠から出土した。革袋形土器に似せた土製品である。完形品。横長の筒形で上部中央に口をもつ手捏ね成形の粗製品である。筒状の両端の一方はやや尖りぎみ、他方はやや平坦で下端左寄りに小円孔（径0.5㎝）をあける。上面の口縁部は、僅かに立ち上がる。共伴土器は弥生時代後期である。

第３次調査
遺構：SD-102N
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№：21
共伴：弥生時代後期
高さ：5.1
幅　：9.6

159

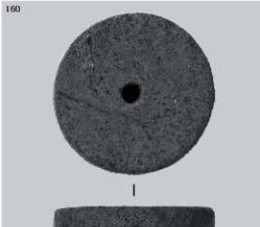
MD- 其他 -0082
003-00004D

159　土製品（不明）　指定 0790

本上製品は、南東端の第3次調査の区画溝から出土した。上部が「V」字状を呈する上製品である。下端および「V」字の一方を欠く。手捏ね成形品である。上部の「V」字状部分は筒状である。下端は欠損しているが、やや広がりぎみで、指頭圧痕があることから、「ハ」字状の脚台になると考えられる。共伴土器は弥生時代後期頃である。

第３次調査
遺構：SD-103N
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№：12
共伴：弥生時代後期？
残存高：5.4
残存幅：6.6

160



MD- 其他 -0083
003-00005D

160　土製品（不明）　指定 0791

本上製品は、南東端の第3次調査の環濠から出土した。上面端部の一部を欠損する。独楽状の土製品で、丁寧な作りでほぼ正円を呈する。上面は平坦で中央に貫通しない小円孔（径0.8㎝）をあける。下半は低い円錐状を呈するが、下面中央は僅かながら平坦面を有する。共伴土器は弥生時代中期である。

第３次調査
遺構：SD-107
層位：　－
土色：灰黒色粘砂
取上：　－
№：16
共伴：弥生時代中期
径　：6.6
高さ：3.5

161　土製品（不明）　指定 0792

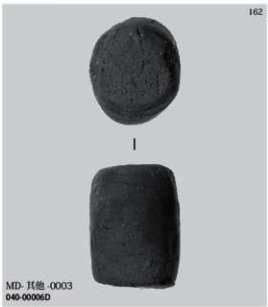
本土製品は、北地区の第48次調査の井戸から出土した。高さ1.8㎝の円柱状の土製品である。上下面は平坦であるが、上面は指頭により僅かに凹む。側面は、竹串状工具の刺突を4段にわたって巡らせる。共伴土器は、弥生土器が混在するが、布留1式である。

第48次調査
遺構：SK-1104
層位：第4層
土色：黒色粘砂
取上：　－
№　：242
共伴：布留1式
高さ：1.8
幅　：2.3

162　土製品（不明）　指定 0793

本土製品は、南東端の第40次調査の環濠から出土した。中央にやや膨らみをもつ円柱状の土製品である。上下面は平坦である。全体はナデ調整で仕上げる。共伴土器は大和第Ⅴ-1様式である。なお、本土製品の出土地は、前掲土製品034～037に近い地点にあたる。

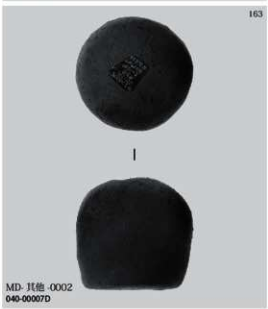
第40次調査
遺構：SD-101
層位：第5層
土色：　－
取上：土製品-2501
№　：243
共伴：大和第Ⅴ-1様式
高さ：3.1
幅　：2.7



163　土製品（不明）　指定 0794

本土製品は、南東端の第40次調査の環濠から出土した。上面が丸く、下面が平坦な円柱状の土製品である。全体はナデ調整で仕上げる。共伴土器は大和第Ⅴ-1様式である。

第40次調査
遺構：SD-101
層位：第5層
土色：黒粘
取上：土-1547
№　：226
共伴：大和第Ⅴ-1様式
高さ：3.2
幅　：2.9



164　土製品（不明）　指定 0795

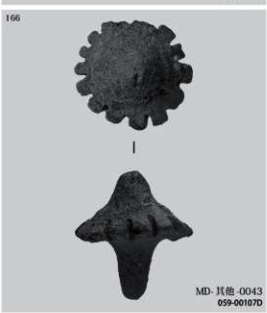
本土製品は、中央区の第53次調査の落ち込み状遺構から出土した。やや全体的に歪な円柱状の土製品である。上面には深さ1.2㎝ほどの凹みが作られている。共伴土器は大和第Ⅲ-2様式である。

第53次調査
遺構：SR-101A
層位：第4(上)層
土色：灰黒色粘砂
取上：　—
№　：295
共伴：大和第Ⅲ-2様式
高さ：2.6
径　：3.0

165　土製品（不明）　指定 0796

本土製品は、南地区の第63次調査の黒色粘質土層から出土した。勾玉状を呈する土製品である。基部には、凹みのある剥離痕がみられることからなんらかの本体に接合していた部品と推定され、土偶の腕のようにも見える。板状に作られているが、表面にあたる方は基部近くにやや膨らみをもつ。両面および外側側面には細描きで斜格文を描き、周縁には刻目をいれる。また、基部と内側周縁には粗雑なやや太めの区画線をいれる。共伴土器は弥生時代中・後期である。

第63次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒色粘質土
取上：　—
№　：19
共伴：弥生時代中・後期
残存長：6.1
幅　：2.4



166　土製品（不明）　指定 0797

本土製品は、北地区の第59次調査の河跡(北方砂層)から出土した。笠形を呈する小形の土製品である。側縁を小欠する。笠部はやや内湾気味になる円錐形で、周縁にはヘラ押捺による刻目を深くれる。笠下の軸部は末端方向に細くなる。共伴土器は大和第Ⅵ-4様式・布留1式である。

第59次調査
遺構：SR-4101
層位：第1層
土色：暗黄褐色砂質土
取上：　—
№　：616
共伴：大和第Ⅵ-4様式・布留1式
高さ：3.5
幅　：3.1

167　土製品（不明）　指定 0798

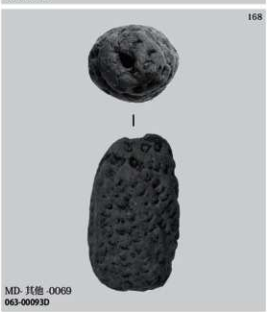
本土製品は、北西端の第90次調査の環濠から出土した。円板形の中央に孔を有する土製品である。上面の周縁は指頭により僅かに突出させる。正円でなくやや歪で、手捏ね感がある。下面は使用によるものか摩滅している。共伴土器は弥生時代中期～布留式である。

第90次調査
遺構：SD-101
層位：第2層
土色：黒褐色土
取上：　—
№：34
共伴：弥生時代中期～布留式
径：5.0
孔径：0.9

168　土製品（不明）　指定 0799

本土製品は、南地区の第65次調査の黒褐色土層Ⅱから出土した。両端が丸みをもった棒状の土製品で、偏ったところに縦方向に貫通させた小孔がみられる。外面には、竹管状の刺突文が縦方向あるいは左上から右下方向に連続的につけられており、底面までおよんでいる。共伴土器は大和第Ⅵ-3様式である。

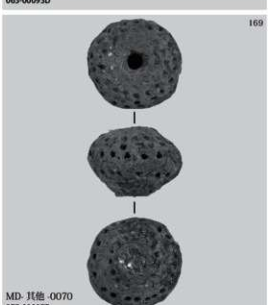
第65次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土Ⅱ
取上：　—
№：302
共伴：大和第Ⅵ-3様式
長さ：3.6
幅：2.1



169　土製品（不明）　指定 0800

本土製品は、東端の第75次調査の明褐色粘質土層から出土した。扁球形を呈するもので、底面は土器の底部のようにやや突出し、中央がくぼむ。上面は、中心に向かって小孔があけられており、一見、土器の無頸壺のようである。外面には横方向5段に円形刺突文を巡らせる。共伴土器は大和第Ⅴ様式の可能性がある。

第75次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：明褐色粘質土（砂混）
取上：　—
№：157
共伴：大和第Ⅴ様式？
高さ：2.4
幅：3.3



170

MD- 其他 -0068
089-00115D

170　土製品（不明）　指定 0801

本土製品は、西地区北部の第89次調査の黒褐色粘質土層から出土した。土器の一部の可能性があるが、残欠の形状からは考え難い。内面の接合痕から天地を判断すると楕円形を呈するようであり、銅鐸形土製品の可能性もある。また、外面には上向きに動物が描かれている。胴部と４本の脚部が残存しており、その表現から絵画土器にみられるような鹿の可能性が大きい。ただし、足先は３つに分かれている。この土製品を銅鐸形土製品として復元するとかなり大形になり、身部に対して絵画も大きく描かれていることになる。共伴土器は弥生時代中・後期である。

第 89 次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色粘質土
取上：　－
№　：42
共伴：弥生時代中・後期
残存長：2.7
残存幅：2.4

171　土製品（不明）　指定 0802

171

MD- 其他 -0011
093-00098D

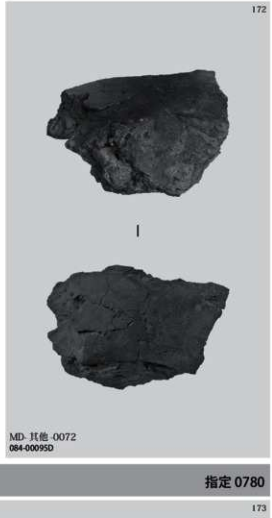
本土製品は、西地区北部の第93次調査の土坑から出土した。円形を呈する土台状の土製品である。上面・側面・底面の一部の残欠である。復元すると、おおよそ直径60㎝、高さ12㎝ほどの大きな土製品になる。本土製品は、剝離痕が明瞭で、内側から厚みが３～４㎝・２㎝・1.5㎝ほどで高さが10㎝ほどの粘土板を巻き付けて作っていることがわかる。その後、上端部を円形の粘土板で覆い完成させたもので、全体は強いナデで仕上げている。底面は、接合痕跡が明瞭で成形時のままである。また、側辺部の下部は、粘土の重みで押しつぶされている。色調はやや赤みのある淡褐色を呈すが、上面は被熱のせいか白く変色している。胎土は、弥生時代前期土器の胎土と類似し、砂粒を多く含む。共伴土器は大和第Ⅵ-3様式である。

第 93 次調査
遺構：SK-1120
層位：第１層
土色：黒褐色粘質土（黄斑）
取上：　－
№　：274
共伴：大和第Ⅵ-3 様式
高　さ：11.9
残存幅：20.7

172　土製品（不明）　指定 0803

本土製品は、西地区北部の第84次調査の土坑から出土した。土製品171とほぼ同様の形態を呈すると思われる土製品である。上面の残欠である。僅かに湾曲していることから、円形を呈する土台状の土製品であろう。成形は、幅広の粘土板の巻き付けによるものであろう。側面の色調は淡褐色を呈するが、一部灰褐色を呈する部分があり、被熱していると思われる。胎土は、破損面では、緻密な粘土の流理がみられる部分と砂粒が混和された粘土部分が見られ、あまり捏ねられた粘土でないことがわかる。共伴土器は大和第Ⅳ-1様式である。

第 84 次調査
遺構：SK-103
層位：第 8 層
土色：灰褐粘
取上：　—
№　：353
共伴：大和第Ⅳ-1 様式
残存高：7.6
残存幅：17.4



173　土製品（焼成粘土塊）　指定 0780

本粘土塊は、西地区北部の第37次調査の土坑から出土した。この粘土塊は、土器製作時かその他土製品等の製作時に発生した残余の粘土塊と思われ、偶然に焼成されてしまったものと考えられる。長軸10㎝ほどの浅い塊状を呈する粘土塊の縦2/3程度が残存していると思われる。下部は指頭圧痕が数ヶ所残るが、緩やかな球面を呈する。それに対し、上部は凹凸状に盛り上がり指頭圧痕が残る。形状から拳大に丸めた粘土塊を浅い塊状容器に入れていた可能性がある。1㎜ほどの砂粒を多く混和する。共伴土器は大和第Ⅰ-1様式である。

第 37 次調査
遺構：SK-2202
層位：第 1 層
土色：暗灰青粘
取上：　—
№　：730
共伴：大和第Ⅰ-1 様式
残存長：10.6
残存幅：8.2

174 ～ 179　土製品（焼成粘土塊）　指定 0781 ～ 0786

174 ～ 179

174

MD- 粘塊 -0008
016-00121D
指定 0781

175

MD- 粘塊 -0009
013-00007D
指定 0782

176

MD- 粘塊 -0007
019-00130D
指定 0783

177

MD- 粘塊 -0001
019-00140D
指定 0784

178

MD- 粘塊 -0002
024-00019D
指定 0785

179

MD- 粘塊 -0004
024-00021D
指定 0786

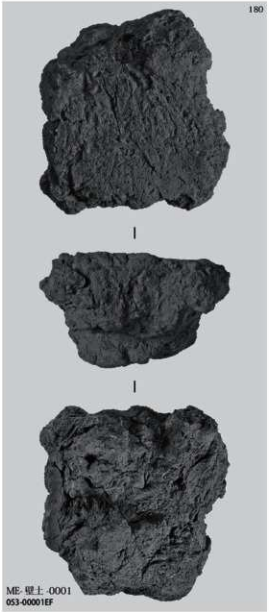
	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No.	共伴時期／時代	長さ	幅
174	第 16 次	SD-105	―	黒色砂質土（下層）	―	174	大和第Ⅰ-2～Ⅱ-1 様式	4.6	4.3
175	第 13 次	SD-106C	第 6 層	砂質土	―	347	大和第Ⅳ-1 様式	3.5	4.9
176	第 19 次	SD-204	第 9 層	黒粘（植物混）	―	828	大和第Ⅲ-2・3 様式	7.9	9.7
177	第 19 次	SD-204	第 5 層	灰黒色粗砂	―	805	大和第Ⅳ-1 様式	(6.3)	(3.3)
178	第 24 次	SK-103	第 5 層	黒粘	―	174	布留 1 式	4.0	(3.6)
179	第 24 次	SR-101	第 3（下）層	暗灰褐色砂礫	―	93	大和第Ⅳ-2 様式	7.6	(4.2)

土製品174 ～ 179は粘土塊である。北西端の第13・19次調査や北東端の第24次調査の環濠等、西地区中央部の溝から出土した。これら粘土塊は、土器製作時かその他土製品等の製作時に発生した残余の粘土塊と思われ、偶然に焼成されてしまったものと考えられる。174は太さ3㎝ほどの粘土紐を2つに折り曲げたもの、175は粘土紐状の塊を丸く押し固めたものである。176は縁辺が欠けているが円盤状を呈していたと思われる平板で、木葉痕、植物繊維圧痕がつけられている。177は片面に網代痕、他面に丸棒状圧痕が残る。178・179は平板状で植物繊維痕が、179の他面には指頭圧痕が残されている。いずれも砂粒の混和は少ない。共伴土器は大和第Ⅰ-2様式～古墳時代前期（布留1式）までのものである。

180　土製品（壁土）　指定 0787

本土製品は、中央区の第53次調査の落ち込み状遺構から出土した。壁土の一部と思われる塊で、平らな面を一部残す。他の面は欠損部分で、壁内部であろう。スサを多く含み、直径２cmほどの小舞の圧痕が十字にクロスする形で残っている。共伴土器は大和第Ⅰ-2・Ⅱ-1様式である。

第 53 次調査
遺構：SR-101A
層位：第４層
土色：灰黒粘
取上：　—
№：337
共伴：大和第Ⅰ-2・Ⅱ-1様式
残存長：17.7
残存幅：12.5

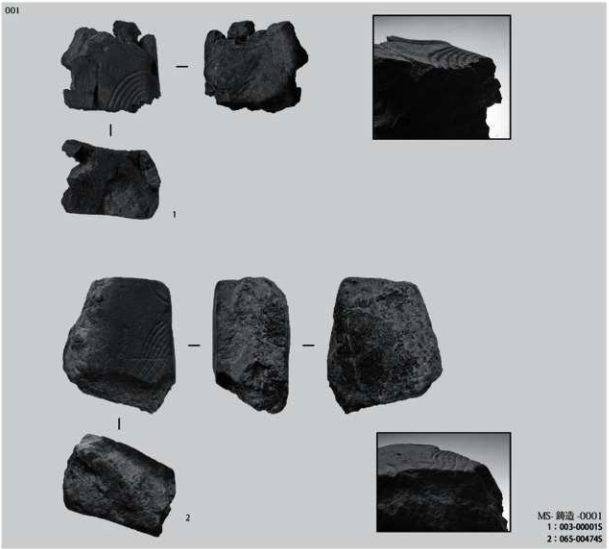


181　土製品（壁土）　指定 0788

本土製品は、西地区北部の第37次調査の河跡から出土した。壁土の一部と思われる塊であるが、壁面は被熱により発泡・熔解しておりわからない。壁内部と思われる部分には直径１cmほどの小舞の圧痕が２本部残る。壁内部はほとんど砂粒を含まないが、発泡・熔解している面には籾痕がみられる。このことから、この部分が壁面であった可能性がある。共伴土器は大和第Ⅰ-1様式である。

第 37 次調査
遺構：SX-4201
層位：第３層
土色：黒褐粘
取上：　—
№：857
共伴：大和第Ⅰ-1様式
残存長：11.1
残存幅：16.3

001　鋳造関連（石製銅鐸鋳型）　指定 1720



001-1

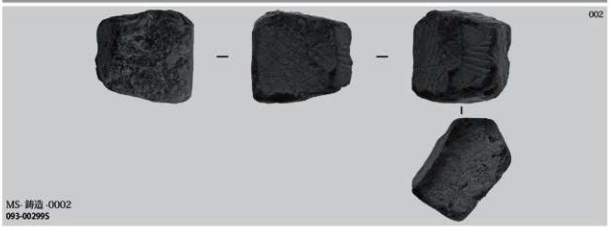
第３次調査
遺構：SD-105
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№　：5833
共伴：弥生時代中・後期
残存長：6.6
残存幅：7.3

本鋳型は、南地区の第３次調査の区画溝、第 61 次調査の黒褐色土層から出土した石製銅鐸鋳型の身部残欠である。およそ 40 ㎝台の区画内に重弧文を配する４区袈裟襷文銅鐸に推定できるものである。１が下部、2が上部にあたる。

001-1は、ほぼ立方体を呈し、僅かに重弧文が線刻されている部分が鋳型面としての形態を残している。他の面は破損面である。鋳型面の右側面や反対面は、砥石に転用されており、特に反対面は磨り面が凹面になるまで使用している。他の破損面には、黒色の煤状物質が付着している部分と鋳型加工面の部分がある。鋳型面には、上下に向かい合うように重弧文が線刻されており、上は３条、下は６条の弧線が残る。石材は石英安山岩質凝灰岩である。共伴土器は弥生時代中・後期である。

001-2は、縦長のほぼ長方体を呈するものである。僅かに重弧文と斜格文が線刻されている部分が鋳型面としての形態を残しているのみで、他の面は鋳型破損面である。鋳型面の左側面や下面以外は、砥石に転用されており、特に反対面と右側面は平滑になっている部分が多い。他の面は破損面の凹凸が多くあり、砥石としてはあまり使用していない。鋳型面には、上下に向かい合う重弧文と下辺の横帯である斜格文が線刻されている。重弧文は、上に２条、下に７条の弧線の左半分が残っている。石材は、石英安山岩質凝灰岩である。

002　鋳造関連（石製銅鐸鋳型）　指定 1721



本鋳型は、西地区北部の第 93 次調査の中世小溝から出土した石製銅鐸鋳型の身部残欠である。袈裟襷文銅鐸の下辺横帯部分にあたり、鐸身から鰭にかけての鋳型面が残存する。他の面は砥石に転用され、平滑になるまで使用している。鋳型面の鐸身部分には、斜格文を充填した下辺横帯と縦帯を線刻する。斜格文の傾きは横帯と縦帯で異なる。鐸身から鰭にかけての屈曲部は破損しており、長さ 1 cm程度しか残っていない鰭部分には内向する 2 つの鋸歯文が残存する。下側の鋸歯文は、鰭端部を底辺にして内部に左上がりの斜線 5 本を充填する。石材は流紋岩質凝灰岩である。共伴土器は大和第Ⅱ・Ⅲ様式・布留式である。

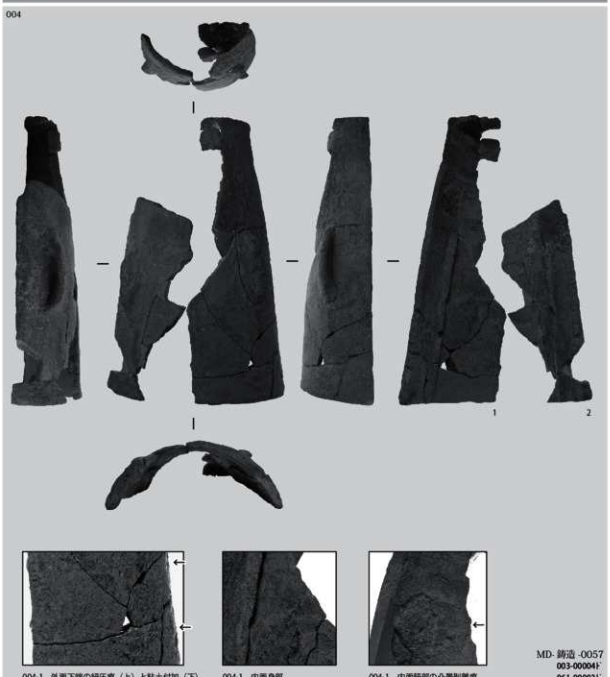
第 93 次調査
遺構：SD-2074
層位：第 1 層
土色：暗灰色粘質土
取上：　—
№：15
共伴：大和第Ⅱ・Ⅲ様式・布留式
残存長：5.9
残存幅：6.1

003　鋳造関連（石製銅鐸鋳型）　指定 1722

本鋳型は、南地区の第 69 次調査の黒褐色土層から出土した石製銅鐸鋳型の身部残欠である。袈裟襷文銅鐸の区画内部にあたるとみられる。残存部分は横長の長方体を呈する。鋳型面は黒色化しており、他の面は破損面である。鋳型面の左側面と下面は砥石に転用されている。鋳型面と反対の破損面は風化・剝落している。石材は流紋岩質凝灰岩である。共伴土器は大和第Ⅳ様式である。

第 69 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土
取上：　—
№：426
共伴：弥生時代後期・布留式
残存長：3.0
残存幅：3.9

004　鋳造関連（１号土製銅鐸鋳型外枠Ａ面）　指定 1640



004-1　外面下端の組圧痕（上）と粘土付加（下）　004-1　内面身部　004-1　内面縦部の凸帯剥離痕

本土製品は、南地区の第３・61次調査の区画溝（ＳＤ-102）から出土した土製銅鐸鋳型外枠である。頂部～身部上半と、身部下端の一部を欠損する。外面身部中位に把手を貼付する。身部下位には組圧痕２条が残る。内面に凸帯を作り出す。外面はケズリ後に裾～身部中位までハケ調整、内面は縦位のハケ調整後に身部下半以下に横位のハケ調整を施す。頂部から約12㎝にわたりケズリ調整を施し、ハケとケズリの界に凸帯を付けるが、剥離している。本品全体での共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-4様式・庄内式である。

004-1

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№：5698

全体

共伴：大和第Ⅴ-1・Ⅵ-4様式・庄内式
長：63.4
幅：43.6

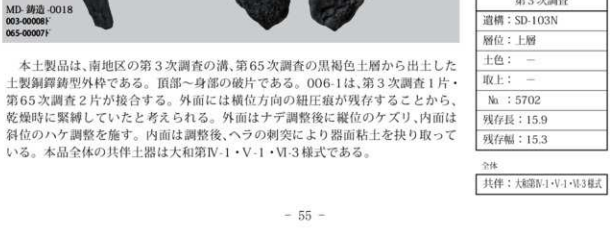
005　鋳造関連（1号土製銅鐸鋳型外枠B面）　指定 1641

005-3

第 61 次調査
遺構：　—
層位：包含層
土色：　—
取上：　—
№：5701
共伴：大和第Ⅳ様式
残存長：16.8
残存幅：10.4

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層、第61次調査の区画溝と黒褐色土層Ⅱ、第65次調査の黒褐色土層から出土した土製銅鐸鋳型外枠である。身部・裾部片が残存する。外面に紐圧痕が残る。内面に断面三角形の凸帯を作る。外面は縦位のハケ調整後にケズリ調整、内面は凸帯の内側にハケ調整、外側にケズリ調整を施す。一部に被熱がみられる。本品全体の共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ-1・Ⅵ-4様式である。

006　鋳造関連（2号土製銅鐸鋳型外枠A面）　指定 1642



006-1

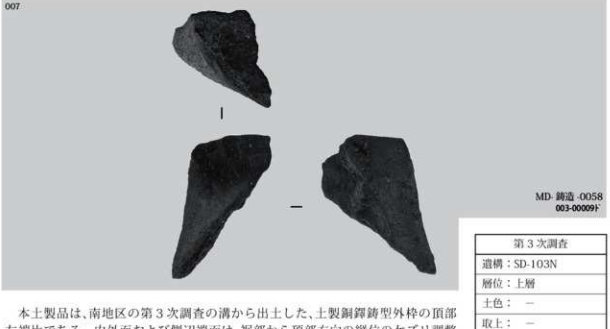
第３次調査
遺構：SD-103N
層位：上層
土色：　—
取上：　—
№：5702
残存長：15.9
残存幅：15.3

全体

共伴：大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1・Ⅵ-3様式

本土製品は、南地区の第３次調査の溝、第65次調査の黒褐色土層から出土した土製銅鐸鋳型外枠である。頂部～身部の破片である。006-1は、第３次調査１片・第65次調査２片が接合する。外面には横位方向の紐圧痕が残存することから、乾燥時に緊縛していたと考えられる。外面はナデ調整後に縦位のケズリ、内面は斜位のハケ調整を施す。内面は調整後、ヘラの刺突により器面粘土を抉り取っている。本品全体の共伴土器は大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1・Ⅵ-3様式である。

007　鋳造関連（２号土製銅鐸鋳型外枠Ｂ面）　指定 1643



第３次調査
遺構：SD-103N
層位：上層
土色：　－
取上：　－
№：5703
共伴：大和第Ⅴ様式
残存長：8.7
残存幅：5.7

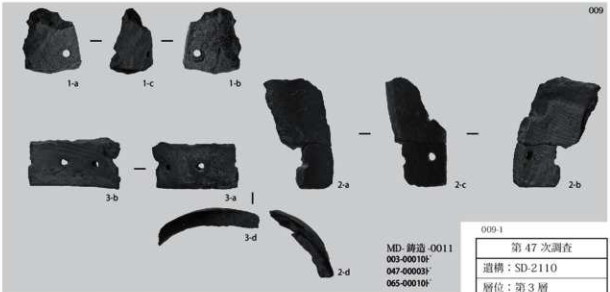
本土製品は、南地区の第３次調査の溝から出土した、土製銅鐸鋳型外枠の頂部左端片である。内外面および側辺端面は、裾部から頂部方向の縦位のケズリ調整を施す。胎土の色調は淡褐色を呈し、頂部上面には黒斑がみられる。時期は大和第Ⅴ様式である。

008　鋳造関連（３号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1644

第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第５層
土色：灰黒粘
取上：イ -503
№：522
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：18.5
残存幅：27.1

本土製品は、南地区の第 61 次調査の区画溝、第 65 次調査の黒褐色土層から出土した土製銅鐸鋳型外枠の裾部片である。３片が接合するものの他、接合しない３小片（第３・65・77 次調査）がある。左側にやや膨らみがあり、把手がつくものと思われる。身部の縦断面は直線的でなく、裾部が外反する。側辺部ちかくでは明瞭な縦方向の接合剥離痕が見られる。また、身部中央部の厚みが約２㎝であるのに対して、側辺部ちかくは厚み３㎝以上となることから、型作りの可能性が高い。外面は、身部中央から裾部にかけて縦位のケズリ調整を施すが、左側の把手付近では乾燥後の板状工具によるナデによりミガキ風になっている。内面は、中央部を横位ケズリ後、側辺部ちかくに縦位ケズリ調整を施す。中央部は乾燥後ナデ調整。裾部下面もケズリ調整を施し、端面は接地する。色調は、淡褐色から暗赤褐色を呈する。左側辺部の外面には黒斑が残る。本品全体の共伴土器は大和Ⅴ-1・Ⅵ-3・４様式である。

009　鋳造関連（4号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1645



009-1

第 47 次調査
遺構：SD-2110
層位：第 3 層
土色：　－
取上：土-310
№：126
共伴：大和第Ⅵ-3 様式
残存長：18.9
残存幅：10.0

本土製品は、南東端の第 47 次調査の環濠、南地区の第 65 次調査の黒褐色土層等から出土した土製銅鐸型外枠である。身部～裾部片 4 片（うち 2 片接合）が残存する。側辺部端面は鋭利な工具による裁断面である。側辺部に沿うように径 1.5 ㎝の小孔 1 つ、裾部に沿うように径 1.5 ㎝の小孔が約 6 ㎝間隔で 2 つと 3 つ残存する。内外面ともハケ後ナデ調整を施す。内面裾部は粗いハケ調整を施すが、裾端部まではおよばない。本品全体での共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3様式である。

010　鋳造関連（5号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1646

010-2

第 65 次調査
遺構：SD-101E
層位：第 1 層
土色：　－
取上：イ-101
№：102
共伴：大和第Ⅵ-3 様式
残存長：16.0
残存幅：11.1

本土製品は、南地区の第 61 次調査の区画溝、第 65 次調査の方形周溝墓等から出土した土製銅鐸型外枠である。身部～裾部片 8 片（うち 3 片・2 片が接合）が残存する。側辺部端面は鋭利なケズリ痕によって面をもつ。側辺部や裾部に沿うように径 0.8 ～ 1.2 ㎝の小孔 9 つが残存する。器面は被熱？によって赤褐色を呈す。外面はハケ後ナデ調整、内面はケズリ調整を施す。本品全体での共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式である。

011　鋳造関連（6号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1647

011

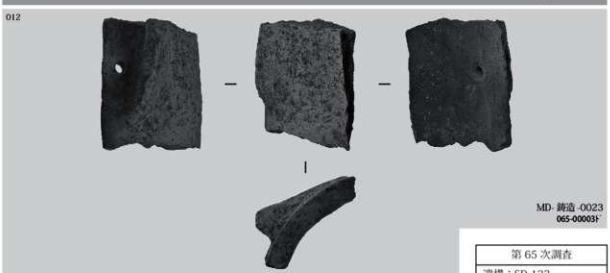
MD-鋳造-0010
047-00002

本土製品は、南東端の第47次調査の環濠から出土した、土製銅鐸鋳型外枠の身部中央片である。上下端には明瞭な接合痕が残る。そのプレスの幅は約10㎝あり、その間に3帯ほどの粘土紐帯がみられる。外面には2ヶ所に紐圧痕が残る。外面はタタキ成形後ナデ調整、内面は縦位のケズリ調整を施す。胎土の色調は外面が暗褐色、内面が灰褐色を呈す。砂粒が他のものと異なり、非常に細かい。共伴土器は大和第Ⅴ-1様式である。

第47次調査
遺構：SD-2101
層位：第7層
土色：灰黒色砂質土
取上：その2
No.：359
共伴：大和第Ⅴ-1様式
残存長：10.8
残存幅：12.8

012　鋳造関連（7号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1648

012



MD-鋳造-0023
065-00003

本土製品は、南地区の第65次調査の区画溝から出土した。土製銅鐸鋳型外枠の身部～左側辺部片で、外面には貼付把手の一部が残存する。上下端には明瞭な接合痕が残る。側辺部には径1.0㎝の小孔が、6.8㎝間隔で2つ残存する。また、把手の下側には紐圧痕が残る。外面はハケ・ナデ調整を施し、一部にはタタキが残る。内面は縦位のケズリ調整を施すが、側辺部にはおよばない。側辺部端面はシャープなケズリによる裁断面であり、最終的にはヘラ状工具によるナデで平坦になっている。共伴土器は大和第Ⅳ-2様式である。

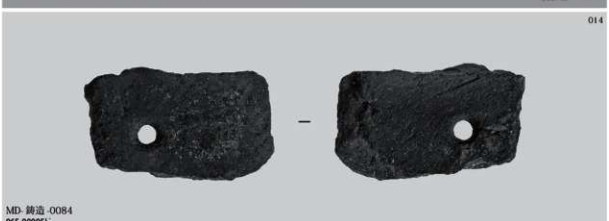
第65次調査
遺構：SD-123
層位：第1層
土色：　－
取上：イ-102
No.：870
共伴：大和第Ⅳ-2様式
残存長：12.4
残存幅：9.7

013　鋳造関連（８号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1649

本土製品は、南東端の第３次調査の環濠から出土した土製銅鐸鋳型外枠の身部～左側辺部片である。外面には貼付把手の剝離痕がみられる。上下端には明瞭が接合痕が残る。側辺部には径0.9 ～ 1.0㎝の小孔が、6.0㎝間隔で３つ残存し、その内１つは側辺部端面にかかっている。これは、穿孔後に縦裁断をおこなったためであろう。外面には紐圧痕３条が残る。外面はナデ調整、内面は縦位のケズリ調整を施す。

第３次調査
遺構：SD-106・107
層位：上層
土色：　－
取上：　－
№：5706
共伴：　－
残存長：11.6
残存幅：10.5

014　鋳造関連（９号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1650



本土製品は、南地区の第65次調査の中世小溝から出土した土製銅鐸鋳型外枠の身部片である。裾部よりやや上の側辺に近い部分にあたると思われる。上端の剝離面に接合痕がみられ、明瞭な指頭圧痕が残っている。内外面から回転によってあけられている小孔１つ（外径約1.5㎝、内径0.9㎝）が残存する。外面はタタキ成形と思われるが、不明瞭である。全体的にはナデ調整を施しており、微細な植物繊維圧痕を伴う。内面は斜位のケズリ調整を施す。胎土の色調は、外面が暗褐色、内面が灰黒色を呈す。

第65次調査
遺構：SD-02
層位：第１層
土色：　－
取上：イ-101
№：797
共伴：　－
残存長：5.6
残存幅：9.1

015　鋳造関連（10 号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1651

本土製品は、南地区の第 61 次調査の区画溝から出土した、土製銅鐸鋳型外枠の左側辺部～裾部片である。裾部下面に砂粒の圧痕がみられる。裾端部に径 1.2 ～ 1.3 ㎝の小孔が 3.3 ～ 4.3 ㎝間隔で 4 つ残存しており、その内 1 つは側辺部端面にかかっている。これは、鋳造関連 013 と同様で、穿孔後の縦裁断のためであろう。外面はタタキ後ナデ調整、側辺部はケズリ調整を施す。内面は横位のケズリ調整、側辺部は縦位のケズリ調整を施す。また、側辺部端面にケズリによる裁断面がみられる。共伴土器は大和第Ⅴ・Ⅵ-4 様式である。

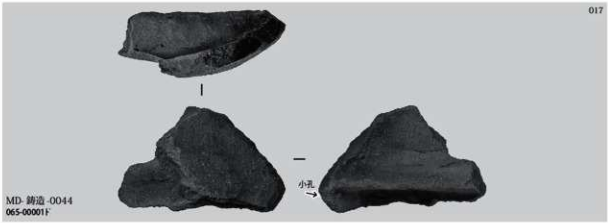
第 61 次調査
遺構：SD-101B
層位：第 2 層
土色：黒褐色粘質土
取上：イ -202
№：199
共伴：大和第Ⅴ・Ⅵ-4 様式
残存長：7.5
残存幅：11.6

016　鋳造関連（11 号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1652

本土製品は、南地区の第 65 次調査の柱穴から出土した。土製銅鐸鋳型外枠の身部～裾部片で、これ以外に本品の下部にあたる破片 2 片と、右裾部末端の小片がある。型作りによる成形の可能性がある。外面身部中央右側辺部では、器壁を一部抉るとともに粘土を摘まみ出して把手を成形している。外面に紐圧痕 2 条が、側辺部に板状の圧痕 3 つが残る。側辺部・裾部内面には、高さ 0.5 ㎝、幅 1.4 ～ 2.5 ㎝の段を削り出す。この段は末端部分では「L」字状に収束させる。また、径 0.1 ㎝の小孔 2 つが残存する。左側辺部内面には断面「U」字状の溝が横走する。外面はケズリ調整もしくはケズリ後ナデ調整、内面はケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅳ-1 様式である。

第 65 次調査
遺構：Pit-2121
層位：第 1 層
土色：　－
取上：イ -101
№：900
共伴：大和第Ⅳ-1 様式
残存長：14.1
残存幅：10.5

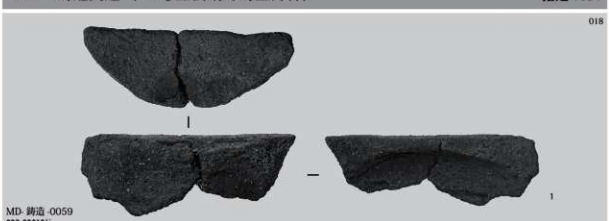
017　鋳造関連（12 号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1653



本土製品は、南地区の第 65 次調査の井戸から出土した、土製銅鐸鋳型外枠の鈕部～身部片である。仕切板に対応する外面部分がやや突出しており、紐圧痕が残る。仕切板の左側やや下の側辺近くに復元径 0.6 ㎝の小孔 1 つが残存している。外面はハケ調整、内面は縦位のハケ調整を施す。内面には調整後に仕切板を貼付けている。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

第 65 次調査
遺構：SK-115
層位：第 5 層
土色：　―
取上：イ-501
№：515
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：8.9
残存幅：13.3

018　鋳造関連（13 号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1654



本土製品は、南地区の第 3 次調査の遺物包含層から出土した、土製銅鐸鋳型外枠の頂部片である。頂部上端の左端に植物繊維圧痕が残り、右端の上端には真土と考えられる土が付着している。外面は全体にナデ調整を施すが、身部の一部にヘラミガキ調整の痕跡が残存している。内面はケズリ調整を施す。

第 3 次調査
遺構：　―
層位：包含層下面
土色：　―
取上：　―
№：5707
共伴：　―
残存長：4.8
残存幅：14.1

019　鋳造関連（14 号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1655

019

MD- 鋳造 -0039
003-00007下
061-00001下
065-00011下

本土製品は、南地区の第61次調査の区画溝等から出土した土製銅鐸鋳型外枠の身部～裾部片である。6片で2部位から成る。外面側辺部に把手を作り出した後、身部外面の一部を抉り、粘土を貼付けて補強している。外面はケズリ後ナデ調整、内面は全体にケズリ調整を施す。内面は調整後、身部中央にヘラ状工具により横方向の刻目をつけている。破片上端では刻目の方向が異なることから、すぐ上方に仕切板がつくものと考えられる。本品全体ので共伴土器は大和Ⅳ・Ⅴ-1・Ⅵ-4様式である。

019-1

第３次調査
遺構：SD-107
層位：上層
土色：　－
取上：　－
№　：5709
残存長：28.5
残存幅：12.2

全体

共伴：大和第Ⅳ・Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式

020　鋳造関連（15 号土製銅鐸鋳型外枠Ａ面）　指定 1656

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝や環濠、第61次調査の区画溝から出土した土製銅鐸鋳型外枠である。右側辺部と裾部中央の一部を欠損するが、ほぼ全体がわかる土製品である。鋳造関連021と対になる可能性がある。平面は縦長の台形、横断面は丸みを帯びた蒲鉾形を呈す。型作り成形の可能性がある。外面の両側辺近くに、抉り込みと粘土の付加によって把手を作り出す。内面は上部に仕切板を設けるとともに、側辺部は削り込みにより段をもつ。外面はケズリ後ミガキ調整を施す。内面は全面がケズリ調整であるが、仕切板より上はヘラと指頭によって器面を抉っている。裾部下面の両端にはヘラによる直線の合印が付けられている。本品全体での共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

第３調査
遺構：SD-105
層位：上層
土色：灰黒色粘砂
取上：　－
№　：5711
長さ：40.4
幅　：26.5

全体

共伴：大和第Ⅴ-1 様式

021　鋳造関連（15 号土製銅鐸鋳型外枠Ｂ面）　指定 1657

鋳造関連 020（上）・021（下）を合わせた状態

MD- 鋳造 -0050
003-00001F

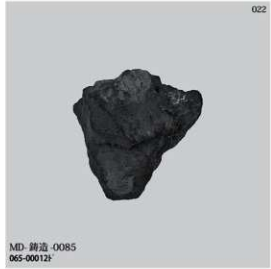
本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝や環濠、遺物包含層から出土した土製銅鐸鋳型外枠である。両側辺部の中央を欠損するが、ほぼ全体がわかる土製品である。鋳造関連 020 と対になる可能性がある。外面の把手は僅かに残存する。全体は縦長の台形で、断面形態は丸みを帯びており蒲鉾型を呈する。型作り成形の可能性がある。外面はケズリ後ミガキ調整、側辺部の立ち上がりはケズリ調整、内面身部は縦位の粗いケズリ調整、裾部は横位のケズリ調整を施す。裾部下面の両端にはヘラによる直線の合印が付けられている。時期は大和第Ⅴ-1 様式である。

第３次調査
遺構：SD-102N
層位：上層
土色：　－
取上：イ -101
№：5714
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
復元長：40.6
幅　：26.1

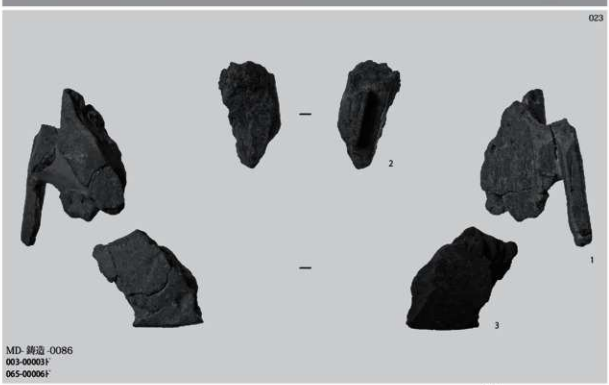
022　鋳造関連（16 号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1658

本土製品は、南地区の第65次調査の茶灰色粘質土層から出土した土製銅鐸鋳型外枠の鈕部上端とみられる破片である。外面には僅かに稜線がみられる。内面は盤状工具による粘土の掻き取りによって階段状になっており、上端はかなり厚みを増している。共伴土器は弥生時代後期である。

第 65 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：茶灰色粘質土
取上：　—
№　：800
共伴：弥生時代後期
残存長：4.3
残存幅：4.2



023　鋳造関連（17 号土製銅鐸鋳型外枠）　指定 1659



023-1

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝や環濠、第65次調査の黒褐色土層から出土した。土製銅鐸鋳型外枠の身部～裾部片である。４片があり３部位から成る。型作り成形で、側辺部を指頭によって抉り、形を整えることによって作り出した把手が一部残存している。外面には紐圧痕が２条残存している。内面の側辺部には段が削り出されている。外面はナデ調整、外面側辺部はケズリ後全体にナデ調整、内面は横位のケズリ調整を施す。内面側辺部は縦位のケズリ調整を施すが、板状工具によるナデにより平滑に仕上げている。胎土から、奈良盆地東南部産とみられる。共伴土器は大和第Ⅵ-3 様式である。

第３次調査
遺構：SD-104
層位：　—
土色：　—
取上：　—
№　：5719
共伴：大和第Ⅵ-3 様式
残存長：15.4
残存幅：10.5

024　鋳造関連（1号土製武器鋳型外枠）　指定 1660

024-2

第３次調査
遺構：SD-102
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№　：5725
残存長：18.6
残存幅：20.3

全体

共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1 様式

本土製品は、南地区の第３・47・61・65・77次調査の環濠や区画溝、土坑等から出土した土製武器鋳型外枠である。基部および身部・側辺部の残片で13片から成る。基部にあたる大きな破片(1)と身部中央から左側辺部の破片(2)、側辺部の６破片(3 ～ 8)があるが、いずれも部分接合しないことから対の可能性もある。幅広の粘土板をタタキによって成形した可能性がある。残存破片から推定すると身部から湯口部は長方形の箱形で、基部が「U」字形を呈する形態と考えられる。基部は、外面身部中央は横位の細条のタタキ後、局所的に斜位タタキを施す。側辺部は縦位タタキを施し、側辺の立ち上がり部を成形している。側辺部から基部にかけてタタキの上に粘土が貼られている部分があり、ひび割れ等の補修痕あるいは基部と身部を分割成形し接合している可能性がある。内面は無調整部分が多くみられるが、ナデ調整も一部みられる。また、基部から側辺部、側辺部上面はケズリによって平滑に整え、かつ立ち上がり部を作り出す。内面の形状は、基部から側辺が徐々に立ち上がるもので、側辺部の上端幅は１㎝前後である。立ち上がり部の屈曲は、緩やかな湾曲を呈する。本品全体ので共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1様式である。

025　鋳造関連（2号土製武器鋳型外枠）　指定 1661

本土製品は、南地区の第65次調査の土坑から出土した。土製武器鋳型外枠の基部付近の右側辺部片である。「U」字形を呈す基部の湾曲部分であり、側辺の立ち上がりは少ない。外面は横位タタキ調整、内面はナデ調整を施す。側辺の端部幅は0.8cmで、平坦面をもつ。共伴土器は大和第Ⅴ様式の可能性がある。

第 65 次調査
遺構：SK-106
層位：第 1 層
土色：黒褐色土
取上：　－
№：309
共伴：大和第Ⅴ様式？
残存長：4.3
残存幅：2.8

MD- 鋳造 -0087
065-000037

026　鋳造関連（3号土製武器鋳型外枠）　指定 1662

本土製品は、南地区の第61次調査の溝から出土した土製武器鋳型外枠の湯口部片である。湯口部がやや窄まり、湯口端部は面をもたず丸くおさめる。外面には細状のタタキがみられるが、ナデ調整によって消されている。側辺部は折り曲げて作っているようで、内面にシボリ痕跡がみられる。また、湯口部は指頭による成形のため、内面には指頭圧痕が残る。色調は、外面が暗褐色、内面が淡灰褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-103
層位：第 1 層
土色：黒色粘質土
取上：　－
№：202
共伴：大和第Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式
残存高：4.6
残存幅：4.8

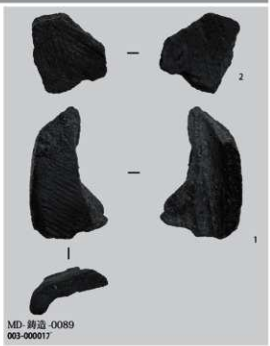
MD- 鋳造 -0088
061-000117

027　鋳造関連（4号土製武器鋳型外枠）　指定 1663

本土製品は、南地区の第3次調査の区画溝・土坑から出土した土製武器鋳型外枠の身部～側辺部片である。側辺部(1)は縦位タタキによって立ち上がり部を成形し、身部からの横位タタキによって形を整えるが、基部近くではケズリによって屈曲部の稜線を無くすとともに緩やかなカーブを作り出す。身部天井部にはタタキの上に粘土の付着がみられることから、把手を貼付けていた可能性がある。左側辺部近くには小孔が残る。(2)の外面にはタタキの上に植物繊維圧痕が 4 ヶ所にあり、緊縛痕の可能性がある。内面はケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅴ？・Ⅵ-2 様式である。

027-1

第 3 次調査
遺構：SD-102N
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№：5731
共伴：大和第Ⅴ様式？
残存長：10.5
残存幅：6.4



MD- 鋳造 -0089
003-000017

028　鋳造関連（5号土製武器鋳型外枠）　指定 1664

028

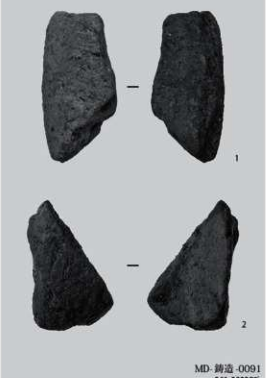
MD- 鋳造 -0090
003-000057

本土製品は、南地区の第3次調査の区画溝から出土した。土製武器鋳型外枠の左側辺部片である。身部天井面に粘土の付着と剝離痕があることから、把手が存在した可能性がある。側辺部は縦位タタキによって立ち上がり部を成形し、最終的に身部からの横位タタキによって形を整えるが、基部に近くなる側辺部ではケズリによって屈曲部の稜線を無くすとともに緩やかなカーブを描く基部を作り出している。胎土の色調は淡赤褐色を呈す。

第3次調査
遺構：SD-104・105
層位：　－
土色：　－
取上：　－
No.：5733
共伴：　－
残存長：8.3
残存幅：3.5

029　鋳造関連（6号土製武器鋳型外枠）　指定 1665

029



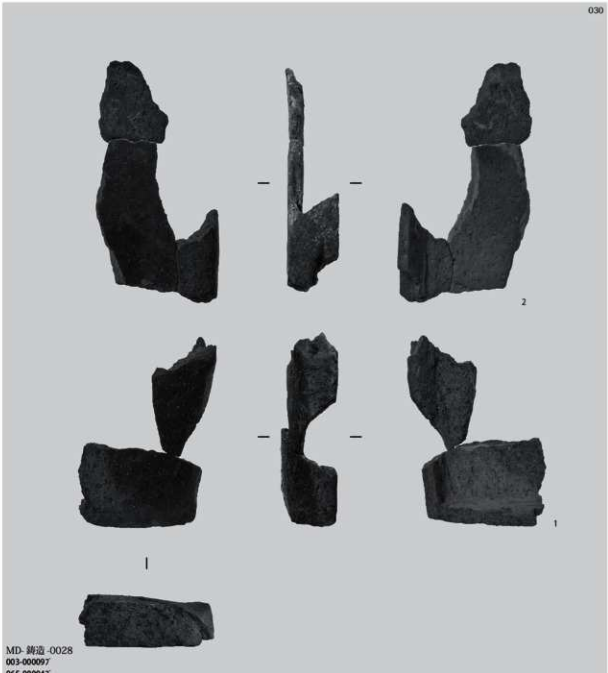
MD- 鋳造 -0091
061-000097

本土製品は、南地区の第61次調査の区画溝、黒褐色土層Ⅱから出土した土製武器鋳型外枠の左側辺部片である。身部の外面は横位タタキ調整、側辺部はナデ調整、内面はナデ調整を施す。胎土の色調は淡赤褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-3様式である。

029-1

第61次調査
遺構：SD-102B
層位：第4層
土色：黒色粘砂
取上：　－
No.：385
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-3様式
残存長：6.5
残存幅：3.1

030　鋳造関連（7号土製武器鋳型外枠A面）　指定 1666



030-1

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝・遺物包含層、第65次調査の土坑・井戸から出土した。土製武器鋳型外枠の身部～基部片および身部～右側辺部片で、5片が残存する。色調から、鋳造関連031と対になる可能性が高い。基部は垂直に立ち上がるが、基部近くの側辺部は緩やかに湾曲しており、横断面形は蒲鉾形を呈する。内外面ともにケズリ調整を施すが、外面の一部は未調整である。一部に被熱がみられる。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ？様式である。

第 65 次調査
遺構：SK-109
層位：第 1（下）層
土色：暗灰褐色土
取上：　－
№：436
共伴：大和第Ⅳ-2 様式
残存長：16.1
残存幅：11.7

031　鋳造関連（7号土製武器鋳型外枠B面）　指定 1667

031

MD- 鋳造 -0092
003-000107

本土製品は、南東端の第3次調査の環濠から出土した。土製武器鋳型外枠の左側辺部～身部中央部片である。色調から、鋳造関連030と対になる可能性が高い。小片のため全体の形状は不明であるが、把手の抉られた部分が残り、把手の身部天井部側では付加した粘土が剝離している。外面は全体にナデ調整であろうか。内面はケズリ調整によって平滑な面を作っている。ケズリ工具は鋳造関連030と同じ幅をもつ。胎土の色調は灰褐色で、断面は淡赤褐色を呈し、被熱によるものと考えられる。特に外面の把手付近は表面が荒れている。

第3次調査
遺構：SD-106
層位：上層
土色：　－
取上：　－
No.：5737
共伴：　－
残存長：11.1
残存幅：9.3

032　鋳造関連（8号土製武器鋳型外枠）　指定 1668

032

1

2

MD- 鋳造 -0030
065-000147

本土製品は、南地区の第65次調査の方形周溝墓の東溝や黒褐色土層Ⅱから出土した。土製武器鋳型外枠の身部～右側辺部片で、3片2部位から成る。側辺部は垂直に立ち上がり、横断面形は箱形を呈する。長方形の粘土板の外側に薄い粘土板を付加して成形している。身部と側辺部の屈曲部には緊縛痕とみられる植物繊維圧痕が残る。また、小孔があけられていたが、製作時のミガキ調整もしくは泥状の付着物により消失している。粉真土を塗布した可能性もある。側辺部には焼成後に孔1つを穿孔している。外面身部はケズリ後ミガキ調整、側辺部および内面はケズリ調整を施す。全体での共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ様式である。

032-1

第65次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土
取上：イ-105
No.：943
残存長：12.7
残存幅：8.5

全体

共伴：大和第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ様式

033　鋳造関連（９号土製武器鋳型外枠）　指定 1669

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝、遺物包含層から出土した。土製武器鋳型外枠の身部～右側辺部片である。身部天井部の粘土板に側辺部の粘土板を付加し、側辺部はタタキによって整えている。外面は身部天井部を縦位ハケ後ナデ調整、側辺部はケズリ調整、内面は粗いケズリ調整を施す。

033-1

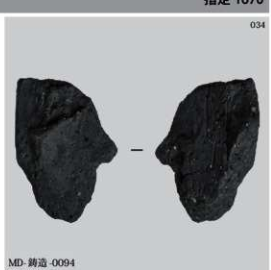
第３次調査
遺構：　－
層位：包含層
土色：　－
取上：　－
№　：5738
共伴：　－
残存長：15.4
残存幅：4.7

MD-鋳造-0093
003-000167

034　鋳造関連（10 号土製武器鋳型外枠）　指定 1670

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した。土製武器鋳型外枠の左側辺部～身部片である。身部天井部の貼付把手は剥離している。把手は側辺部を挟り取らずに天井部に粘土を貼付けて作り出していたようである。側辺はほぼ垂直に立ち上がり、身部とは直角に取り付く。把手より基部側はケズリによって緩やかに湾曲している。内外面ともにケズリ調整を施す。胎土の色調は灰褐色を呈す。

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№　：5741
共伴：　－
残存長：8.0
残存幅：6.2



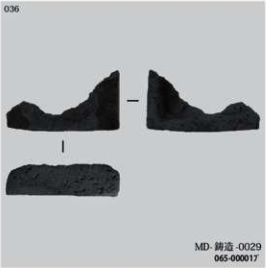
MD-鋳造-0094
003-000077

035　鋳造関連（11 号土製武器鋳型外枠）　指定 1671

本土製品は、南地区の第 77 次調査の溝から出土した土製武器鋳型外枠の基部片である。基部はほぼ垂直に立ち上がり、内面側は緩やかな斜面になっている。内外面ともケズリ調整を施すが、内面のケズリは弱い。胎土の色調は暗褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式である。

第 77 次調査
遺構：SD-4104
層位：第 2 層
土色：黒褐色砂質土
取上：　—
№　：180
共伴：大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式
残存長：2.4
残存幅：5.3

036　鋳造関連（12 号土製武器鋳型外枠）　指定 1672



本土製品は、南地区の第 65 次調査の井戸から出土した土製武器鋳型外枠の基部片である。基部下面は蒲鉾形を呈し、垂直に立ち上がり平坦面を有する。側辺部も垂直に立ち上がるが、身部天井部との界はケズリによって緩やかに湾曲する。側辺部と身部との界には、横位の植物繊維圧痕が残っており、乾燥時の緊縛痕とも考えられる。外面はタタキ・ナデ・ケズリ調整、内面はケズリ調整を施す。被熱している。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式？である

第 65 次調査
遺構：SK-105
層位：第 4 層
土色：　—
取上：イ -402
№　：439
共伴：大和第Ⅴ-1 様式？
残存長：6.5
残存幅：11.9

037　鋳造関連（14 号土製武器鋳型外枠）　指定 1673

本土製品は、南東端の第 3 次調査の環濠から出土した土製武器鋳型外枠の側辺部片である。内外面ともにケズリ調整を施す。胎土の色調は淡褐色を呈す。

第 3 次調査
遺構：SD-107
層位：上層
土色：　—
取上：　—
№　：5743
共伴：　—
残存長：8.0
残存幅：2.4

038　鋳造関連（15 号土製武器鋳型外枠）　指定 1674

本土製品は、南地区の第65次調査の黒褐色土層から出土した土製武器鋳型外枠の右側辺部片である。内外面ともにケズリによって形を整えている。胎土の色調は暗褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ様式である。

第 65 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土
取上：　—
№　：438
共伴：大和第Ⅳ・Ⅴ様式
残存長：8.4
残存幅：2.0

039　鋳造関連（16 号土製武器鋳型外枠）　指定 1675

本土製品は、南地区の第69次調査の区画溝から出土した土製武器鋳型外枠の左側辺部～湯口部片である。内外面ともにケズリによって形を整えているが、湯口部は指頭によって成形しており、やや粗雑な仕上がりである。また、接合痕の剝離から、身部天井部の粘土板に側辺部と湯口部を粘土の付加によって成形していることがわかる。胎土の色調は灰黒色を呈す。共伴土器は大和第Ⅴ様式である。

第 69 次調査
遺構：SD-1101B
層位：第 3-7 層
土色：黒色粘砂
取上：　—
№　：1272
共伴：大和第Ⅴ様式
残存長：6.2
残存幅：4.1

040　鋳造関連（17 号土製武器鋳型外枠）　指定 1676

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層から出土した土製武器鋳型外枠の右側辺部～基部片である。外面は一部にケズリがみられるが、全体にナデ調整を施している。内面はケズリによって側辺部の立ち上がりを作る。胎土の色調は淡褐色を呈し、基部近くには黒斑がみられる。

第３次調査
遺構：　—
層位：包含層下面
土色：　—
取上：　—
№　：5744
共伴：　—
残存長：10.8
残存幅：3.8

041　鋳造関連（18 号土製武器鋳型外枠）　指定 1677

本土製品は、南東端の第 40 次調査の環濠から出土した土製武器鋳型外枠の側辺部片である。全体的に厚手であるが、側辺部の立ち上がりは短く、内面側で 1.3 ㎝ほどしかない。外面はナデ調整であろうか。内面はケズリ調整を施す。胎土の色調は、外面は淡褐色、内面は淡赤褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

第 40 次調査
遺構：SD-101
層位：第 7-b 層
土色：灰黒色砂質土
取上：　—
No.：239
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：7.4
残存幅：4.9

042　鋳造関連（19 号土製武器鋳型外枠）　指定 1678

本土製品は、南地区の第 65 次調査の暗茶褐色層から出土した土製武器鋳型外枠の側辺部片である。外面はタタキもしくは粗いハケ調整、内面はケズリ調整を施す。胎土の色調は内外面ともに淡赤褐色を呈す。共伴土器は弥生時代後期である。

第 65 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：暗茶褐色土
取上：　—
No.：814
共伴：弥生時代後期
残存長：7.5
残存幅：5.5

043　鋳造関連（20 号土製武器鋳型外枠）　指定 1679

本土製品は、南地区の第 65 次調査の方形周溝墓の東溝から出土した。土製武器鋳型外枠の側辺部片である。外面はタタキもしくは粗いハケ調整、内面はケズリ調整を施す。胎土の色調は内外面ともに淡褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅵ-3 様式である。

第 65 次調査
遺構：SD-101E
層位：第 1 層
土色：黒褐色土
取上：　—
No.：113
共伴：大和第Ⅵ-3 様式
残存長：4.2
残存幅：2.2

044　鋳造関連（21 号土製武器鋳型外枠）　指定 1680

044

MD- 鋳造 -0015
061-000167
065-000257

044-1

第 61 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土
取土：　—
№　：10
共伴：弥生時代中・後期
残存長：12.0
残存幅：9.9

本土製品は、南地区の第 61 次調査の区画溝や黒褐色土層、第 65 次調査の黒褐色砂質土層から出土した。土製武器鋳型外枠の身部～基部片および右側辺部片で、5 片がある。外形は長方形を呈し、基部は垂直に立ち上がる。横断面形は箱形を呈す。厚手の長方形の粘土板から、内面側の粘土を掻き取って成形している。内面は格子目状、側辺部および基部端面はヘラによって「V」字溝状にくぼませている。外面の身部は無調整、側辺部はケズリ調整を施す。全体での共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ・Ⅳ様式である。

045　鋳造関連（22 号土製武器鋳型外枠）　指定 1681

045

MD- 鋳造 -0102
065-000057

本土製品は、南地区の第 65 次調査の井戸や住居址から出土した土製武器鋳型外枠片である。右側辺部～基部片であろうか。身部天井部や側辺部の厚みがほぼ均一、界は直角で、整った形態の外枠である。外面側辺部はタタキ調整、身部天井部はケズリ後丁寧なナデ調整で一部にミガキ調整を施す。内面は側辺部の立ち上がりを垂直に裁断しており、ヘラによる深い切れ込みが走る。また、基部側と想定する部分にも同様の切れ込みがあり、ヘラによる縁辺の整形が想定できる。身部内面はケズリ後強いナデ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

第 65 次調査
遺構：SK-134
層位：第 4(下) 層
土色：黒粘
取上：　—
No ：681
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：5.9
残存幅：5.0

046　鋳造関連（23 号土製武器鋳型外枠）　指定 1682

046

MD- 鋳造 -0008
047-000037

本土製品は、南東端の第 47 次調査の環濠から出土した土製武器鋳型外枠の側辺部片である。身部天井部が平坦で、側辺部の立ち上がりが垂直になる形態である。側辺部の端面はやや丸く、内面側に傾く。立ち上がりも短く、やや幅広である。外面は成形時のままの無調整で、器面はあまり整っていない。内面はケズリ調整を施す。身部内面にはヘラによる格子目（1.6×2.7 ㎝）がみられる。胎土の色調は淡褐色を呈し、側辺部には黒斑がみられる。共伴土器はⅤ-1 ？・Ⅶ-4 様式である。

第 47 次調査
遺構：SD-2102
層位：第 3 層
土色：植物層
取上：　—
No ：99
共伴：大和第Ⅴ-1?・Ⅶ-4 様式
残存長：9.2
残存幅：3.8

047　鋳造関連（24 号土製武器鋳型外枠）　指定 1683

047

MD- 鋳造 -0103
003-000037

本土製品は、南地区の第 3 次調査の区画溝から出土した土製武器鋳型外枠の側辺部片である。身部天井部が平坦で、側辺部の立ち上がりが垂直になる形態である。側辺部の端面はやや丸く、内面側に傾く。立ち上がりも短く、やや幅広である。外面は成形時のままの無調整で、器面はあまり整っていない。内面はケズリ調整を施す。身部内面にはヘラによる格子目（1.6×2.7 ㎝）がみられる。胎土の色調は淡褐色を呈し、側辺部には黒斑がみられる。

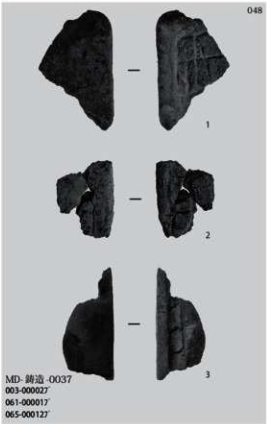
第 3 次調査
遺構：SD-104
層位：下層
土色：　—
取上：　—
No ：5745
共伴：　—
残存長：6.4
残存幅：2.5

048　鋳造関連（25 号土製武器鋳型外枠）　指定 1684

本土製品は、南地区の第３次調査の溝、第61次調査の土坑、第65次調査の柱穴から出土した。土製武器鋳型外枠の湯口部～右側辺部片で、３片がある。身部に新たに粘土を付加して湯口部を作っており、先端は内側に傾く斜面となる。側辺部の端面はやや丸く、内面側に傾く。外面はナデ調整、内面はケズリ調整を施す。内面には先端が丸いヘラによる格子目(1.6×2.0㎝)がみられる。全体での共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ-1 様式である。

048-1

第 61 次調査
遺構：SK-128
層位：　―
土色：暗灰褐色砂質土
取上：　―
№：955
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：10.2
残存幅：6.3

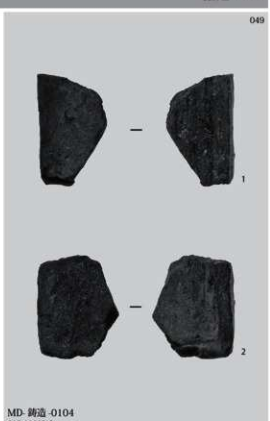


049　鋳造関連（26 号土製武器鋳型外枠）　指定 1685

本土製品は、南地区の第65次調査の暗茶褐色土層から出土した。土製武器鋳型外枠の左側辺部～基部片で、２片がある。側辺部・基部ともに短く垂直に立ち上がり、厚みが0.7㎝程度とほぼ均一で薄い仕上がりになっている。外面は丁寧なナデ調整、内面はケズリ調整を施す。側辺端部は平坦な面をもつ。胎土には砂粒が少なく、色調は淡褐色を呈し、側辺部には黒斑がみられる。共伴土器は弥生時代中・後期である。

049-1

第 65 次調査
遺構：　―
層位：　―
土色：暗茶褐色土
取上：　―
№：806
共伴：弥生時代中・後期
残存長：5.5
残存幅：3.4



050　鋳造関連（27 号土製武器鋳型外枠）　指定 1686

本土製品は、南地区の第 65 次調査の井戸から出土した土製武器鋳型外枠の身部天井部片である。外面はナデ調整、内面はケズリ調整を施す。胎土の色調は淡赤褐色～淡褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

第 65 次調査
遺構：SK-134
層位：第 2 層
土色：暗灰褐色粘質土
取上：　—
No.：631
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：5.5
残存幅：5.1

051　鋳造関連（28 号土製武器鋳型外枠）　指定 1687

本土製品は、南地区の第 65 次調査の黒褐色土層から出土した。土製武器鋳型外枠の天井部中央片である。外面はナデ調整、内面はケズリ調整を施す。胎土の色調は灰黒色を呈す。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

第 65 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土
取上：　—
No.：196
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：4.3
残存幅：5.0

052　鋳造関連（29 号土製武器鋳型外枠）　指定 1688

本土製品は、南地区の第 77 次調査の土坑から出土した土製武器鋳型外枠の側辺部片である。直角に屈曲するのではなく、やや傾斜面をもって側辺部が取り付く。外面はナデ調整、内面はケズリ調整を施す。胎土の色調は淡灰色～灰黒色を呈す。共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3・4 様式である。

第 77 次調査
遺構：SK-4103
層位：第 1(下) 層
土色：黒褐色粘砂
取上：　—
No.：250
共伴：大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3・4 様式
残存長：5.3
残存幅：4.5

053　鋳造関連（30 号土製武器鋳型外枠）　指定 1689

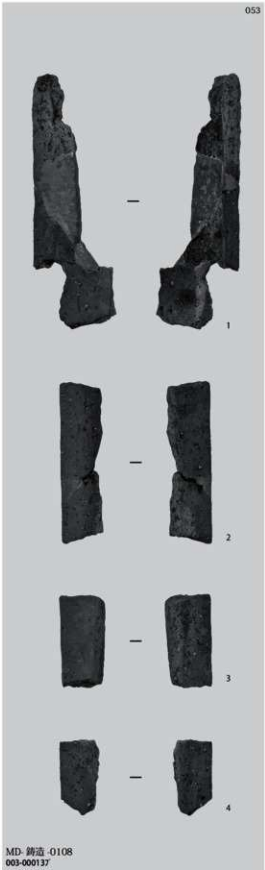
本土製品は、南地区の第３次調査の土坑や区画溝、第65次調査の井戸から出土した。土製武器鋳型外枠の湯口部～側辺部片で、7片（うち３片・２片接合）がある。身部の天井面は丸みをもち、側辺部へ緩やかな湾曲をもって取り付く。内外面はケズリ調整を施すが、外面側辺部には僅かにタタキの痕跡が残存している。色調は淡赤褐色を呈していることから、被熱しているとみられる。全体での共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-2様式である。

053-1

第３次調査
遺構：Pit-105
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№　：5747
残存長：17.3
残存幅：5.9

全体

共伴：大和第Ⅴ-1・Ⅵ-2様式

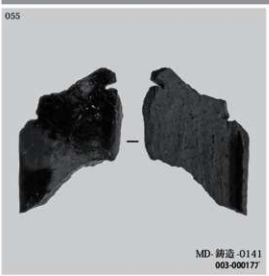


054　鋳造関連（31 号土製武器鋳型外枠）　指定 1690

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝や環濠、第61次調査の区画溝から出土した。土製武器鋳型外枠の身部～右側辺部片で、３片から成る。内外面ともにケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅳ-２・Ⅴ-１様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第５層
土色：灰黒粘
取上：　—
No.：318
共伴：大和第Ⅳ-２・Ⅴ-１様式
残存長：12.2
残存幅：12.9

055　鋳造関連（32 号土製武器鋳型外枠）　指定 1691



本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層から出土した土製武器鋳型外枠の身部片である。両側辺が残存している。外面側辺部近くに楕円形の孔（0.8×1.7㎝）を焼成後にあける。外面全体は丁寧なナデ調整または軽いミガキ調整、内面は粗いケズリ調整を施す。

第３次調査
遺構：　—
層位：包含層
土色：　—
取上：　—
No.：5753
共伴：　—
残存長：16.3
残存幅：12.0

056　鋳造関連（33 号土製武器鋳型外枠）　指定 1692

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層から出土した土製武器鋳型外枠の身部片である。内面から外面へ焼成前穿孔（径0.6㎝）を３ヶ所にあける。外面は全体に黒斑がみられる。内面は暗褐色を呈す。外面はナデ調整、内面はケズリ後ナデ調整を施す。

第３次調査
遺構：　—
層位：包含層下面
土色：　—
取上：　—
No.：5754
共伴：　—
残存長：9.2
残存幅：8.0

057　鋳造関連（34 号土製武器鋳型外枠Ａ面）　指定 1693

本土製品は、南地区の第 61 次調査の区画溝、第 77 次調査の黒褐色土層から出土した土製武器鋳型外枠である。湯口部～身部の一部を欠損する。身部中央ではやや膨らむ細長い長方形の箱型を呈する。湯口部はややすぼまり、面をもつ。基部は身部をふさぐように粘土板を付加している。指頭により、身部中央の両側辺に把手を作り出す。外面全体はナデ調整、側辺部・湯口部はケズリ調整、内面はケズリ調整を施す。鋳造関連058と対になる可能性が高い。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-3様式である。

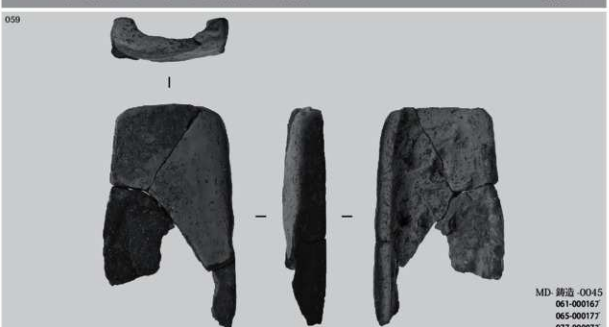
第 77 次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土
取上：イ-101
№：195
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-3様式
高さ：26.7
幅　：11.4

058　鋳造関連（34 号土製武器鋳型外枠Ｂ面）　指定 1694

本土製品は、南地区の第 65 次調査の溝から出土した。土製武器鋳型外枠の湯口部～身部および左側辺部片である。湯口部はややすぼまり、面をもつ。身部中央の左側辺部に僅かに把手が残存する。幅 1.5 ㎝程の丸鑿状工具を基部側から突き刺して粘土を掻き取り、器面を凹凸状に仕上げている。鋳造関連057と対になる可能性が高い。共伴土器は大和第Ⅳ様式？である。

第 65 次調査
遺構：SD-104
層位：第 1 層
土色：　－
取上：イ -101
№　：291
共伴：大和第Ⅳ様式？
残存長：13.1
残存幅：7.8

059　鋳造関連（35 号土製武器鋳型外枠）　指定 1695



本土製品は、南地区の第61・65・77次調査の溝や黒褐色土層から出土した。土製武器鋳型外枠の湯口部～身部片で、4 片から成る。外面は全体的に指頭による成形とナデ調整で仕上げ、側辺部はケズリによって形態を整える。身部中央部あたりの両側辺には、指頭によって浅く窪ませた長さ 7 ㎝、幅 1.5 ㎝程度の把手を作り出している。内面は、両側辺が幅 1.3 ㎝、高さ 1 ㎝ほどの立ち上がり部をヘラ状工具によって削り出す。側辺部端面はケズリによって平滑にしているが、内面側に斜めになっているため、接地は端面の外側のみである。また、内面全体についても幅 1.5 ㎝ほどの丸鑿状工具を湯口側から突き刺し、粘土を掻き取り、器面を凹凸状に仕上げている。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式である。

第 61 次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土Ⅱ
取上：　－
№　：190
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式
残存長：20.9
残存幅：12.1

060　鋳造関連（36 号土製武器鋳型外枠）　指定 1696

本土製品は、南地区の第65次調査の黒褐色土層から出土した土製武器鋳型外枠の湯口部片である。湯口部端面の幅が１㎝ほどで全体に厚みがなく、一回り小さい小形品である。側辺部の端面は、幅0.8㎝で立ち上がり部は緩やかに仕上げる。内面は、丸鑿状工具による粘土掻き取りがみられる。胎土の色調は淡褐色を呈し、身部中央に黒斑を有する。内外面ともにケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3様式である。

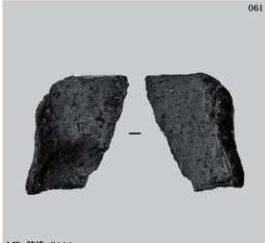
第 65 次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土
取上：　－
No.：11
共伴：大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3様式
残存長：7.6
残存幅：5.3

MD- 鋳造 -0110
065-000197

061　鋳造関連（37 号土製武器鋳型外枠）　指定 1697

本土製品は、南地区の第65次調査の黒褐色土層から出土した土製武器鋳型外枠の湯口部片である。湯口部は端面を有さず、シャープさを欠いた形態である。側辺部の端面は幅0.5～0.7㎝で細く、立ち上がり部も緩やかに仕上げる。内面は、丸鑿状工具による粘土掻き取りがみられる。胎土の色調は淡褐色を呈し、側辺部に黒斑を有する。内外面ともにケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ様式である。

第 65 次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土
取上：　－
No.：198
共伴：大和第Ⅳ・Ⅴ様式
残存長：6.1
残存幅：5.4



MD- 鋳造 -0111
065-000157

062　鋳造関連（38 号土製武器鋳型外枠）　指定 1698

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層から出土した土製武器鋳型外枠の基部左端片である。基部にやや膨らみをもち、高さはなくやや扁平な形態である。基部の端面は幅1.8㎝程あるが、側辺部の端面は幅1.0㎝程しかなく、狭くなっている。鋳造関連063と同一もしくは対になる個体であろうか。全体的にケズリ調整を施す。内面には、丸鑿状工具による粘土掻き取りがみられる。胎土の色調は淡褐色を呈し、側辺部に黒斑を有する。

第３次調査
遺構：　－
層位：包含層
土色：　－
取上：　－
No.：5755
共伴：　－
残存長：4.0
残存幅：6.0

MD- 鋳造 -0112
003-000197

063　鋳造関連（39 号土製武器鋳型外枠）　指定 1699

063

MD- 鋳造 -0113
003-000187

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層から出土した土製武器鋳型外枠の基部右端片である。基部端面はケズリによって平滑にするが、鋳造関連057と同様に斜めになっているため、接地は端面外側のみである。鋳造関連057・062と同一もしくは対になる個体であろうか。外面はケズリ後ナデ調整を施す。胎土の色調は淡褐色を呈す。

第３次調査
遺構：　－
層位：包含層
土色：　－
取上：　－
№：5756
共伴：　－
残存高：5.1
残存幅：8.1

064　鋳造関連（42 号土製武器鋳型外枠）　指定 1700

064

MD- 鋳造 -0082
003-000227

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層から出土した土製武器鋳型外枠の湯口部～側辺部片である。湯口部がすぼまる形態である。右側辺部が欠損しているが、身部の大きさがほぼわかり、外側幅が約８㎝、内側幅が約6.8㎝である。横断面形は蒲鉾形を呈する。側辺部の立ち上がり部は幅0.7㎝、高さ0.8㎝と短く細いが、丁寧な作りであり、型作り成形と考えられる。胎土は緻密で、それほど砂粒を含まず、色調は淡褐色～暗褐色を呈す。

第３次調査
遺構：　－
層位：包含層下面
土色：　－
取上：　－
№：5757
共伴：　－
残存長：13.3
残存幅：7.7

065　鋳造関連（43 号土製武器鋳型外枠Ａ面）　指定 1701

本土製品は、南地区の第 61 次調査の区画溝から出土した土製武器鋳型外枠である。右側辺部の一部と基部を欠損する。平面形は長方形、断面形は蒲鉾形を呈する。縦長の粘土板を４本継ぎ足し、身部と側辺部を成形している。指頭によって稜線を摘み出し、くぼみを作ることによって両側辺部に把手を作り出している。外面中位には植物繊維圧痕が２条みられる。外面はタタキ後ナデ調整を施し、基部近くにケズリ痕が残存する。内面は縦位のケズリ調整を施す。湯口部は横位に深く削り、漏斗状に広げる。局所的に被熱がみられる。鋳造関連066と対になる個体の可能性がある。共伴土器は大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1様式である。

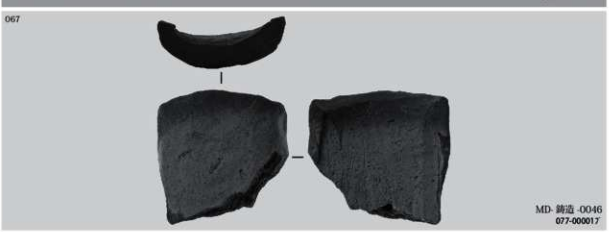
第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第５層
土色：灰黒粘
取上：イ -504
№ ：642
共伴：大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1 様式
残存長：25.0
幅　：10.6

066　鋳造関連（43 号土製武器鋳型外枠Ｂ面）　指定 1702

本土製品は、南地区の第 61 次調査の区画溝から出土した土製武器鋳型外枠の身部片である。粘土板をタタキによって成形後、内面側辺部の立ち上がり部をケズリによって作り出す。外面の身部に紐圧痕が２条残る。鋳造関連065と対になる側体の可能性がある。共伴土器は大和第Ⅵ-3・4 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第２層
土色：黒褐色粘質土
取上：イ -201
№：255
共伴：大和第Ⅵ-3・4 様式
残存長：12.0
残存幅：10.2

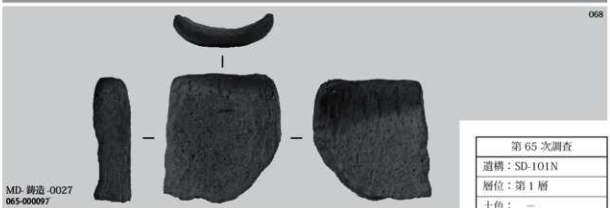
067　鋳造関連（44 号土製武器鋳型外枠）　指定 1703



本土製品は、南地区の第 77 次調査の土坑から出土した土製武器鋳型外枠の湯口部片である。湯口部は身部に粘土を付加し、指頭によって成形した後、横位の深いケズリによって漏斗状に広げている。外面はタタキ後ナデ調整、内面はケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅵ-3・4 様式である。

第 77 次調査
遺構：SK-4103
層位：第２層
土色：　－
取上：イ -201
№：269
共伴：大和第Ⅵ-3・4 様式
残存長：9.7
残存幅：9.8

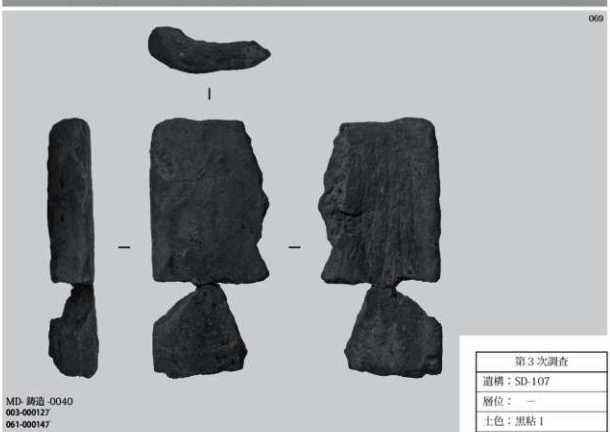
068　鋳造関連（45 号土製武器鋳型外枠）　指定 1704



第 65 次調査
遺構：SD-101N
層位：第 1 層
土色：　—
取上：イ -101
№：103
共伴：大和第Ⅵ-3 様式
残存長：12.6
幅　：11.3

本土製品は、南地区の第 65 次調査の方形周溝墓の北溝から出土した土製武器鋳型外枠の湯口部～身部片である。身部天井面が丸みをもつ形態である。側辺部の立ち上がりは不明瞭となっている。内外面はヘラ状工具により粗く削る。湯口部は両面からさらに削り込んでおり、やや尖りぎみである。共伴土器は大和第Ⅵ-3 様式である。

069　鋳造関連（46 号土製武器鋳型外枠）　指定 1705



第 3 次調査
遺構：SD-107
層位：　—
土色：黒粘 I
取上：　—
№：5758
共伴：　—
残存長：21.5
残存幅：9.7

本土製品は、南東端の第 3 次調査の環濠、南地区の第 61 次調査の黒褐色土層から出土した。土製武器鋳型外枠の湯口部～身部片で、2 片がある。外面に植物繊維圧痕が、側辺部に幅 1 ㎝前後の浅い凹みが 3 ㎝間隔でみられる。内面の湯口部は指頭により漏斗状に成形している。外面全体はナデ調整、身部内面はヘラ状工具による粗いケズリ調整を施す。全体での共伴土器は弥生時代中・後期である。

070　鋳造関連（47 号土製武器鋳型外枠）　指定 1706

070

1

2

MD- 鋳造 -0114
003-000157
065-000137

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層、第65次調査の遺物包含層から出土した。土製武器鋳型外枠の湯口部片(1)および基部付近とみられる破片(2)がある。

(1)は外面に緊縛による横位方向の紐圧痕が残る。外面はケズリ調整を施す。内面は全体にケズリ調整を施した後、幅1.5㎝の擬状工具によって湯口側から粘土をすき取るように掻き取り、器面を凹凸状に仕上げている。

(2)は側辺部にナデ調整によって消されているがタタキ痕跡が僅かに残っており、タタキによって成形されていることがわかる。外面では身部から側辺部の屈曲が明瞭であるのに対し、内面では緩やかに立ち上がり不明瞭となっている。身部外面は縦位のハケ後ナデ調整を施す。

胎土の色調はどちらも淡褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ様式である。

070-1

第３次調査
遺構：　—
層位：包含層
土色：　—
取上：　—
№　：5759
共伴：　—
残存長：8.2
残存幅：5.9

071　鋳造関連（48 号土製武器鋳型外枠）　指定 1707

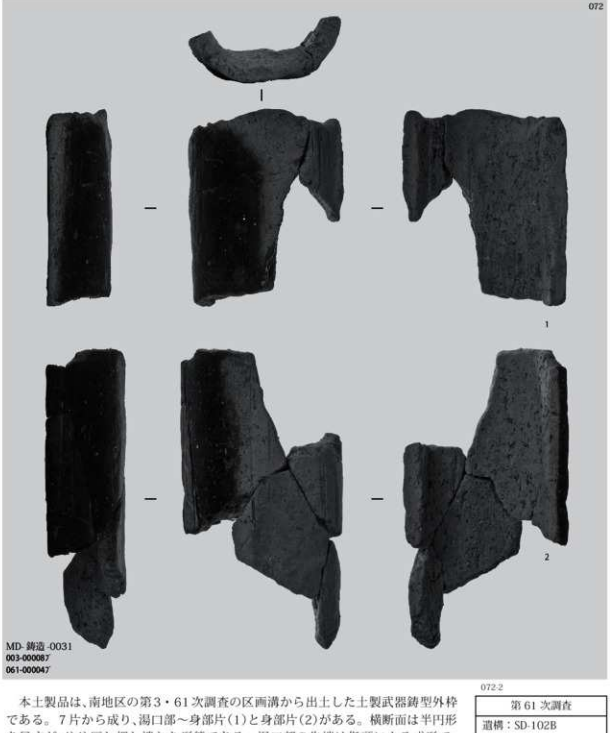
071

MD- 鋳造 -0115
077-000057

本土製品は、南地区の第77次調査の黒褐色粘質土層から出土した土製武器鋳型外枠の左湯口部～側辺部片である。側辺部が短く屈曲し、側辺部の厚みが１㎝であるのに対し身部は0.7㎝と薄く、小形になると考えられる。焼成前に湯口部先端に1.2㎝間隔で並行する小孔２つ(径0.6㎝)を外面側からあける。外面はナデ調整、内面はケズリ調整を施す。内面にはヘラ先端で斜格の鋭利な線刻が刻まれるとともに、２ヶ所にヘラの刺突を残す。胎土の色調は、外面は淡褐色を呈し、側辺部に黒斑を有する。内面は淡灰黒色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅵ-3・４様式である。

第 77 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色粘質土
取上：　—
№　：182
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅵ-3・4 様式
残存長：6.7
残存幅：5.6

072　鋳造関連（49 号土製武器鋳型外枠）　指定 1708

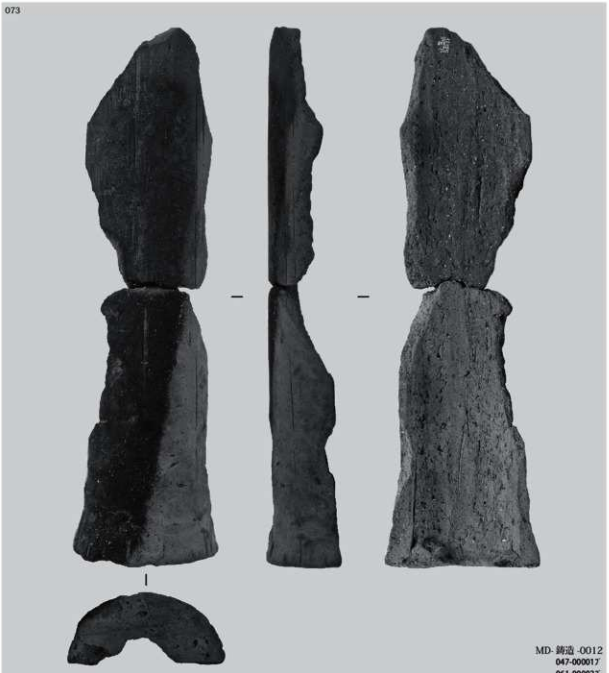


072-2

本土製品は、南地区の第3・61 次調査の区画溝から出土した土製武器鋳型外枠である。7 片から成り、湯口部～身部片(1)と身部片(2)がある。横断面は半円形を呈すが、やや圧し押し潰れた形態である。湯口部の先端は指頭による成形で、あまり丁寧でないため凹凸になる。ただし、内面側に対しては、漏斗状になるように斜面を形成し、薄く尖らせる。身部長軸に並行して2条並行の圧痕線が両側辺と身部中央部にみられ、当て具の痕跡と考えられる。この圧痕線を横断するように植物繊維圧痕があり、当て具である半裁竹管状の棒と外枠を一緒に縛っていたものと推定される。この痕跡は、身部の破片にも連続してみられる。身部の外面は、全体に無調整で処々に指頭によって押さえた痕跡がみられる。内面は全体にケズリ調整で仕上げている。側辺部端面の幅は0.8 ～ 1.0㎝で、接地するように整えられている。本品全体での共伴土器は大和第Ⅲ-3・Ⅳ-1・Ⅴ-1 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第 4 層
土色：　－
取上：イ-405
№　：408
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：15.7
幅　：8.4

073　鋳造関連（50 号土製武器鋳型外枠）　指定 1709



本土製品は、南東端の第 47 次調査の環濠、南地区の第 61 次調査の区画溝から出土した土製武器鋳型外枠である。湯口部および側辺部を欠損する。平面は縦長の長方形、横断面は半円形を呈する。丸太棒に粘土を押し付け、型作りにより成形している。外面に 2 条 1 単位とみられる半裁竹管状圧痕が、基部には半裁竹管状圧痕に直行または斜め方向に横断する植物繊維圧痕が残る。基部下面には、植物繊維または板状の圧痕および砂粒圧痕が残る。基部はふさがれない。外面全体にナデ調整または無調整、部分的にミガキ調整を施す。内面は、湾曲に沿うようにケズリ調整を施す。外面には煤が付着し、基部に被熱痕を有する。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

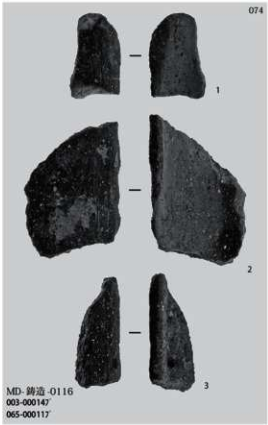
第 61 次調査
遺構：SD-101B
層位：第 5 層
土色：灰黒粘
取上：イ -504
№：624
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：38.5
幅　：10.8

074　鋳造関連（51 号土製武器鋳型外枠）　指定 1710

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層、第65次調査の柱穴・黒褐色土層から出土した。土製武器鋳型外枠の右側辺部の３片である。楕円形の孔１つ（1.1×0.9 ㎝）を内面から穿孔している。右側辺部の外面には当て具の圧痕が残る。内面はケズリ調整を施す。外面は黒斑のため黒色を呈し、内面は暗褐色～淡灰褐色を呈す。本品全体での共伴土器は大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1 様式である。

074-1

第 65 次調査
遺構：Pit-137
層位：　―
土色：黒色砂質土
取上：　―
№　：518
共伴：大和第Ⅳ様式？
残存長：5.4
残存幅：3.4

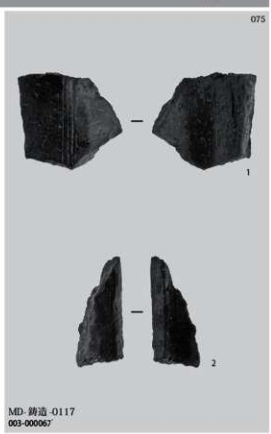


075　鋳造関連（52 号土製武器鋳型外枠）　指定 1711

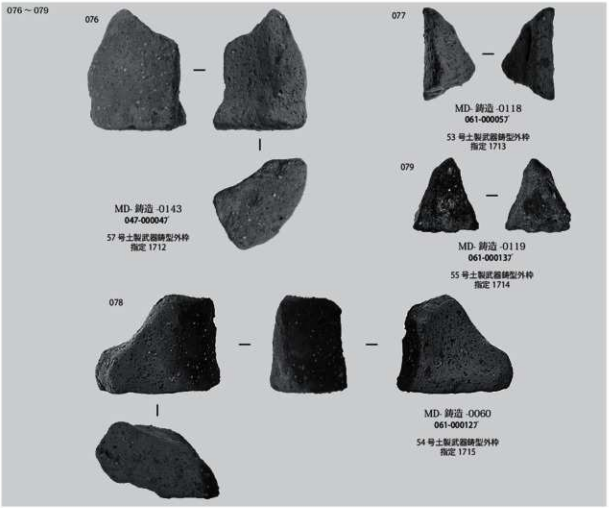
本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した土製武器鋳型外枠の身部中央部～右側辺部片である。径0.7 ㎝程度の小孔２つをあけるが、破断面にあたるため全体は不明である。右側の孔はやや大きめで、内部まで被熱しているようである。外面には当て具の圧痕が残る。内面はケズリ調整を施す。外面は黒斑のため黒色を呈するが、被熱により灰色～灰褐色を呈する部分がある。内面は暗褐色～淡灰褐色を呈する。内面には真土とみられるものが一部に残存している。

075-1

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№　：5672
共伴：　―
残存長：6.3
残存幅：6.9



076 ～ 079　鋳造関連（53 ～ 55・57 号土製武器鋳型外枠）　指定 1712 ～ 1715



	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No.	共伴時期／時代	長	幅
076	第 47 次	SD-2102	第 4 層	明灰黒	－	121	大和第Ⅵ-3 様式	(5.4)	(4.1)
077	第 61 次	SD-102	第 1 層	黒褐色土	－	132	大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式	(4.1)	(2.2)
078	第 61 次	－	－	黒褐色土	－	32	大和第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ-4 様式	(4.4)	(5.6)
079	第 61 次	－	－	黒褐色土	－	38	弥生時代中期・大和第Ⅵ-4 様式	(1.9)	(2.9)

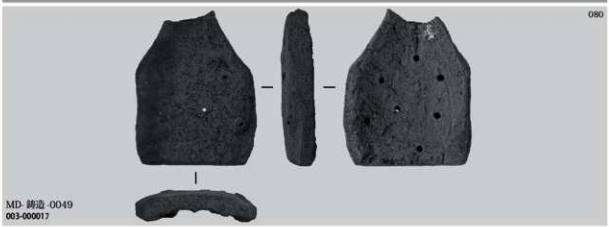
鋳造関連 076 は、南東端の第 47 次調査の環濠から出土した土製武器鋳型外枠の基部片である。円筒状の土製品を半裁している。基部外面には指頭圧痕、円筒部外面には僅かに棒状圧痕が残る。内面はケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅵ-3 様式である。

鋳造関連 077 は、南地区の第 61 次調査の区画溝から出土した土製武器鋳型外枠の左側辺部とみられる破片である。身部中央にかけてかなり厚みを増す形態である。全体的に被熱により淡赤褐色を呈すが、側辺部端面の一部では高熱により灰色に変色している。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式である。

鋳造関連 078 は、南地区の第 61 次調査の黒褐色土層から出土した土製武器鋳型外枠の基部片である。高さはなく、やや扁平な形態を呈する。外面には黒斑を有する。共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ-4 様式である。

鋳造関連 079 は、南地区の第 61 次調査の黒褐色土層から出土した土製武器鋳型外枠の基部底面とみられる破片である。外面に黒斑を有する。共伴土器は弥生時代中期・大和第Ⅵ-4 様式である。

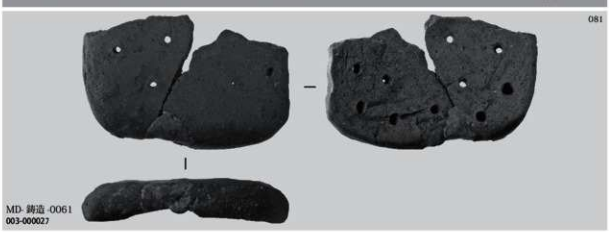
080　鋳造関連（1号土製不明鋳型外枠）　指定 1716



本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した土製不明鋳型外枠である。湯口部を欠損する。身部が四角形、湯口部が台形、横断面形が扁平な蒲鉾形を呈する形態である。身部に径0.5㎝の小孔７つをあけるが、その内４つは未貫通である。外面は縦方向に板状工具の圧痕らしきものが残存するが、全体的に丁寧なナデ調整、湯口部に至る両側面はケズリ調整、内面は全体的にナデ調整を施す。

第３次調査
遺構：SD-105
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№　：5764
共伴：　―
残存長：15.6
幅　：12.0

081　鋳造関連（2号土製不明鋳型外枠）　指定 1717



本土製品は、南地区の第３次調査の環濠と区画溝から出土した土製不明鋳型外枠の身部下半片である。厚さ３㎝程度の平面方形、横断面が蒲鉾形の粘土板を成形したと考えられる。基部や側辺は、一部ケズリもみられるが全体として指頭によって成形しているため、端部は丸く、接地面も水平でなく不揃いである。また、基部も接地面がなく、鋳型を対にすると隙間があくことになる。外面はナデ後、僅かにミガキ調整をおこなう。内面は掻き取るようなケズリをおこなうが、基部・側辺部の立ち上がり部はなく、緩やかに中央部に向かってくぼませている。この外枠には、内面から外面に向かって径0.6㎝前後の孔がアトランダムに11個穿たれているが、そのうち６個が貫通している。

第３次調査
遺構：SD-105
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№　：5765
共伴：　―
残存長：9.5
幅　：14.9

082　鋳造関連（３号土製不明鋳型外枠）　指定 1718

082

MD- 鋳造 -0054
065-000017

本土製品は、南地区の第65次調査の黒褐色土層から出土した土製不明鋳型外枠の身部上半片である。身部に径0.5㎝の小孔５つをあけるが、その内３つは未貫通である。外面はナデ調整、内面は軽いケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ様式である。

第 65 次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土
取上：　－
№　：903
共伴：大和第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ様式
残存長：8.4
残存幅：8.0

083　鋳造関連（４号土製不明鋳型外枠）　指定 1719

083

MD- 鋳造 -0004
077-000017

本土製品は、南地区の第77次調査の区画溝から出土した土製不明鋳型外枠の湯口部片である。湯口部の平面は幅7.4㎝の長方形、横断面は蒲鉾形を呈す。先端は外側に折り曲げ、漏斗状に作っている。側辺端部は欠失しているため、端部の立ち上がりは不明であるが、側辺部は幅1.5㎝前後であり、全体の形状からみてかなり太めである。径0.5㎝の小孔３つが残存する。外面はナデ調整、側辺部はケズリ調整を施す。内面はケズリ調整によって断面「U」字状になるよう、幅3.7㎝ほどくぼませている。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1様式である。

第 77 次調査
遺構：SD-4107
層位：第２層
土色：　－
取上：イ -201
№　：231
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1 様式
残存長：9.8
幅　：7.7

084　鋳造関連（1号高坏形土製品）　指定 1723

本土製品は、南地区の第61次調査の区画溝や黒色粘砂層、第65次調査の井戸・黒褐色土層から出土した高坏形土製品である。坏部の一部を欠損する。14片があり、1片を除き接合する。坏部は半球形を呈し、脚部は安定感のある「ハ」字状に広がる。坏部の底面には円板充填をしていない。坏部完成後に側面に注口を作るが、一部しか残存していないため全体的な形状は不明である。坏部外面の口縁部下約3㎝の6ヶ所に、高さ1㎝程の粘土粒の小突起を貼付する。脚裾部には凹線文2条を施す。全体的に淡褐色～灰褐色もしくは黒褐色を呈しており、外面は特に被熱による煤のため黒色部分や高熱による赤褐色部分がみられる。断面も被熱のため淡赤褐色を呈す。本品全体での共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-4様式である。

084-1

第 61 次調査
遺構：SD-101B
層位：第 4 層
土色：黒色粘砂
取上：イ -401
№　：306
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
復元口径：28.5
長　　さ：22.4

085　鋳造関連（3号高坏形土製品）　指定 1724

085

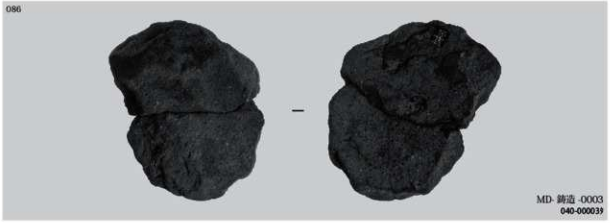
MD- 鋳造 -0009
040-000029

本土製品は、南東端の第40次調査の環濠から出土した高坏形土製品である。坏部～脚部が残存する。脚部は「ハ」字状に広がる。坏部底面は円板充填しておらず、ふさがれていない。坏部に小孔3つが残存している。ハケ後ナデ調整を施す。色調は外面が淡赤褐色、内面が淡褐色を呈す。特に内面は被熱によって色調の変化が認められる。また、一部に焦げによる黒色化がみられる。共伴土器は大和第Ⅴ-1様式である。

第40次調査
遺構：SD-101
層位：第6層
土色：植物層
取上：土-655
№：496
共伴：大和第Ⅴ-1様式
残存高：10.3
残存幅：13.6

086　鋳造関連（5号高坏形土製品）　指定 1725

086



MD- 鋳造 -0003
040-000039

本土製品は、南東端の第40次調査の環濠から出土した高坏形土製品の坏部片である。厚みが約2.5㎝あり、湾曲が少ないことから大形品であったとみられる。共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3様式である。

第40次調査
遺構：SD-102
層位：第4層
土色：黒褐粘
取上：　—
№：195
共伴：大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3様式
残存高：11.2
残存幅：12.6

087　鋳造関連（７号高坏形土製品）　指定 1726

086-1

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝・環濠、第61次調査の区画溝等から出土した高坏形土製品である。坏部および脚部の一部を欠損する。８片から成り、うち６片が接合する。注口を有する椀状の坏部に、高く細い脚部がつく形態である。坏部と脚部は連続成形され、円板充填がされていないため筒状を呈する。坏部の残存部分に径0.9㎝前後の円孔が、約３㎝間隔で多数あけられている。坏部外面の口縁部下約２㎝に粘土粒の小突起を貼付する。突起は横長で、縦に摘まんで成形している。全体の色調は淡褐色であるが、坏部内面の注口下部に灰色の鉱滓状物質が付着しており、被熱によって赤色に変化している。坏部外面はハケ調整後、脚部からの粗いケズリによって消去されている。内面は粗いハケとナデ調整を施す。本品全体での共伴土器は大和第Ⅳ-２・Ⅴ-１・Ⅵ-３・４様式である。

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№：5770
共伴：大和第Ⅳ-２・Ⅴ-１様式
復元口径：25.4
高　　さ：26.1

088　鋳造関連（8号高坏形土製品）　指定 1727

088

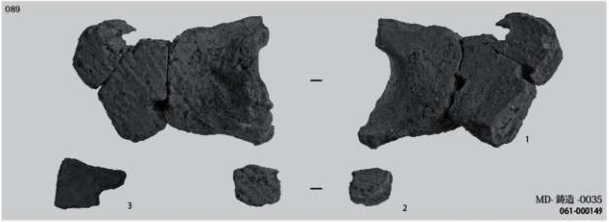
088-1

第 61 次調査
遺構：SD-101B
層位：第 5 層
土色：灰黒粘
取上：イ -503
№　：521
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残 存 高：16.1
復元裾径：15.0

本土製品は、南地区の第61次調査の区画溝、第65次調査の井戸、第47次調査の環濠から出土した高坏形土製品である。坏部および脚部の一部が残存する。4片があり、うち3片が接合する。坏部と脚部は連続成形され、坏部底面は僅かに粘土を付加するが、円板充填にはなっていないため筒状を呈する。坏部の残存部分に径1㎝前後の小孔3つを、また未接合片(2)にも小孔1つをあける。色調は全体的に淡褐色を呈するが、被熱により赤褐色に変化している。特に坏部の断面部分では淡赤褐色を呈す。坏部外面はナデ調整、内面は粗いハケ調整、脚部の内外面はケズリ調整を施す。本品全体での共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1様式である。

089　鋳造関連（14号高坏形土製品）　指定 1728

089



089-1

第 61 次調査
遺構：SD-103B
層位：第 5 層
土色：暗褐色砂質土
取上：　－
№　：679
共伴：大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式
残存高：6.5
残存幅：10.1

本土製品は、南地区の第61次調査の溝から出土した高坏形土製品の坏部片である。5片があり、うち3片が接合する。坏部中央よりやや上に注口部の左端が残存する。外面に粘土を付加し、受け口状に突出させている。(1)には小孔7つ、(2)には1つ、(3)には2つが残存する。被熱しており、全体的に赤褐色に変化している。特に内面の注口部下部は、高熱によって灰色に変色している。坏部外面は左上がりのタタキ調整、内面は粗いハケ調整を施す。本品全体での共伴土器は大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1・Ⅵ-4様式である。

090　鋳造関連（15 号高坏形土製品）　指定 1729

090-1

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝・遺物包含層、第65次調査の黒褐色土層から出土した高坏形土製品である。坏部～脚部の一部が残存する。７片があり、うち４片が接合する。坏部は椀状を呈し、脚部から連続成形しているが円板充填はしていない。坏部には注口の右端が残存している。坏部外面上半は右上がりのタタキ調整、下半は丁寧なナデ調整、内面は粗いハケ調整を施す。脚部はナデ調整とみられる。全体的に淡褐色を呈するが、内面の坏部底面は被熱によって淡灰白色に変化している。特に、坏部の断面部分は淡赤褐色を呈す。第65次調査の黒褐色土層での共伴土器は大和第Ⅵ-3様式である。

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№　：5774
共伴：　－
残存高：21.8
残存幅：22.8

091　鋳造関連（16 号高坏形土製品）　指定 1730

本土製品は、南地区の第 65 次調査の井戸から出土した高坏形土製品の坏部口縁部片である。口縁部は面をもつ。外面に左上がりのタタキ調整を施し、小孔１つをあける。内面は被熱により灰褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ様式である。

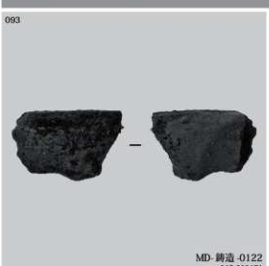
第 65 次調査
遺構：SK-115
層位：第 3 層
土色：黒色粘質土
取上：　—
No ：452
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ様式
残存高：5.8
残存幅：5.9

092　鋳造関連（17 号高坏形土製品）　指定 1731

本土製品は、南地区の第 65 次調査の井戸から出土した高坏形土製品の坏部口縁部片である。立ち上がりが外反ぎみであり、注口付近の破片と推定される。内外面ともに粗いハケ調整を施す。色調は淡褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

第 65 次調査
遺構：SK-134
層位：第 3 層
土色：黒色粘質土
取上：　—
No ：656
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存高：4.6
残存幅：4.8

093　鋳造関連（18 号高坏形土製品）　指定 1732



本土製品は、南地区の第 65 次調査の黒褐色土層Ⅱから出土した高坏形土製品の坏部口縁部片である。口縁部は面をもつ。内面には 0.5 ㎝程の小さな鉱滓の付着が認められ、その周囲は被熱のため淡灰白色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1 様式である。

第 65 次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土Ⅱ
取上：　—
No ：1042
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1 様式
残存高：2.8
残存幅：4.5

094　鋳造関連（19 号高坏形土製品）　指定 1733

093-1

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝、第 61 次調査の区画溝・暗褐色土層から出土した。高坏形土製品の坏部底面片で、５片がある。坏部の屈曲部～底面にかけて、径 0.7 ㎝の小孔８つをあけるが、外面側は焼成後にさらに径 1.5 ㎝程まで孔を広げている。また、未接合片（2）にも小孔１つをあける。外面はケズリ調整、口縁部はヨコナデ調整を施す。色調は淡褐色～淡赤褐色を呈し、坏部内面の一部は被熱により変色している。局所的に鉱滓の付着が認められる。本品全体での共伴土器は大和第Ⅲ-3・Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式である。

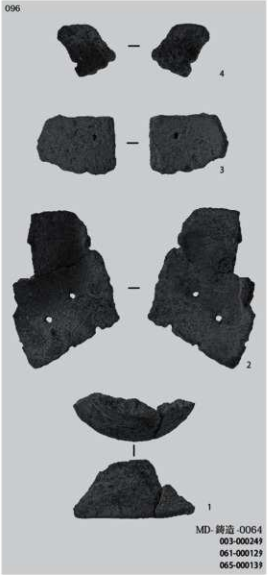
第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№：5780
共伴：　―
残存高：9.4
残存幅：17.0

095　鋳造関連（22 号高坏形土製品）　指定 1734

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した高坏形土製品の坏部中央部片である。外面には注口部分の粘土剝離痕がみられ、注口の右側にあたる破片である。小孔４つが残存する。内面には高熱による変色がみられるとともに、鉱滓の付着が認められる。

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№：5785
共伴：　―
残存高：5.9
残存幅：7.7

096　鋳造関連（23 号高坏形土製品）　指定 1735



本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層、第61 次調査の区画溝、第65 次調査の黒褐色土層から出土した。高坏形土製品の坏部および脚裾部片で、５片がある。坏部口縁部は外上方で広がる形態である。坏部には径0.5㎝程の小孔９つをあけるが、(2)の小孔の１つには真土が充填されている。また、坏部内面の口縁部下2.5 ～ 7.5㎝の範囲には淡黄灰色の真土が付着する。坏部外面上半は粗いハケ調整、下半と口縁部上端は弱いケズリ調整、内面は粗いハケ調整を施す。脚裾部の端部は丸く作る。色調は淡褐色～淡灰褐色を呈す。胎土には0.1㎝以下の砂粒を多量に含んでいる。本品全体での共伴土器は大和第Ⅳ-1・2・Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式である。

096-1

第 65 次調査
遺構：　－
層位：黒褐色土
土色：　－
取上：　－
№：854
共伴：大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式
残 存 高：4.3
復元裾径：11.0

097　鋳造関連（26 号高坏形土製品）　指定 1736

本土製品は、南地区の第 65 次調査の黒褐色土層から出土した高坏形土製品の坏部口縁部片である。外面には粘土粒の小突起を貼り付ける。内面には、縦1.3㎝、横2.5㎝、高さ0.8㎝の鉱滓の塊が盛り上がるように付着しており、この鉱滓の周辺は高熱の影響で灰色に変色している。胎土は、砂粒が細かく少ない。色調は淡褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式である。

097-1

第 65 次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土
取上：　－
№：824
共伴：大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式
残存高：3.3
残存幅：4.0

098　鋳造関連（27 号高坏形土製品）　指定 1737

本土製品は、南地区の第３次調査の井戸、第61次調査の区画溝から出土した。高坏形土製品の坏部～脚部片で、4片が接合した。坏部は椀状を呈する。脚部と坏部は連続成形しており、坏部は円板充填していない。坏部に注口の左上半分が残存している。また、小孔 6 つが残る。坏部下部を除く外面はケズリ調整、内面は丁寧なナデ調整を施す。色調は、外面が暗褐色、内面が淡褐色を呈し、注口部分は被熱により淡赤褐色に変色している。本品全体の共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第 5 層
土色：　―
取上：イ -505
№：690
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1 様式
残存高：17.3
残存幅：16.0

099　鋳造関連（55 号高坏形土製品）　指定 1738

本土製品は、南地区の第３次調査の環濠から出土した高坏形土製品の坏部口縁部片である。半球形の坏部で、器壁は約 1 cm と厚い。外面は粗い縦ハケ後、口縁部付近をヨコナデによって消す。内面はハケ後ナデ調整を施す。坏部には外面から小円孔（径0.7 cm）3 つが残存する。共伴土器は、大和第Ⅴ様式である。

第 3 次調査
遺構：SD-102
層位：　―
土色：黒粘Ⅱ
取上：　―
№：105
共伴：大和第Ⅴ様式
残存長：7.5
残存幅：7.8

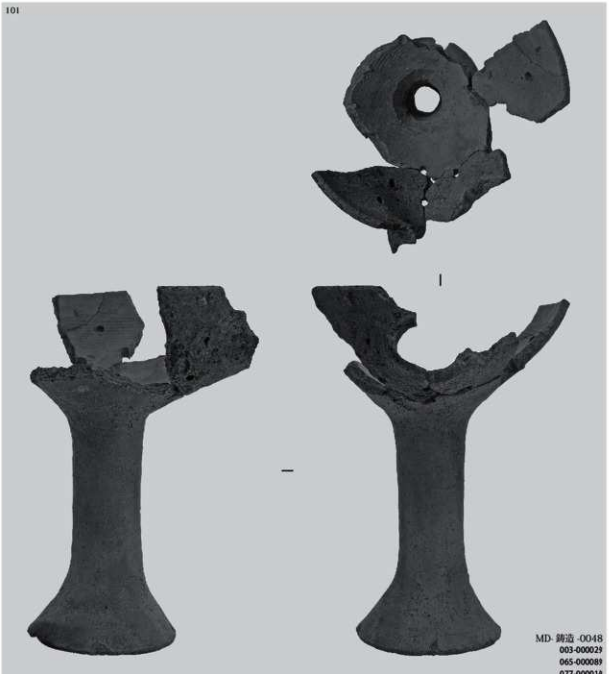
100　鋳造関連（28 号高坏形土製品）　指定 1739

本土製品は、南東端の第40次調査の環濠、第47次調査の環濠、南地区の第３次調査の環濠、第65次調査の土坑等から出土した高坏形土製品である。8 片があり、4 部位から成る坏部～脚裾部の一部を欠損する。坏部は薄手で、外上方へ直線的に広がる。坏部には約 3.5 cm 間隔で小孔が 16 残存する。本品全体での共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式である。

100-1

第 3 次調査
遺構：SD-106
層位：上部砂層
土色：　―
取上：　―
№：5788
共伴：　―
高　さ：30.5
残存幅：16.3

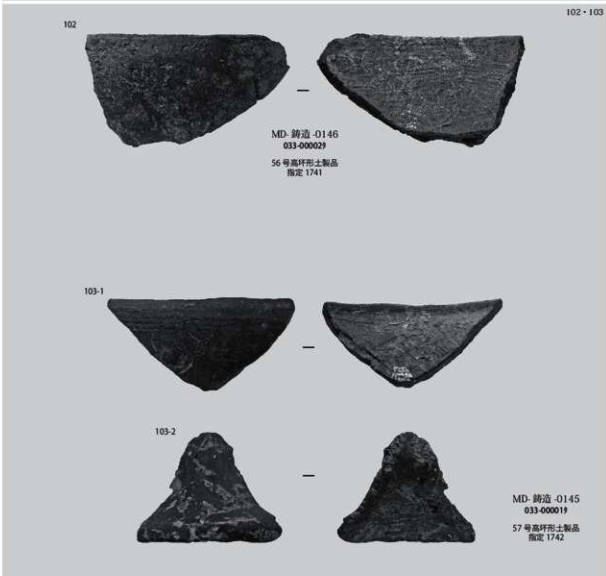
101　鋳造関連（29 号高坏形土製品）　指定 1740



本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝、第65次調査の茶灰色粘質土層、第77次調査の溝から出土した高坏形土製品である。坏部の一部を欠損する。４片が接合する。坏部は薄手で外上方へ直線的に広がる。坏部の内外面はハケ調整、脚部はハケ後のミガキ調整をおこなう。坏部には、3.5㎝程の間隔で小孔を多数あけている。坏部側面中央に注口をあける。注口は、粘土を付加して形を作っていると思われるが、丁寧なナデ調整のため、わからない。内面の注口付近は、被熱により赤橙色に変色している。第77次調査での共伴土器は大和第Ⅵ-4様式である。

第３次調査
遺構：SD-104
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№　：5791
共伴：　―
高　　さ：28.3
復元口径：21.5

102・103　鋳造関連（56・57 号高坏形土製品）　指定 1741・1742



	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No	共伴時期／時代	長さ	幅
102	第 33 次	－	第Ⅳ層	黒褐色粘質土	－	883	大和第Ⅳ-1 様式？	(6.4)	(9.7)
103-1	第 33 次	－	第Ⅳ層	黒褐色粘質土	その 1	839	大和第Ⅲ-2・Ⅳ-1・Ⅴ-1? 様式	(5.3)	(10.0)

鋳造関連 102 は、南地区の第 33 次調査の黒褐色粘質土層から出土した高坏形土製品の坏部口縁部片である。ほぼ直線的に広がる坏部である。口縁端部はやや丸みのある面を有する。外面はケズリ調整、内面は粗い横位ハケを施す。共伴土器は大和第Ⅳ-1 様式？である。

鋳造関連 103 は、南地区の第 33 次調査の井戸や黒褐色粘質土層から出土した高坏形土製品の坏部および脚裾部片である。ほぼ直線的に広がる坏部で、口縁部付近で内湾する。口縁端部は面を有する。外面はタタキ成形後、ナデ・ミガキ調整、内面は粗いハケ調整である。脚部は、柱状部から短く「ハ」字形に広がる裾部である。外面はケズリ後ナデ、内面はケズリである。共伴土器は大和第Ⅲ-3・Ⅳ-1・Ⅴ-1 ？様式である。

104　鋳造関連（30 号高坏形土製品）　指定 1743

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した高坏形土製品の坏部口縁部片である。口縁部は強いヨコナデで凹線を巡らせる。104-1 の外面には粘土粒の貼付けによる突起がみられる。小孔１つが残存する。内外面ともにハケ調整を施すが、外面は摩滅している。色調は淡褐色を呈す。

104-1

第３次調査
遺構：SD-105
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№：5793
共伴：　－
残存高：5.9
残存幅：10.5

105　鋳造関連（33 号高坏形土製品）　指定 1744

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した高坏形土製品の坏部口縁部片である。口縁端部は内側に肥厚する。口縁部が整円を呈さないことから、注口近くの破片と考えられる。小孔３つが残存する。胎土の砂粒は少ない。外面にはタタキ痕が残る。内面は丁寧なナデ調整を施す。色調は淡褐色を呈するが、坏部の内側底面は被熱により淡赤褐色に変色している。

第３次調査
遺構：SD-104
層位：下層
土色：　－
取上：　－
№：5795
共伴：　－
残存高：8.4
残存幅：11.0

106　鋳造関連（36 号高坏形土製品）　指定 1745

本土製品は、南地区の第 61 次調査の区画溝から出土した高坏形土製品の口縁部片である。一般的な高坏の転用品の可能性がある。内面の３㎝程の範囲に厚さ 0.3 ㎝の鉱滓が付着しており、その周囲は灰褐色を呈す。外面は高熱のため赤褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第４層
土色：黒色粘砂
取上：　－
№：286
共伴：大和第Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式
残存長：5.0
残存幅：5.3

107　鋳造関連（39 号高坏形土製品）　指定 1746

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した高坏形土製品の坏部口縁部～注口部片である。注口の上部と口縁部の間隔は 4.5 ㎝を測る。胎土は 0.1 ㎝前後の砂粒を含むが全体的には少なく、焼成は緻密である。時期は不明である。

第３次調査
遺構：SD-104
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№：5800
共伴：　―
残存高：5.3
残存幅：6.0

108　鋳造関連（40 号高坏形土製品）　指定 1747

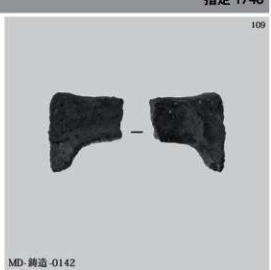
本土製品は、南地区の第 65 次調査の暗黄褐色土層から出土した高坏形土製品の坏部口縁部～注口部片である。注口の上部と口縁部の間隔は 4.4 ㎝を測る。内外面に粘土を貼付け突出させる。高熱のため変色し、一部には鉱滓の付着が認められる。角閃石を含む暗褐色の胎土であることから、奈良盆地東南部産であると考えられる。共伴土器は弥生時代後期である。

第 65 次調査
遺構：　―
層位：　―
土色：暗黄褐色土
取上：　―
№：931
共伴：弥生時代後期
残存高：5.5
残存幅：5.2

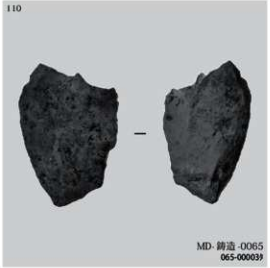
109　鋳造関連（41 号高坏形土製品）　指定 1748

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した高坏形土製品の坏部口縁部～注口部片である。注口部の外面側を突出させる。口縁部はややれい。胎土は砂粒が多く、淡褐色を呈す。内面は高温のため、淡赤褐色～灰褐色に変色している。

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№：5801
共伴：　―
残存高：4.8
残存幅：4.6



110　鋳造関連（42 号高坏形土製品）　指定 1749



本土製品は、南地区の第 65 次調査の井戸から出土した高坏形土製品の注口部片である。坏部に小孔をもたない。注口部の突出は少なく、大きさも小さい。内面は被熱により淡赤褐色を呈し、鉱滓の付着が認められる。胎土は砂粒が少なく、緻密である。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1 様式である。

第 65 次調査
遺構：SK-105
層位：第 2 層
土色：灰褐色砂質土
取上：　－
No.：361
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1 様式
残存高：8.3
残存幅：5.8

111　鋳造関連（43 号高坏形土製品）　指定 1750

本土製品は、南地区の第 3 次調査の区画溝から出土した高坏形土製品の脚部片である。高く細い脚柱部をもち、透孔はない。脚端部には僅かにヨコナデ調整が残る。脚柱部にシボリ痕がみられる。内面にケズリ調整はみられない。

第 3 次調査
遺構：SD-104・105
層位：　－
土色：　－
取上：　－
No.：5802
共伴：　－
残存高：18.2
脚　径：13.0

112　鋳造関連（44 号高坏形土製品）　指定 1751

本土製品は、南東端の第 47 次調査の環濠から出土した高坏形土製品の脚裾部片である。脚裾部に凹線 1 条が巡る。外面はハケ調整、内面はケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

第 47 次調査
遺構：SD-2101
層位：第 8 層
土色：黒褐粘 (植物混)
取上：　—
№ ：403
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残 存 高：7.5
復元裾径：11.9

113　鋳造関連（45 号高坏形土製品）　指定 1752

本土製品は、南地区の第 3 次の区画溝、第 61 次調査の区画溝から出土した高坏形土製品の脚裾部片である。脚裾部に凹線 1 条が巡る。外面はハケ調整、内面はケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅳ-1・2 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第 5(下) 層
土色：灰黒粘
取上：　—
№ ：670
共伴：大和第Ⅳ-1・2 様式
残 存 高：7.3
復元裾径：10.7

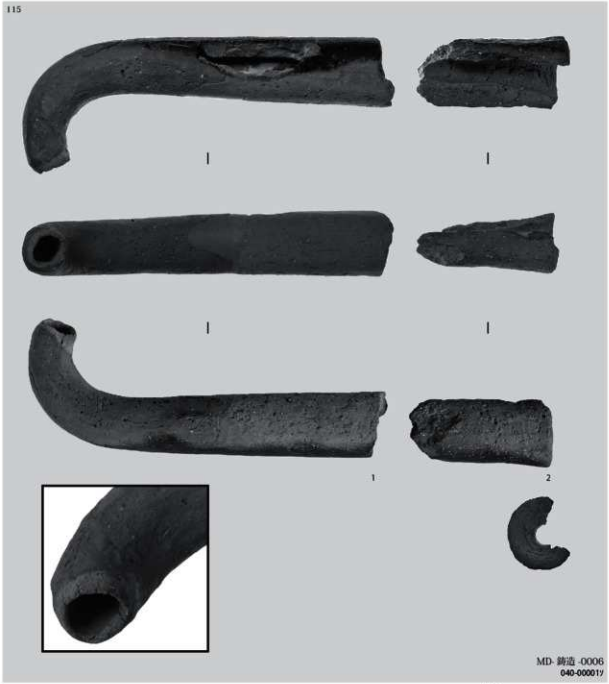
114　鋳造関連（46 号高坏形土製品）　指定 1753

本土製品は、南地区の第 3 次調査の遺物包含層から出土した高坏形土製品の脚裾部片である。内外面ともにケズリ調整を施す。

第 3 次調査
遺構：　—
層位：包含層下面
土色：　—
取上：　—
№ ：5804
共伴：　—
残 存 高：6.9
復元裾径：10.5

115　鋳造関連（1号送風管）　指定 1754

115



本土製品は、南東端の第40次調査の環濠から出土した送風管である。中央部～基部の一部を欠損する。丸棒を芯にして粘土板を巻き付けて成形している。先端は丸棒を抜きながら、タタキと指によって管を細めて曲状にする。基部は断面が漏斗状になるように内面側を削る。全体は粗いケズリ調整を施すが、曲部の外側中央部にはケズリはない。曲部近くでは部分的に浅く細かいケズリ調整を施す。曲部の先端は被熱により淡赤褐色に変色している。共伴土器は弥生時代後期である。

115-1

第40次調査
遺構：SD-102
層位：第4層
土色：　－
取上：フ-401
№　：220
共伴：弥生時代後期
残存長：32.5
外　径：6.0

116　鋳造関連（2号送風管）　指定 1755

本上製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した曲状の送風管の先端部片である。外径約5.5㎝で、内径は曲部分のため変形しているが長軸約3㎝を計る。管は丸棒を芯に成形し、先端は管の厚みを薄くすることで細めの曲状管に成形している。ただし、管の内径はほぼ同じである。全体は粗いケズリをおこなうが、曲状の外側にはケズリはなく、ハケあるいはタタキの痕跡がみられる。保存状態が悪く、全体に淡赤褐色を呈しているが、被熱の可能性もある。また、曲状の先端は、一部欠損しているが、高熱によって赤褐色に変色している部分が、幅0.2 ～ 0.5㎝ほどみられ、さらにその外側も淡褐色に変化している。また、曲状の内側の先端は、やや平坦になっており、使用による磨り減り、あるいは使用時に意識的に削った可能性がある。

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：上層
土色：　－
取上：　－
№：5811
共伴：　－
残存長：12.0
外　径：5.5

117　鋳造関連（3号送風管）　指定 1756

本上製品は、南東端の第47次調査の環濠、南地区の第３次調査の区画溝、第65次調査の黒褐色土層から出土した。送風管の曲部および直管部片で、４片がある。曲部の内側はケズリ調整、外側は幅広のミガキ調整を施す。ミガキ調整の上には縦割りした半裁竹管状の棒の圧痕と繊維痕が残存する。被熱はみられない。(1)の共伴土器は弥生時代中期・大和第Ⅵ-4様式である。

117-1

第 47 次調査
遺構：SD-2101
層位：第４層
土色：灰黒色砂質土
取上：　－
№：133
共伴：弥生時代中期・大和第Ⅵ-4様式
残存長：8.9
残存幅：4.7

118　鋳造関連（4号送風管）　指定 1757

本土製品は、南地区の第65次調査の暗茶褐色土層から出土した送風管の曲部片である。先端部は薄くなり、丸くおさめる。曲部の内側はケズリ調整を施す。色調は、曲面側が暗褐色、内側部分が淡褐色（被熱のためか）を呈す。残存している先端部には、高熱による変色はみられない。共伴土器は弥生時代後期である。

第65次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：暗茶褐色土
取上：　—
No.：807
共伴：弥生時代後期
残存長：3.6
残存幅：4.1

119　鋳造関連（5号送風管）　指定 1758

本土製品は、南地区の第65次調査の黒褐色砂質土層から出土した送風管の曲部片である。外面は全体的にナデ調整で、一部にケズリ調整を施す。先端は欠失しているが、一部淡赤褐色の部分があるため、先端部分に近い破片と考えられる。外面は淡褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ～Ⅵ様式である。

第65次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色砂質土
取上：　—
No.：242
共伴：大和第Ⅳ～Ⅵ様式
残存長：1.8
残存幅：4.5

120　鋳造関連（6号送風管）　指定 1759

本土製品は、南地区の第65次調査の黒褐色土層Ⅱから出土した送風管である。先端の側面付近の破片と考えられる。外面と内面の一部にケズリ調整が残る。外面は被熱によって全体的に赤褐色に変色し、特に先端は高熱によって幅1cm程が暗赤褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ・Ⅴ様式である。

第65次調査
遺構：　—
層位：　—
土色：黒褐色土Ⅱ
取上：　—
No.：268
共伴：大和第Ⅳ・Ⅴ様式
残存長：4.3
残存幅：2.8

121　鋳造関連（7号送風管）　指定 1760

本土製品は、南東端の第47次調査の環濠から出土した送風管の曲部側面片である。曲部側面はケズリ調整、外側はミガキ調整を施す。外面は淡赤褐色を呈す。

第 47 次調査
遺構：SD-2101
層位：第 1 層
土色：灰粘
取上：　－
№：55
共伴：　－
残存長：5.2
残存幅：3.8

122　鋳造関連（8号送風管）　指定 1761

本土製品は、南地区の第3次調査の区画溝から出土した送風管の先端部片である。先端はやや湾曲している。外面は全体的に明瞭なハケ調整を施す。外面は淡褐色を呈し、先端は被熱により淡赤褐色に変色している。

第 3 次調査
遺構：SD-104 ?
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№：5813
共伴：　－
残存長：11.1
残存幅：5.7

123　鋳造関連（9号送風管）　指定 1762

本土製品は、南地区の第65次調査の井戸、黒褐色土層から出土した送風管である。両端部を欠損する。直管とみられる。半裁竹管状の棒圧痕が2条、および紐・繊維圧痕が残存する。全体的にハケ・ケズリで外面を整えるが、ケズリは先端部分に少なく、基部側を中心とする。全体的に淡褐色、部分的に淡赤褐色や灰黒色（被熱によるものか）を呈す。本品全体での共伴土器は大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1様式である。

第 65 次調査
遺構：SK-105
層位：第 4 層
土色：　－
取上：イ-401
№：414
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：34.7
外　径：6.7

124　鋳造関連（10 号送風管）　指定 1763

124

MD-鋳造-0074
003-000047

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した送風管である。両端を欠失する。外径約７㎝、内径約3.3㎝で、重厚感のある送風管である。全体的に保存状態が大変悪い。外面にはケズリ調整と縦割りの半裁竹管状の棒の圧痕、内面には丸棒の抜き取り痕がある。全体的に淡褐色を呈するが、楕円形状の淡赤褐色に変色した部分が局所的にみられ、被熱によるものと考えられる。

124-1

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：上層
土色：　－
取上：　－
№：5814
共伴：　－
残存長：27.3
外　径：7.0

125　鋳造関連（11 号送風管）　指定 1764

125

MD-鋳造-0075
003-000107

本土製品は、南地区の第３次調査の遺物包含層から出土した送風管である。両端を欠失する。外径 6.6 ～ 7㎝、内径約３㎝で、重厚感のある送風管である。外面はケズリと粗いハケ調整を施す。ハケ原体は粗い櫛状のもので特徴的である。また外面には縦割りの半裁竹管状の棒の圧痕、内面には丸棒の抜き取り痕がある。外面は、全体に淡褐色であるが、楕円形状に淡赤褐色を呈する部分があり、被熱の可能性がある。

第３次調査
遺構：　－
層位：包含層下面
土色：　－
取上：　－
№：5821
共伴：　－
残存長：42.4
外　径：7.0

126　鋳造関連（12 号送風管）　指定 1765

本土製品は、南地区の第61次調査の溝から出土した送風管の直管部片である。半裁竹管状の棒圧痕が２条、および紐・繊維圧痕が残存する。外面はケズリ調整を施す。内面には丸棒の抜き取り痕が認められる。共伴土器は大和第Ⅴ-1 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-104
層位：第 2 層
土色：黒色粘砂
取上：　―
№：6
共伴：大和第Ⅴ-1 様式
残存長：14.9
外　径：6.5

127　鋳造関連（13 号送風管）　指定 1766

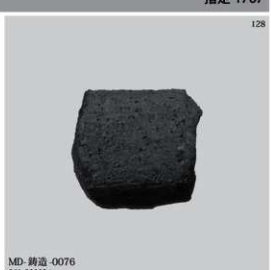
本土製品は、南地区の第61次調査の区画溝から出土した送風管の直管部片である。胎土は0.1㎝以下の細かい砂粒を含むが、全体として緻密である。外面は全体的に淡褐色を呈し、黒斑を有する。共伴土器は大和第Ⅳ-1・Ⅵ-2 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-102B
層位：第 3 層
土色：黒褐色粘砂
取上：　―
№：29
共伴：大和第Ⅳ-1・Ⅵ-2 様式
残存長：14.2
外　径：6.4

128　鋳造関連（14 号送風管）　指定 1767

本土製品は、南地区の第61次調査の区画溝から出土した送風管の直管部片である。半裁竹管状の棒圧痕が２条残存する。外面は全体的に淡褐色を呈し、黒斑を有する。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式である。

第 61 次調査
遺構：SD-102
層位：第 1(下)層
土色：黒褐色土(灰黒粘質)
取上：その 1
№：144
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-4 様式
残存長：6.7
残存幅：6.0



129　鋳造関連（15 号送風管）　指定 1768

129

MD- 鋳造 -0026
065-000047

本土製品は、南地区の第65次調査の土坑、黒褐色土層から出土した送風管である。直管部を半欠する。丸棒を芯にして成形後、棒を抜き取って作っている。外面はハケ調整を施し、内面はシボリ痕が残る。外面は全体的に被熱によって淡赤褐色に変色している。共伴土器は大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1・Ⅵ-3様式である。

第 65 次調査
遺構：SK-157
層位：第 1 層
土色：　－
取上：イ -101
№：878
共伴：大和第Ⅳ-1・Ⅴ-1・Ⅵ-3 様式
残存長：31.0
外　径：6.0

130　鋳造関連（16 号送風管）　指定 1769

130

MD- 鋳造 -0077
003-000077
061-000027

130-1

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝、第61次調査の区画溝から出土した送風管の直管部および基部片である。丸棒を芯に粘土紐を巻き付けることにより成形している。植物繊維圧痕が部分的に残存する。基部は隅丸方形を呈する。外面は全体的にハケ調整だが、部分的にナデ調整でハケ調整を消去している。色調は暗灰褐色を呈す。(2)の第61次調査での共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅵ-4様式である。

第３次調査
遺構：SD-104・105
層位：　－
土色：黒粘 I
取上：　－
№：5823
共伴：　－
残存長：30.0
外　径：7.5

131　鋳造関連（17 号送風管）　指定 1770

本土製品は、南地区の第61次調査の井戸から出土した送風管の基部片である。基部は外側に肥厚し、端部に面をもつ。外面はケズリ調整後、丁寧なナデ調整と軽いミガキ調整を施す。色調は淡褐色を呈するが、基部を中心に焦げ状の暗褐色部分がみられる。共伴土器は大和第Ⅲ-4様式である。

第 61 次調査
遺構：SK-115
層位：第 3 層
土色：　－
取上：イ-301
№　：854
共伴：大和第Ⅲ-4 様式
残存長：14.0
外　径：6.0

MD-鋳造-0019
061-000017

132　鋳造関連（18 号送風管）　指定 1771

本土製品は、南地区の第69次調査の土坑から出土した送風管の基部片である。基部は外側に肥厚し、端部に面をもつ。丸棒を芯にして成形している。外面はケズリ調整後、丁寧なナデ調整と軽いミガキ調整を施す。胎土には0.1㎝以下の砂粒を含む。色調は淡褐色を呈す。共伴土器は大和第Ⅳ-2・Ⅴ様式である。

第 69 次調査
遺構：SK-1136
層位：第 3 層
土色：灰黒粘
取上：　－
№　：2112
共伴：大和第Ⅳ-2・Ⅴ様式
残存長：4.9
外　径：5.3

MD-鋳造-0072
069-000017

133　鋳造関連（19 号送風管）　指定 1772

本土製品は、南地区の第３次調査の区画溝から出土した送風管の基部片である。基部は外側へやや広がる形態で、内側を削り漏斗状とする。端部は面をもつ。外面はケズリ調整を施し、全体的に淡赤褐色を呈す。楕円形状の淡赤褐色部分は被熱とみられる。胎土は、粗い砂粒と赤色斑粒を含む。時期は不明である。

第 3 次調査
遺構：SD-104・105
層位：上層
土色：　－
取上：　－
№　：5826
共伴：　－
残存長：10.1
外　径：6.2

MD-鋳造-0073
003-000057

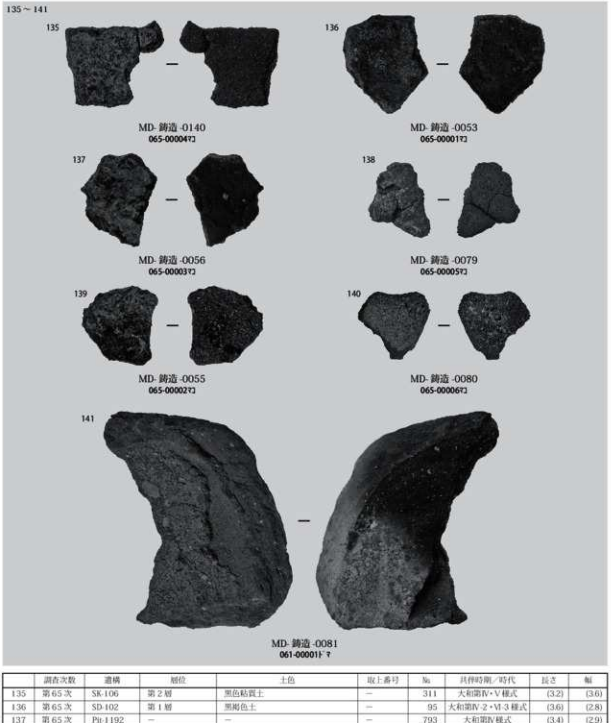
134　鋳造関連（23 号送風管）　指定 1773

本土製品は、西地区中央部の第14次調査の井戸から出土した送風管の直管部片である。丸棒を芯にして成形している。外面はケズリ調整を施す。共伴土器は大和第Ⅵ-3様式である。

第 14 次調査
遺構：SK-106
層位：　－
土色：　－
取上：　－
№　：55
共伴：大和第Ⅵ-3 様式
残存長：9.3
残存幅：5.3

MD-鋳造-0001
014-000017

135 ～ 141　鋳造関連（真土）　指定外



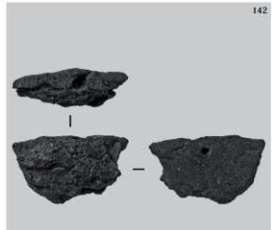
	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No.	共伴時期／時代	長さ	幅
135	第65次	SK-106	第2層	黒色粘質土	－	311	大和第Ⅳ・Ⅴ様式	(3.2)	(3.6)
136	第65次	SD-102	第1層	黒褐色土	－	95	大和第Ⅳ-2・Ⅵ-3様式	(3.6)	(2.8)
137	第65次	Pit-1192	－	－	－	793	大和第Ⅳ様式	(3.4)	(2.9)
138	第65次	SK-115	第3層	黒色粘質土	－	489	大和第Ⅴ-1様式	(2.7)	(2.0)
139	第65次	SD-103	第1(下)層	黒褐色砂質土	－	210	大和第Ⅳ・Ⅵ-3様式	(2.9)	(2.9)
140	第65次	－	－	黒褐色土	－	199	弥生時代中・後期	(2.4)	(2.6)
141	第61次	SD-101B	第4層	黒色粘砂	－	364	大和第Ⅳ-2・Ⅴ-1様式	(3.2)	(3.2)

鋳造関連135 ～ 141は、南地区の第65次調査の井戸等から出土した真土である。鋳造時に土製鋳型外枠や高坏形土製品の内側に貼付したとみられる、精製粘土である。135 ～ 140は高坏形土製品から剥離したものとみられ、140以外には鉱滓が付着している。いずれも被熱しており、色調は灰色～暗赤褐色を呈す。また、表面や断面には発泡がみられる。141は鉢あるいは壷の底部とみられる土器内面に真土状の土が付着したものである。135 ～ 140とは異なり、真土の胎土には0.1㎝前後の砂粒を多く含み、最大では0.7㎝ほどの砂粒もみられる。また、被熱は見られず、淡灰褐色を呈す。これらの共伴土器は大和第Ⅳ～Ⅵ-3様式である。

142　鋳造関連（銅塊）　指定外

本金属製品は、南地区の第61次調査の黒褐色土層Ⅱから出土した青銅塊が付着した真土片である。高坏形土製品の口縁部近くから剝離したものと考えられる。真土は厚さ0.3 ～ 0.5㎝前後で、0.05㎝ほどの石英粒を僅かに含む微細な粘土で構成されている。青銅塊は真土に食い込むように付着しており、長軸3.5㎝、短軸2.1㎝を測る。全体はなだらかな山状になっているが、表面には小さな凹凸があり、最大厚は0.7㎝ほどである。全体的に淡灰色を呈するが、淡灰黄色や緑錆である明緑色を呈する部分がある。共伴土器は大和第Ⅳ-2様式である。

第61次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：黒褐色土Ⅱ
取上：　－
№　：185
共伴：大和第Ⅳ-2様式
長さ：4.0
幅　：2.4



MM-鋳造-0002
061-20001M

143　鋳造関連（銅塊）　指定外

本金属製品は、南地区の第65次調査の暗茶褐色土層から出土した青銅塊である。厚みのある扁形を呈し、円弧部分を復元すると、直径約6㎝の浅い椀状になるとみられる。上面はやや凹凸があるが、下面は比較的なめらかな面となる。円弧と逆の側面部はほぼ垂直で、切断面の可能性がある。円弧側はやや丸みをもつが薄く、徐々に厚みを増し1㎝程となる。上面は鉄分の付着で暗褐色を呈するが、下面は淡緑褐色である。また、側面には気泡がみられる。共伴土器は弥生時代中・後期である。

第65次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：暗茶褐色土
取上：　－
№　：806
共伴：弥生時代中・後期
残存長：2.1
残存幅：3.1

MM-鋳造-0001
065-20001M

144　鋳造関連（銅滴）　指定外

本金属製品は、南地区の第61次調査の区画溝から出土した銅滴、あるいは鉱滓と考えられる滴状の金属粒である。全体は淡灰緑色を呈す。下部はやや丸みをもち、上部は紐状に伸びる形状である。共伴土器は大和第Ⅴ-1様式である。

第61次調査
遺構：SD-102B
層位：第5層
土色：灰黒粘
取上：その9
№　：597
共伴：大和第Ⅴ-1様式
残存長：1.0
残存幅：0.6

MM-鋳造-0003
061-20002M

001 ～ 010　金属製品（銅鏃）　指定 1774 ～ 1783

001 ～ 010

	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	No.	共伴時期／時代	長さ	幅	重さ
001	第 69 次	SD-1102B	第 1(ド) 層	暗褐色粘質土	—	523	大和第Ⅵ様式	3.5	1.0	2.0
002	第 61 次	—	—	黒褐色土	—	559	弥生時代後期	2.6	(1.0)	(1.3)
003	第 3 次	SD-104	—	—	—	5652	大和第Ⅴ様式	3.3	1.0	(1.6)
004	第 69 次	SD-1102B	第 2 層	—	BR-201	516	大和第Ⅵ様式	3.2	1.3	2.5
005	第 79 次	—	—	黒褐色粘質土 (ハード)	BR-101	337	大和第Ⅵ-3・4 様式	3.3	1.1	3.2
006	第 53 次	落ち込みⅡ	第 3 層	黒色粘質土	—	185	大和第Ⅴ様式	3.7	1.0	3.1
007	第 65 次	SD-01	第 1 層	淡灰褐色粘質土	銅鏃 -01	7	弥生時代	4.8	1.9	8.1
008	第 89 次	—	—	廃土	—	489	弥生時代	(4.2)	(2.4)	(5.9)
009	第 61 次	—	—	黒褐色土	銅鏃 -101	1639	弥生時代後期	(3.7)	(2.7)	(2.9)
010	第 33 次	SD-109	第 4・5 層	黒粘	—	193	大和第Ⅴ様式	3.6	2.7	7.7

金属製品001 ～ 010は、銅鏃である。第地区（第３・33・61・65次調査）の環濠、区画溝、遺物包含層、西地区北部（第79・89次調査）の遺物包含層、中央区（第53次調査）の落ち込み状遺構から出土した。青銅器工房跡のある南地区からの出土点数が多い。001は柳葉形、他はいずれも有茎式で、鏃身が長さ２㎝ほどで幅１㎝ほどの小形と長さ３㎝以上、幅２㎝以上の大形がある。008は暗緑褐色を呈す質の良い青銅で、研磨が丁寧である。扁平な茎部や銅質、研磨状態から剣などの武器から鏃に転用された可能性がある。010は先端がやや研磨により短くなっているが、009と同形であり、同じ鋳型からの製作も考えられる。009は鏃身に５つ小円孔を穿孔している。いずれも共伴土器は弥生時代後期以降である。

011　金属製品（鑿）　指定 1784

本金属製品は、南地区の第33次調査の土坑から出土した青銅製の鑿である。折損した細形銅矛片を鑿に転用したもので、外面には樋、内面には袋部が残存している。基部端は折損面のままで研磨はしていない。鑿としての先端部は、内面側から斜めに研磨し片刃をつけている。共伴土器は大和第Ⅱ-2様式で、近畿地方への細形銅矛の流入時期を特定できる重要資料である。

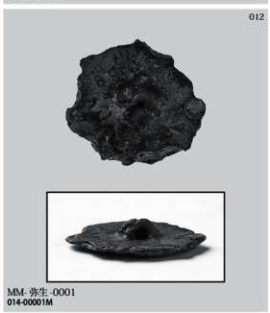
第 33 次調査
遺構：SD-120
層位：第 3 層
土色：植物層
取上：　―
№：857
共伴：大和第Ⅱ-2 様式
長さ：3.1
幅：1.3
重量：7.0

MM-弥生-0004
033-00004M

012　金属製品（素文鏡）　指定 1785

本金属製品は、西地区中央部の第14次調査の遺物包含層から出土した青銅製の素文鏡である。周縁部は欠損しており、鈕とその周辺部が残存している。表面には緑色の錆がみられる。共伴土器は大和第Ⅵ様式である。

第 14 次調査
遺構：　―
層位：包含層
土色：　―
取上：　―
№：158
共伴：大和第Ⅵ様式
残存長：3.7
残存幅：3.2
残存重：7.9



MM-弥生-0001
014-00001M

013　金属製品（巴形銅器）　指定 1786

本金属製品は、北地区の第23次調査の中世小溝から出土した巴形銅器である。座から脚の一部片で、脚は1つのみ残存するが、折れ曲がり欠損する。半円球座で、脚は左捩りの7脚に復元できる。全長の直径は約10㎝で、大形品になる。内面の座の内外縁と脚周縁・脚中央には突線が鋳出されている。

第 23 次調査
遺構：SD-04
層位：　―
土色：　―
取上：　―
№：32
共伴：弥生時代
残存長：2.7
残存幅：1.3
残存重：6.1

MM-弥生-0002
023-00001M

014～016　金属製品（銅釧）　指定 1787・1788

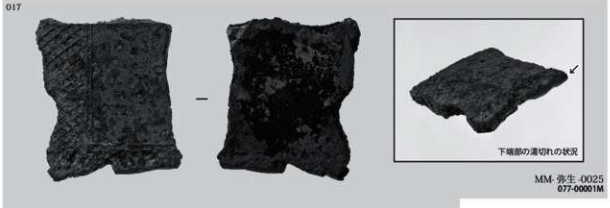
014～016

	調査次数	遺構	層位	土色	取上番号	№	共伴時期／時代	長さ	幅	重さ
014	第 90 次	SD-103	第 1 層	褐色土	－	87	大和第Ⅳ-1 様式	(2.7)	0.6	(1.7)
015	第 69 次	SD-1122	第 1 層	黒灰色粘質土	BR-101	1245	大和第Ⅴ-1 様式	(3.7)	0.4	(1.7)
016	第 69 次	－	－	黒褐色土	BR-01	60	大和第Ⅵ様式	(4.8)	0.4	(2.6)

金属製品014～016は青銅製釧で、014は北西端（第90次調査）の環濠、015・016は南地区（第69次調査）の区画溝・遺物包含層から出土した。014は釧小片であるが、発掘時の圧力により湾曲がなくなっている。横断面形は薄い凸レンズ状を呈する。015は、折損した両端がともに内側に湾曲しており、正円を呈さない。横断面形は薄い凸レンズ状で外面側がやや膨らみをもつ。016は、約1/4が残存する釧で、復元すれば直径約6.5㎝である。横断面形は楕円形を呈する。

017　金属製品（銅鐸片）　指定 1789

017



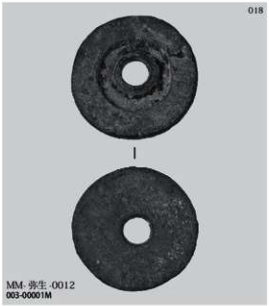
本金属製品は、外縁付鈕２式の四区袈裟襷文銅鐸の身部片である。南地区の第77次調査の暗褐色土層から出土した。この銅鐸片の出土地は、青銅器工房跡のある第65次調査地の南隣接地にあたる。本片は、四区袈裟襷文の左下区にあたり、２本の界線で区画された斜格文を充填した左側縦帯と下辺横帯が残っている。また、残存する区画内の右端には、「⊂」形の突線がみられ、不明絵画の一部とみられる。身部の最大厚は0.9㎝である。また、上端や両側面は破面を呈するのに対し、下端部は丸くなっており湯切れの状況を示している。このような特徴から、本破片は銅鐸を鋳造するにあたり中子が傾き（あるいは浮き上がり）、鋳造に失敗した厚みのある銅鐸をスクラップにしたものと推定される。共伴土器は弥生時代中期後葉～後期である。

第 77 次調査
遺構：　－
層位：　－
土色：暗褐色土
取上：　－
№ ：145
共伴：弥生時代中期後葉～後期
残存長：7.2
残存幅：6.0
残存重：190.5

018　金属製品（有孔円板）　指定 1790

本金属製品は、青銅製の有孔円板で、南地区の第３次調査の青銅器鋳造関連遺物が多数含まれている遺物包含層から出土した。完形品で、部材の一部になると思われる。直径４㎝の円形で0.8㎝の中心孔をもつ。表面は中心孔周縁を一段突出させ、内区（0.4㎝）は凹ませ、幅広の外区（0.9㎝）を作り出している。裏面は平坦である。器面全体がざらついており、鋳放しの状態の可能性がある。共伴土器は大和第Ⅴ-1様式である。

第３次調査
遺構：　－
層位：包含層下部
土色：　－
取上：　－
№：5655
共伴：大和第Ⅴ-1様式
径：4.0
厚：0.5
重量：22.0

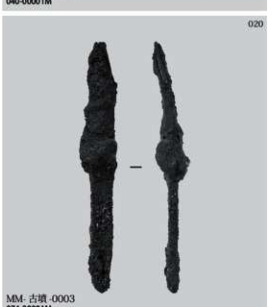


019　金属製品（板状鉄斧）　指定 1791

本金属製品は、鉄製の板状鉄斧で、南東端の第40次調査の環濠から出土した。長さ10.1㎝、幅5.5㎝の短冊形を呈する。上端幅はやや狭くなる。片刃である。完形品であるが、全体に錆化している。共伴土器は大和第Ⅵ-4様式である。

第40次調査
遺構：SD-101
層位：第５層
土色：黒粘
取上：IR-501
№：226
共伴：大和第Ⅵ-4様式
長さ：10.1
幅：5.5
重量：98.1

020　金属製品（鉈）　指定 1792

本金属製品は、鉄製のヤリガンナで、西地区中央部の第74次調査の井戸から出土した。刃部の先端を欠くが、長さ8.3㎝、幅0.7㎝の細長い板状を呈する。刃部は湾曲している。全体に錆化している。共伴土器は庄内式である。

第74次調査
遺構：SK-110
層位：第３層
土色：黒粘
取上：　－
№：230
共伴：庄内式
残存長：8.3
残存幅：0.7
残存重：9.4